

第8回全国

Proceedings & Report
8th SOGEN Summit & Symposium in Kitahiroshima
September 26 to 28, 2009

草原サミット・シンポジウム

草原を核とした豊かな里づくり

— 多様な人と生き物が集う新田園空間 —

期 間：2009年9月26日(土)～28日(月)

会 場：芸北文化ホール(広島県山県郡北広島町)

26日(土)13:00～16:00 / 現地見学会

北広島町芸北地域の草原を見学

27日(日)9:00～16:30 / 第8回全国草原シンポジウム, パネル展示

基調講演：コウノトリと共に生きる～豊岡の挑戦～

中貝宗治氏(兵庫県豊岡市長)

各地からの実践報告：

- みなかみ町「上ノ原 入会の森」人と生き物が入り会う茅場を再生・活用
浅川 潔(森林塾青水 事務局長)
- 景観保護と草原維持の為に大切な野焼き文化
高橋 裕二郎(坊ガツル・飯田高原野焼き実行委員会 副会長)
- 北広島町芸北地域における草原保全活動
川内 信忠(八幡高原地域振興協議会 副会長)

分科会：

- 全国こども草原サミット
- 西中国山地の魅力～登山と草原の関わり～
- 草原と暮らす、私たちの未来

28日(月)9:00～12:00 / 第8回全国草原サミット

主催 / 草原サミット・シンポジウム実行委員会

構成団体 / 八幡高原地域振興協議会、雲月山活性化委員会、西中国山地自然史研究会、雲月小学校、北広島町観光協会芸北支部、芸北旅館民泊業振興協会、
北広島町商工会、全国草原再生ネットワーク、日本山岳会広島支部、広島県山岳連盟、広島大学、北広島町、北広島町教育委員会
後援 / 環境省、農林水産省、広島県、中国新聞社、広島ホームテレビ、中国放送、テレビ新広島、広島テレビ、社広島県観光連盟

事務局 / 北広島町役場 企画課 地域振興係

〒731-1595 広島県山県郡北広島町有田 1234
TEL 0826-72-0856 FAX 0826-72-5242

目次

全国草原シンポジウム開催のご挨拶	1
竹下正彦（北広島町長）	
祝辞	2
星野一昭（環境省自然環境局自然環境計画課長）	
第8回全国草原シンポジウム 基調講演	
コウノトリと共に生きる～豊岡の挑戦～	3
中貝宗治（兵庫県豊岡市長）	
各地からの実践報告1 群馬県みなかみ町「上ノ原 入会の森」	
人と生き物が入り会う茅場を再生・利用	14
浅川 潔（森林塾青水 事務局長）	
各地からの実践報告2 大分県九重町「坊ガツル・飯田高原」	
景観保護と草原維持の為に大切な野焼き文化	18
高橋裕二郎（坊ガツル・飯田高原野焼き実行委員会 副会長）	
各地からの実践報告3 広島県北広島町「八幡高原」	
北広島町芸北地域における草原保全活動	21
川内信忠（八幡高原地域振興協議会 副会長）	
第1分科会 全国子ども草原サミット	24
座長：淀淵可菜（雲月小学校 児童会長） 企画責任者：雲月小学校	
第2分科会 西中国山地の魅力ー登山と草原ー	28
座長：野島信隆（（一社）広島県山岳連盟普及部部长，（社）日本山岳会広島支部環境委員会副委員長） 企画責任者：広島県山岳連盟・（社）日本山岳会広島支部	
第3分科会 草原と暮らす，私たちの未来	34
座長：宮本裕之（雲月山活性化委員会事務局長） 企画責任者：八幡高原地域振興協議会・雲月山活性化委員会・西日本草原研究グループ	
サテライト分科会 草原の持続可能な利用と生物多様性	42
コーディネーター：中越信和（広島大学大学院国際協力研究科・教授） 日時：2009年9月4日（金）10:00～12:00 場所：広島大学大学院国際協力研究科2階201教室	
第8回全国草原シンポジウム全体討論会	44
座長：高橋佳孝（全国草原再生ネットワーク会長） パネラー：淀淵可菜，上田 琳（雲月小学校）・野島信隆（（一社）広島県山岳連盟・（社）日本山岳会広島支部） 宮本裕之（雲月山活性化委員会）・中越信和（広島大学大学院国際協力研究科）	
第8回全国草原サミット	56
議長：竹下正彦（北広島町長） 参加者：竹内敏朗（鳥取県江府町長）・竹腰創一（島根県大田市長）・小坂真治（広島県安芸太田町長）・ 永尾宗忠（大分県九重町副町長）・河津修司（阿蘇市町村会長，熊本県南小国町長）	
写真で振り返る現地見学会と会場風景	74
新聞報道	76

開催のご挨拶

竹下正彦（北広島町長）

おはようございます。地元の北広島町の町長の竹下でございます。本日は、朝早くからの開会に、こうして沢山の方々に御参加を頂きまして誠にありがとうございます。

一口に草原と言っても、地域や見る人によって漠としており、「これが草原だ」ということは中々難しいのではないかと思います。我が国、もちろんこの北広島町芸北地域においても、草原の恩恵は人々の生活にとって、非常に貴重です。しかし、戦後の経済的な発展、工業的な発展、農業の変貌という中で、段々とその価値が忘れられようとしています。本日は、草原の持っている多様な価値や重要な意味を改めて見直していこう、ということで、地域の方々、NPOなど様々な団体あるいは地域地域のボランティアとして草原と向き合い、日頃から活動されてる方々、大学の研究者など、日頃から草原と向き合い活動されてる方々がお集まりでございます。全国草原サミット・シンポジウムというたいへん意義のある会を、この北広島町で開催させて頂きまして、本当に光栄に思いますと共に、町・県内はもとより全国各地から御出を頂きまして、心から御礼を申し上げるとともに、ご歓迎いたします。

本日のシンポジウムでは、豊岡市の中貝市長さんに基調講演を頂きます。私は、市長さんにお会いしたのは先ほどが初めてですが、NHKのテレビで豊岡市のコウノトリ自然復帰の番組を見ました。コウノトリが自然に生きていくためには、餌となるドジョウやカエルが必要なわけですが、農家にとっては田んぼを守っていくのが大変な事です。そこで豊岡市では、農家と一体となった取り組みをされています。私は、行政の首長という同じ立場にある者として、豊岡市では、どうしてそのような取り組みが実現できたのか、そこを今日は是非ともお聞きしたいと思っています。ご多忙なか、遠い所を、こうして朝早くから駆けつけていただきました中貝市長に、厚く御礼を申し上げたいと存じます。



竹下正彦 町長

また本日は、群馬県みなかみ町の取り組み、大分県坊ガツル・飯田高原の取り組み、そして地元北広島町からは芸北の八幡湿原自然再生事業の取り組みなど、全国の実践的な事例の発表をして頂きます。午後からは、全国こども草原サミットなど、分科会に分かれて、草原をテーマにした多様な議論を頂き、全国草原シンポジウムでは、その総括をしていただくことになっております。さらに明日は、第8回全国草原サミットということで、全国12の市町村から首長にお出で頂きます。サミットでは、草原を持つ地域の行政が、何を課題とし、草原を保全・活用するためにどのような施策を進めていくのか、という視点から議論を交わらせていただこうと思っております。

この第8回全国草原サミット・シンポジウムが、ご参加をいただきました皆様にとりまして、充実した2日間になるよう、ご期待を申し上げ、祈念をいたします。この催しを開催するにあたりまして、地元北広島町芸北の方々、そして沢山のご関係の方々にご理解と大変なご協力をいただきました。このことにつきましても改めて厚く御礼を申し上げます。

それではどうぞ、よろしくご祈願申し上げます。ありがとうございました。

祝辞

星野一昭（環境省自然環境局自然環境計画課長）

この度は、第8回全国草原サミット・シンポジウムが開催されますことを心よりお喜び申し上げます。環境省においては、生物多様性の保全および持続可能な利用にむけて各所の政策を実施しているところであり、熊本県の阿蘇くじゅう国立公園内などの草原においても、人が利用することにより、様々な生き物が生息・生育する環境が守られてきた二次的自然の保全、再生の取り組みを支援している所です。

来年10月には愛知県名古屋市において生物多様性条約第10回締約国会議、通称COP10が開催されます。この会議では、191の国と地域から約1万人が集まり、将来に渡り生物多様性の保全などを進めていくための方策が議論されます。環境省としては、この機会に関係者と連携して我が国の「恵み豊かな生物多様性を育む生き物賑わいの国作り」を目指した全国の機運を高めてまいりたいと考えております。今回、全国各地の皆様が集まり草原の保全と活用について議論されることは、我が国の多様な生物を、古来より育んできた各



猪口恵助氏による祝辞の代読

地の草原環境を守っていくという観点からも大変意義深い物だと考えております。

結びになりますが、本シンポジウムのご成功を祈念いたしまして、あいさつに代えさせていただきますと存じます。



コウノトリと共に生きる～豊岡の挑戦～

中貝宗治（兵庫県豊岡市長）

中貝宗治（なかがい むねはる）



兵庫県豊岡市生まれ。兵庫県職員，県議会議員を経て2001年7月から現職。

2005年9月24日，日本の空から一度は姿を消したコウノトリが再び豊岡の空へ。「コウノトリも住める豊かな自然環境や文化環境の創造は，人間にとってもすばらしいものに違いない」という信念のもと，コウノトリをシンボルにしたまちづくりを展開。まちの将来像「コウノトリ悠然と舞う ふるさと」の実現を目指す。著書に「鶴（こうのとり）飛ぶ夢」（2000年7月）

おはようございます。昨日車で5時間かけて，豊岡からやってまいりました。お招きをいただきましてありがとうございます。今日はコウノトリを巡る豊岡の果てしない物語，「ネバーエンディングストーリー」の一端を紹介させていただいて，少しでもみなさんのご参考になればと思います。

私の話というのは，ほとんどが湿地の話です。今日のテーマは「草原」でして，草原と湿地とちがいはありますけれども，どちらもモンスーンアジアにおいては（日本がそこにあるわけですが），放っておくと林に帰ってしまう。つまり自然に帰ってしまつて，湿地が維持できない，あるいは草原が維持できないという意味では共通ものがございます。人間がうまく関与してやる必要がある，ということでの共通点があるのかなと思います。

豊岡は兵庫県の北部，日本海に面した町です。人口9万人足らずの町です。ちょっとご紹介をします。築82年の豊岡市役所です。

ズワイガニは，マツバガニと呼んだりいたしますが大変おいしい蟹でありまして，11月の6日が解禁でございますのでまた是非お越しをいただきたいと思います。

城崎温泉も豊岡です。うまくいけば，こんな人と出会うことができるかもしれません。

美しい海もあります。日本の渚100選，日本の快水浴場百選といった美しいなごさのある町です。お犬様には専用のビーチもあります。このわんちゃん，

海から上がると温泉に入ることができますので，とろーっとした顔をしております。

神鍋高原もあります。これはスキー場になってるんですが，2万年前に噴火した火山です。草原になってまして，今日本中で草原が失われていってますけれども，かなり重要な部分が実はスキー場で守られている，と言う風にも言われています。クロシジミという草原生の蝶がこの神鍋にも住んでおりますけれども，これはこれで色んな生き物の棲みかになっております。

出石^{いずし}という小京都もあります。「出石そば」という蕎麦があるのですが，この蕎麦だけを目当てに年間80万人の方がやってこられる。そば屋さんが40軒ぐらあります。江戸時代の城下町の趣きをもっておりまして，近畿に現存する最古の芝居小屋を昨年復活させました。歌舞伎でこけら落としをしたところです。

山あいには但東という町があります。これはチュー



リップまつりの写真です。農家民宿もございまして、どぶろくがあります。昨日もたらふくどぶろくをこちらで頂きまして、それに負けないぐらいおいしいどぶろくもございまして。

オオサンショウウオも沢山あります。平成 16 年の台風 23 号で大量に川の上流からオオサンショウウオが流されて、そして多くの人々が、こんなにいたのか、と気づきました。400 頭あまりが捕獲をされまして、そして河川改修がすむまでニジマスの養殖場の方で疎開をしておりました。そして、河川改修が終わると、400 頭のオオサンショウウオはまた元の故郷に帰って行きました。

また、大変おいしい食材のあるところですので、(こちらもおいしい物いっぱいありますけれども)是非お越しをいただきたいと思います。

これは豊岡の中心市街地を空から見た写真です。町の真ん中を円山川が日本海に向かってゆったりと流れています。市役所はこの辺りにあります。今私が光で指しているこの辺りで河口から 10 キロメートル上流になりますが、カレイが釣れます。アジが釣れます。円山川の河川勾配、川の傾きは 1 万分の 1 です。10 キロメートル上流まで行っても高低差わずか 1 メートル、100 メートルで高低差わずか 1 センチメートルという、ほとんど水平状態の川ですので、川底には海の水が忍び込んできています。ですから、風が無いときには、鏡のような美しい水面をしています。ところがこの河川勾配が極端に小さいということは、水はけの悪さも意味いたします。平成 16 年台風 23 号で豊岡は泥の海に沈みました。ちょっと大雨が降ると水浸しになりやすい場所、低湿地帯といえます。人間が住むうえでは結構やっかいな場所です。

その低湿地帯とか、湿地が大好きな生き物が沢山います。今からその低湿地、あるいは湿地が好きな生き物の豊岡の代表例を二つご覧いただきます。この女性ではありません。こっちです。コリヤナギという種類のヤナギです。湿地を好む植物でありまして、円山川の氾濫が作り出す湿地に自生をしておりました。そしてこのコリヤナギを使って出来た産業が柳行李です。豊岡は江戸時代に日本最大の柳行李の産地でありました。先ほどの女性はその柳行李を作る伝統工芸士の女性であります。時代の変化にともなって、こんなふうにとってを付けてみると、鞆に変わりました。今豊岡は皮を除くと、日本の生産の 7 割を担当する日本最大の鞆の産地です。なかなか素敵な鞆もあります。

ちょっと前の週刊誌の写真ですが、雅子様と愛子様、そしてこれは、豊岡で編まれた柳のバスケットです。この写真が出る前は、11,000 円で買うことが出来ましたが、今や 35,000 円出さないと買えなくなりました。豊岡の自然があって、コリヤナギが自生をして柳行李産業ができて、鞆産業に変わった。その地の自然が、産業を育てるという一つの典型例です。



そして、湿地が大好きな生き物のもう一つの代表例がこれです。コウノトリ。羽を広げると 2 m もある白い大きな鳥です。かつては日本のいたるところで見られる鳥でした。里山の大きな松の上に巣を作って、この辺りの水田や川の浅瀬で餌をとっていました。カエルやナマズやドジョウやフナ、こういう物を大好物とする生き物です。今でこそ田んぼは機械が入りやすいように、必要な時以外は水がない、乾いた田んぼ「乾田」になってますが、ちょっと前までの日本中の田んぼはこんな感じでした。どこが水路か水田かわかわかり、一年中水浸しの田んぼがあちらこちらにありました。そこには一年を通じてカエルやナマズやドジョウやフナが居るわけでありましたから、コウノトリにとって格好の台所、餌場でした。

ところが、明治になって鉄砲が解禁をされてまず狩猟、ハンティングで数を減らします。第二次世界大戦中に大量に松が伐採されて、ねぐらを追われ、そして最後は戦後の環境破壊によって数を減らし、1971 年今から 38 年前日本の野生最後の 1 羽が豊岡で死んで、コウノトリは日本の空から消えました。とどめをさしたのは農薬です。

その絶滅に先立ってコウノトリを守ろうという運動が豊岡でおき、1965 年、44 年前に飛んでいた鳥を捕まえて鳥かごに入れて、そして人工飼育が始まりま

した。しかし最初の24年間、来る年も来る年も1羽の雛も孵りませんでした。絶望もありました。批判もありました。コウノトリが増えていくという確信を誰も持たないまま、言わば暗闇の中を黙々と人工飼育が続けられて行きます。

転機は1985年におきます。ロシアのハバロフスクから6羽の若い鳥が送られてきました。当時兵庫県から飼育を委託されていた豊岡市役所の職員が一生懸命育ててカップルができ、1989年平成元年人工飼育の開始から実に25年目の春、待望の雛が誕生します。そして21年連続で雛が孵って、今138羽のコウノトリが豊岡に暮らしています。その内の35羽が再び自由に豊岡の空を飛んでいます。

野生での絶滅から38年、人工飼育の開始から44年、豊岡でコウノトリの保護活動が明確な形をとって、54年になります。長い時間と膨大なエネルギー、そして沢山のお金が必要でした。これからも、おそらくそうだろうと思います。なぜそれほどまでにして、豊岡はコウノトリを空に帰そうとするのか。狙いが大きく3つあります。

一つは人間とコウノトリとの約束を守ろうということです。44年前に、飛んでいた鳥を捕まえて鳥かごの中に閉じこめました。安全な餌を与えていつか増えたら、また空に帰すと言うことを当時の人々は誓いました。言うなれば、人間はコウノトリと約束をした。私達は約束を守って、コウノトリをもう一度本来の場所に帰さなければなりません。

二つめ。野生生物の保護に関する、世界的な貢献をしようというものです。ヨーロッパには、極東のコウノトリとは別の種のクチバシの赤いコウノトリがいます。こちらは80万羽以上いると言われていて、特に問題はありません。ところがクチバシの黒い別の種の極東のコウノトリは、世界中合わせてもせいぜい3,000羽だと言われていています。絶滅寸前の鳥です。その保護に関して世界的な貢献をしようというのが二つめ。

そして三つめ。今度は観点を変えて、コウノトリも住める環境とはどういう環境なのかということに関わります。コウノトリは大型の完全肉食の鳥です。あんな鳥でも、また野生で暮らすことができるようになったとすると、そこには膨大な量の、そして沢山の種類の生き物が存在するはずで、そのような豊かな自然は、人間にとっても素晴らしい自然なのではないか。

もう一つあります。どんなに自然が豊かになって、

餌が豊富になったとしても、飛んできた鳥に闇雲に鉄砲を撃つ。そういう文化の所にコウノトリは暮らすことはできません。「あんな鳥も近くに居ていいよね」という、おおらかな文化が人間の側になければならない。そこで、コウノトリを空に帰そうという事を合い言葉にしてコウノトリも住めるような豊かな環境、すなわち豊かな自然と豊かな文化をもう一度取り戻そうというのが三つめの、そして最大の狙いです。それを実現するために、様々な取り組みが行われてきました。

1999年、兵庫県は豊岡市内に50万坪、165ヘクタール、165万平方メートルの土地を買い求めて県立コウノトリの郷公園を作りました。その一角に県立大学の研究所を置いて、教授・準教授以下1講座を置いて野生化の研究と実践が進められています。その一角に豊岡市がコウノトリ文化館を設けて、普及啓発をやっています。こんなふうですぐ近くでコウノトリをご覧いただくことができます。

アイガモ農法。アイガモは草を食べます。虫を食べます。したがって草を殺し虫を殺す薬である農薬を使う必要はありません。フンは有機の肥料になります。さらにアイガモは水かきを使ってさかんに泳ぎ回ります。田んぼの水が濁ります。濁ると光が田んぼの地面に届きにくくなります。草の種があっても光合成がおきにくい、草が生えにくくなります。完全有機無農薬のお米ができます。市内に6ヘクタール、約6万平方メートルこういう田んぼがあります。

ビオトープ水田。ビオトープの「ビオ」はバイオ、生き物、「トープ」は場所、生き物が棲む場所と言った意味です。休耕田を利用して草の管理をしていただきますと、生き物がワッとわいてきます。それらはもちろんコウノトリの餌にもなります。ビオトープ水田は、市内に9ヘクタールあります。

これは田んぼで干上がって死んでしまったオタマジャクシの写真です。豊岡の辺りでは、6月頃に「中干し」といって一度田んぼから水を抜きます。ところがアマガエル、トノサマガエルは大半がまだオタマジャクシです。干からびて死んでしまいます。なんとかこれを救うことはできないのか。これはアカガエルというカエルの卵です。アカガエルは2月頃から3月頃にかけて卵を産むカエルです。その頃田んぼには水がありません。なんとかアカガエルを増やすことはできないだろうか。そこで、まず冬に農家をお願いをして、水を張っていただきます。これによってアカガエルが増えます。中干しをひと月ずらしていただきま

す。この間に、オタマジャクシがカエルに変わります。その後水がなくなっても、カエルはどこへでも逃げていくことができます。こんなふうにカエルを増やす努力をしてまいりました。それはもちろんヘビの餌にもなりますし、コウノトリの餌にもなります。市内に65ヘクタール、65万平方メートルこういう田んぼがあります。そして実はこの「冬水田んぼ」は、農法としても実はきわめてすぐれた農法であることがわかってきています。

「水田魚道」です。これが田んぼの高さ、水路はこの位置です。水はけをよくするためにこんな落差ができてしまいました。その結果、生き物の行き来が閉ざされてしまいました。しかし、たとえばナマズなどは、本当は川から水路、田んぼに入って卵を産む。生まれた稚魚がすこし大きくなると今度は田んぼから水路、川へ帰っていく。こういう循環がありました。ところが断ち切られてしまいました。そこで兵庫県の土地改良事務所の人達がこんな水田魚道を作ってみました。ほんとに役立っているのか。中干しをした時に、この水田魚道を使って逃げてきたドジョウを一網打尽した写真です。ドジョウはたしかにこの水田魚道を使っていました。それ以外にも色々な生き物がこの水田魚道を使って行き来することが確認されています。現在110カ所、こういう水田魚道がありまして兵庫県と豊岡市が費用を折半をして設置をしています。

これは生き物の逃げ場です。ここも田んぼです。深く掘っています。そしてわざわざこのあぜを作りました。中干しをする水が無くなるんですが、こちらには水が残ります。生き物はここに逃げてきます。サギとか敵から守るためには、この板の下に身を隠せばいい。こういった、シェルターと呼んでますけど、逃げ場も作ってまいりました。

国土交通省がビオトープの再生をしています。河川敷にです。河川敷を深く掘ったり浅く掘ってビオトープにしてやりますと生き物の宝庫になっています。2005年に兵庫県と国土交通省が「自然再生計画」というものを作りました。堤外湿地、河川敷内の湿地面積を約3倍、200ヘクタールに増やす。こういった計画を作りまして、現在着実に進んでいます。

これは中貝という人が乗ってる市長公用車ですが、ここにコウノトリ。これは民間のバス会社ですが、大阪・城崎温泉に行き来するバスにもコウノトリ。飛行機にもコウノトリ。コウノトリミュージカルまでできました。これは何かと言いますとふるさと戦隊コウノ

トリレンジャー。市民有志がこういったコスチュームを買って、色々なイベントに出かけて行って「環境破壊をする悪者は誰だ！」ってやっています。この中の何人かは豊岡市役所の幹部職員であることが判明しております。コウノトリの着ぐるみも作りました。これですコーちゃんです。市の職員のデザインです。こっちはオオサンショウウオのオーちゃんといいます。コウノトリの絵馬とお守りもございまして、大変よく効きます。こんな努力を積み重ねて来まして、2005年の秋、コウノトリ未来国際会議が豊岡で開かれてその日の午後、続々と人々がコウノトリの郷公園にやってまいります。

そして歴史的瞬間がやってきます。

野生での絶滅から34年が経過をしておりまして。最初の1羽が飛んだ時に、「やったー」という大きな声がありました。それは私の声でありました。その後も様々な努力が積み重ねられています。「ひのそ島」という中州が円山川にありました。約16ヘクタールです。水はけをよくするためにこの島を取ってしまうという計画が上がりまして。しかしそれでは自然破壊になってしまう。そこで、半分だけこの「ひのそ島」を掘削して止水にも役立つ。しかし、同時に生き物の住む場所にもする。ちゃんとコウノトリが降り立つようになりました。

城崎温泉の円山川の対岸に、「戸島」というところがあります。そこに大変な「じる田」、湿地がありました。「嫁殺し」というふうに呼ばれておりました。膝まで浸かって田植えをしなければいけない。しかも、200mから300mの細長い田んぼでありまして、一度田植えを始めたら200mから300mを膝まで浸かりながらやらないと休むことができない。なぜか「夫殺し」と言わずに「嫁殺し」と呼んでいますが、そういう田んぼがありました。こんな田んぼが嫌だということで土地改良の工事が始まりました。その工事の順番を待ってる間、休耕田にしていたところこんなふうにミズアオイ、絶滅寸前の植物が一斉に花を咲かせました。

そして2005年の夏、毎日のように大陸からやってきた野生のコウノトリが餌を採りに来るようになりました。これはサギの餌を横取りしようとして失敗したときの写真です。このまま放っておきますと、工事が進んで、この美しい光景は未来永劫失われてしまいます。「なんとか守ることはできないのか」という声が市民からあがり、そこで豊岡市が農家の理解を得て、

約4ヘクタールの用地を確保し、湿地公園として整備をしました。先ほどの野生のコウノトリは、8月5日に来たところからハチゴローという名前で親しまれていました。4年半豊岡を飛び回ってそして私達にコウノトリと共に暮らすというのはこういうことかというイメージを与えてくれました。まだ放鳥する前の事でありましたので、豊岡は新たな勇気を得ました。4年半後、この鳥は原因不明で死んでしまいました。しかし私達は、ハチゴローのおかげでこの場所の大切さがわかった。コウノトリと共に暮らす事のイメージを持つことができた。その感謝の気持ちを未来永劫伝えようということで、この湿地の名前を正式に「ハチゴローの戸島湿地」と名付けました。この場所では今年と昨年、2年続けて合計5羽のコウノトリが巣立っています。この一帯をラムサール条約、湿地を守る条約ですがその登録湿地にしようということで、今その運動を進めているところです。

1960年、49年前豊岡市内で撮られた写真です。子供達はたんぼ道を学校に行こうとしているのか、集団だからたぶん朝だと思います。2羽のコウノトリがここに居て、あたかも行ってらっしゃいと言わんばかりに子供達を見送っています。1960年、49年前の写真です。2006年の写真です。40数年たって、またあの光景がもどってきました。こんな感じです。そして、2007年の5月20日日本の野外では、43年ぶりに雛が孵りそして、46年ぶりに巣立って行きました。

巣立った雛たちの動きをちょっとご紹介します。昨年生まれた鳥の行動の記録です。1羽目ですが豊岡を出まして奈良県に行きました。また兵庫県の三田に帰ってきまして、豊岡に一度帰ってききましたが、今治市に行きまして西予市に行きまして上郡町に行きまして伊予市に行きまして、香川県三豊市に行きまして、何してんでしょうね。西予市に行きまして、帰ってきました。そして上郡町に行って、ここで「さっちゃん」という名前で住民票をいただいております。今は西予市におります。

2羽目です。篠山市に行きました。そして猪名川町、兵庫県内ですが、グーンと飛んで佐世保で発見されました。東広島、おいしい、もうちょっとあればこまでと。松江に行きまして、佐用町まで帰ってききましたが倉敷市に行きまして、大田に行きまして倉敷、出雲、雲南、山口県に行きました。

3羽目です。今まだ倉敷にいます。南淡路市に行きまして、与謝野町、京都府に行きまして一度帰ってき

ましたが西予市に行って、この辺結構好きなんですね。今治に行きまして、淡路まで帰って来ましたが、周南市に行きまして五島列島まで行きまして、そして益田に行って松江に行って実はここで交通事故にあって死んでしまいました。非常に頻りに広範囲に飛び回っております。この辺りにいてもおかしい感じがいたします。

こんなふう自然放鳥が順調に進み始めた今、私達が次に開いた扉はこれです。環境経済戦略です。環境を良くする行動が経済を活性化する。俗な言葉でいうと「儲かる」。環境を良くして儲かるなら、もっと環境を良くしたらもっと儲かるぞ、というふうに欲がわいて環境をよくする行動がさらに広がっていく。そういう関係を豊岡は環境経済と名付けました。環境と経済には様々な関係があります。一方で、経済が環境を徹底していじめながら環境を破壊しながら経済が発展するという関係があります。これは典型的には公害です。もう一方で環境を守るための経済をとことんいじめてやるという関係があります。しかし、そのどちらでもない。環境と経済は共鳴する関係があるはずだ。それを今豊岡で具体例を積み重ねています。狙いが三つあります。

一つは持続可能性です。環境行動自体の持続可能性です。環境を良くしようとする行動は、頭ではわかります。しかし、なかなか長続きしない。アール・ゴアさんの『不都合な真実』という映画を見て「そうだ、地球温暖化対策がんばらなあかん」と言っても、今日帰ったら早速電気をこまめに消そうと思っても、3日長続きをしない。これは、環境行動の厳しい現実です。しかし、長く続けなければ実は事態を変えることはできない。広げていかなければ、環境を良くする事はできない。そのためには、経済によって裏打ちされる事が極めて有効であるという経験則を述べています。

二つめは自立です。地方も、以前に増して自立を求められるようになりました。自分で食えということですから。そのためには、経済を元気にしなければいけない。しかし日本の片田舎で、ではどういう分野なら経済の発展の可能性が残されているのか。それは環境の分野なのではないか、というのがこの自立という意味です。

そして最後は誇りです。もし私達が環境破壊によってではなくって、環境を良くする、まさにそのことによって生計を立てている、そういう町を作ることができるとすれば、私達は自分自身を大いに誇らしく思うことができるだろう。これは豊岡だけでの話じゃあり

ません。もし日本が環境を良くするまさにそのことによって、経済の発展を遂げている。そういう国になることができれば、私達は世界に向かって自分たちの国を誇りに思うことができるのではないかと、そう思います。

具体例です。豊岡に太陽電池を作るカネカソーラテックという企業があります。大半は、ドイツを中心にヨーロッパで売られています。これはヨーロッパの畑に設置された豊岡産の太陽電池です。もし世界中の人々が地球温暖化対策に貢献しようとして、太陽電池を買えば買うほどCO₂は減ります。そしてこの企業は儲かります。雇用も発生するし、税収も増える。環境と経済は矛盾しないという一つの例です。

豊岡の会社がこんなことを考えました。廃タイヤ、ゴミです。それを地面に穴を掘ってドーナツ状に重ねて壁を作りました。この中に、このドーナツの壁があります。こちらを重機でガガガと揺ります。振動がこの壁をくぐる時にどれだけ減るのか。実験をやってみました。何にもない時です。ここが震源地。ここを揺ると、確かに遠離るにしたがって震動は減ってきますけど、それほどではありません。ところが、タイヤを入れると見事に減りました。実際、大阪府でこの工法が採用されました。モノレールが走っていて、周辺の住宅が震動で苦しんでいる。この対策がありませんでした。彼らは豊岡にたどり着きました。そしてこの工事が終わったところ、見事に震動は低減されました。廃タイヤ対策といえばゴミ対策が震動対策に繋がって、しかもこの会社は儲かる。環境と経済は矛盾をしないという二つめの例です。

もちろん農業も決定的に重要です。コウノトリに最後にとどめをさしたのは農業でした。しかし、だからと言って農業はけしからんと言うだけでは事態は何も変わりません。なぜか。日本は、モンスーンアジアにあって暑い夏に大量の雨が降ります。梅雨です。光と水に恵まれる事が光合成の条件です。草はあっという間に生えてきます。虫も湧きます。日本の農業は草との戦い、虫との戦いだと言われてきました。そしてそれは大変な重労働でありました。したがって、農業を使うなど言うためには二つの事を同時にやる必要があります。一つは、では農業に頼らなくても簡単にお米ができる、野菜が採れるよという農法をちゃんと作り上げること。もう一つは、とは言っても手間暇かかる農法の産物をちゃんと消費者が高く買い支える。こういう仕組みを作ること。その二つが大切であります。

豊岡はその両方をやってきました。

これはそのうちの農法に関する物ですが、ここでは虫対策だけご紹介いたします。農薬を使わないと殺虫剤を使わないと稲にウンカがつきます。害虫です。しかし、クモがちゃんと発生してウンカを食べます。クモをカエルが食べます。カエルはヘビが食べます。カエルやヘビをコウノトリが食べます。この自然界の食べたり食べられたりする関係を農業に置き換えていこう。例えばそういう農法です。よくごらんください。カメムシをちゃんとカエルが食べてくれています。この農法の、水稻の作付け面積の推移です。上が無農薬、下が減農薬といっても75%以上農薬をカットしたものです。豊岡市内の「作付け面積の推移」です。猛烈な勢いで伸びています。しかも、このお米は減農薬タイプで約6割、無農薬タイプで約10割高く店頭で売られています。この5月からはイトーヨーカドー、日本最大の小売り業者でありますけれども、東京を中心に111店舗でコウノトリのお米が売られています。

もう一つが消費と生産を適切に結びつける、ブランド化戦略です。兵庫県と豊岡市がそれぞれこのブランドを作りました。こちらが兵庫県の基本になるもののマークで、こちらのマークが条件を上乗せをした難し



い方の豊岡市の基準です。安全な農法にもとづいて作られたお米である野菜であるということ、豊岡市あるいは兵庫県が認証するとういうシールを貼っているよ、という制度を作りました。初売りの時には、私も売りに行きました。こんな風にシールが付いています。大体2割以上高く野菜でも売られています。その作付け面積の推移です。これも猛烈な勢いで増えてきています。

コウノトリのお酒もできました。ほんと嬉しそうな顔をしています。他にもいっぱいできました。無農薬、減農薬の豊岡の酒米でお酒を作りたいという、そういった酒造会社が増えてきています。これなんかは4合で5千円、一升瓶が一万円のお酒であります。

コウノトリ観光も盛んになってきました。JTB、日本最大の旅行会社でありますけれども、コウノトリを見て城崎温泉に泊まってコウノトリのお米を食べてメインディッシュは「但馬牛」。大変な人気を博しています。コウノトリ文化館の入館者数の推移です。2005年の秋に放鳥が行われました。最近ちょっと落ちてますけれども、それでも40万人以上の人々がコウノトリの郷公園に来るようになりました。この人達を手ぶらで帰していいのかということになりまして、駐車場にお店を作りました。これは市の施設ですが、コウノトリ本舗と名付けました。コウノトリのお米やコウノトリグッズが売られています。つまり、豊岡が環境を良くすればするほど沢山のコウノトリが空を飛んで沢山のお客様が豊岡にやってくる。お金を落とすしていく。これも環境と経済が矛盾しないという一つの例です。中国から高校生がやってきました。大学生も中国からやってきました。環境学習旅行です。小学生も修学旅行で中国からやってきました。東京大学の招きで研究者がヨーロッパからやってきました。韓国から農業者も勉強にやってくるようになりました。

放鳥が始まったとき、こんな声が市民からでました。「人間は野生に帰らなくていいのか」。そりゃそうだ、ということで、子供の野生復帰大作戦というものを繰り広げています。そういえば豊岡は、世界的な大冒険家、植村直己さんの故郷であります。子供達に冬山のトレッキングをさせたり、滝つぼに飛び込ませたり、川で遊ばせたり、木登りをさせたり、田んぼで泥んこ遊びをさせたり。海もあります。私もちょっとやってみました。スノーケリングをやるとすぐにエチゼンクラゲに遭遇しました。これタツノオトシゴです。浜辺から3、4mの所で捕獲をいたしました。

これは豊岡の合い言葉です。「がんばれ泥んこチルドレン子供の野生復帰大作戦」というものであります。実はこれをやるには明確な教育的狙いがあります。それは、道徳観の充実した子供を作ろうというものであります。日本の子供達の道徳観がどうもおかしいと言いますが、かねてから言われておりました。もうずいぶん前ですけれども、文部省の委託を受けて調査が行われました。日本、韓国、イタリア、ドイツ、イギリスだったと思いますけれども、同じ年代の子供達に同じ質問をしました。電車やバスの中で体の弱い人に席をゆずった事があるか、よくある、ときどきある、あんまりない、まったくない。いじめをしてる友達をやめさせた事があるか、よくある、あんまりない、まったくない。日本の子供は最低点でありました。非常に高い点を取った質問があります。ルールをやぶった事があるか。日本の子供達の道徳観、やっばどうもおかしいという事が国際比較でわかってきました。ところが日本の子供の中でも高い道徳観を持っている者、そうでない子がいます。さらにそれは何が効いてるのか詳しく調べました。

わかったことが三つ。一つは、お手伝い体験をいっぱいしてる子供ほど道徳観が充実をしている。二つめは、生活体験をいっぱいしてる子供もほど道徳観が充実してる。そして三つめ、自然体験をいっぱいしてる子供ほど道徳観が充実している。

ところが、私達の国は何をやってきたか。よい子は川で遊ばない。子供達がおかしくなるのはある意味で当然の事でありました。子供達を自然の中に帰そうというのが私達の狙いです。これまでのコウノトリを巡る様々な取り組みによって、田んぼの中に色々な生き物が帰ってきました。カエルやナマズやドジョウやフナも帰ってきました。コハクチョウもこんな風にやってくるようになりました。コウノトリも帰ってきました。しかし、田んぼの風景の中に帰ってきたものなかで、私達がかもっとも誇りに思うものはこれです。子供達。子供達がまた田んぼの中に帰ってきました。

そして、新田小学校という学校があります。これは台風23号で泥の海に沈んだ小学校であります。子供達の家も3分の1ぐらいは浸かってしまいました。そして、その時に子供達は考えました。私達の暮らしぶりと自然とのつきあいの中に何か問題があったのではないのか。そして、自然の事を勉強するようになりました。そうしてるうちに、この豊岡、特にこの子供達の地域でコウノトリを育む農法が広がっている事を

知りました。じゃあもっと勉強しようということで、子供達は田んぼに出かけて行って農家の方々にコウノトリを育む農法を教えてもらいました。

そして、わかった事が一つ。消費が増えれば増えるほど生産が増える。コウノトリ育む農法を広げる為には、コウノトリのお米をたくさんの人に食べてもらうことだ。どうしたらいいんだろう。ふと見ると学校の近くにコンビニがありました。子供達は自分達の主張をこんなふうに紙に書いて店長さんに会いに行きました。そして、自分たちの主張をぶつけて、「店長さんあそこに売ってるおにぎり、コウノトリのお米で作ってくれませんか」というふうにお問い合わせをしました。しかし、こういった仕組みのコンビニですので残念ながらまだ実現はしていません。

しかし、子供達はそれで負けたりはしませんでした。次は、学校給食だ。学校給食で使ってもらうためには誰に頼んだらいいんだ。そうだ、市長だ。ということで、子供達は自分たちだけでアポをとって、私の所にやってきました。本当に驚きました。その子供達の行動力と論理の確かさ。私は子供達に約束しました、「使う」。ただし、普通の米より6割高い米です。豊岡は、一週間5日の給食の内、4回は地元産のコシヒカリを使っていてあと一日はパンの給食でありました。検討してみると、2ヶ月に3回の割合なら給食費を上げなくてもこの高いお米を使う事ができるということがわかりました。一昨年の10月から2ヶ月に3回の割合ですけれども、学校給食のお米にこのコウノトリのお米を使うようにいたしました。

そして、実は今年の1月、寄付金の使い道を私達は議論しておりました。毎年2,000万円程度、色々な方々からコウノトリのために使ってと言って、寄付をいただきます。200万ぐらい頂く企業もあれば、10円とか100円を「コウノトリ文化館」にチャリオンとおいて行かれる方もあります。その時、この子供達の事を思い出しました。パン食やってた一日をこのコウノトリのお米にしよう。その差額を寄付金の一部でまかなう事にしよう。そしてこの4月から週五日とも豊岡産のお米になりました。そのうち一日はコウノトリのお米を使っています。このことによって、週一回だけではありますけれども、一年間でご飯茶碗34万杯。水田の面積にして、7ヘクタール7万平方メートル、コウノトリを育む農法のお米が広がった事になります。子供達の行動が7ヘクタール、豊岡の環境を良くしました。

そしてさらに、子供達は自分たちでもこのお米を作りたいと言うことを考えました。そして、どうせ作るなら完全無農薬。しかも、水田魚道も作りたい。ところがこの水田魚道を普通に作ると60万ぐらいかかります。とても手がでない。子供達はどうしたか、森林組合に行きました。おっちゃん達はホロッと来てしまって「いいよ。材料ならタダでやるよ。持っていき」と言って、そして大人達の力も借りて水田魚道ができました。今バンザーイってやっています。この水田魚道は、ちゃんとナマズが上り下りをしてることが確認されています。そして、自分たちでこれは米ぬかをまいてるところだと思いますが、苗床を作り田植えもして、そしてお米ができました。

しかし、この子供達はここでは止まりません。作った米を売らなければならない。そこで、町の真真中に青空市場というのがあるんですが、そこに目をつけました。ここは場所代を払って、色々な人達が自分の作った農産物とかあるいは魚を持ってきて売る場所ですけれども、管理人さんに言いました。また、管理人のおっちゃんがほろっときてしまって、「いいよ。タダで使っていていいよ」。子供達はちゃっかりしていました。ちゃんと記者発表して、マスコミがバーッと来ました。あっという間に、売り切れ完売でありました。

色々な事のお話をしてきましたけれども、ようするにこれは何の活動なのだろうか。失われた大切な物を取り戻す。ということではないかと思います。実はこの前提として、私達には大切な物があつたという、私達は大切な物を持っていたという強烈な意識、誇りがあります。そして、それが失われてしまったんだ。それを私達に取り戻す。取り戻してそれを守り、育て、そして次の世代へと引き渡していこう。それが、言うなれば私達の「決意」であります。

1960年、49年前豊岡市内で撮られた写真です。農家の女性。99歳でご健在です。7頭の但馬牛、12羽のコウノトリ。この距離で暮らしていました。そして、十数年前私達はこの写真を使って、大きなポスターを作りました。そのポスターに、「35年前みんなで暮らしていた」という言葉をそえました。同時に「私達は、人間の努力を信じます」という言葉をそえました。十数年前にこのポスターを作った時に、「あのお婆ちゃんはお婆ちゃんらしい」という事になって、豊岡市の職員と新聞記者がインタビューに行きました。ところがこの女性は、「そんな30何年も昔の事、しかも後ろ姿だ。自分かどうかはわからない。だけれ

ども、この牛はうち牛だ」。一つの同じ家の中に、仲良く暮らしていた時代がありました。そしてこの女性は、ひたすら牛の話をされて、コウノトリの話はほとんどされずに牛の話をひたすらされて、最後にこう言われたんだそうです。

「あの頃は、心が本当に豊かでした」

私達が何を失ってきたのか、何を取り戻そうとしているのか。この一枚の写真が象徴的に示しているように思います。2007年、同じ場所です。ここまで帰ってきました。しかし、まだここまでしか帰ってきません。これは、2008年10月19日、昨年撮られた写真です。これは、町の中心街です。ここに1羽飛んでいます。合計18羽のコウノトリが円山川に降り立ちました。実はこれは、河川敷がこの辺りまでありました。水の流れを良くするために国土交通省が治水事業、河川改修をして切り下げました。しかし、その切り下げるときに深く切り下げずに浅く意識して切り下げてくれました。その結果、こんなふうのコウノトリが舞い降りるようになりました。国土交通省の河川改修というともう最近は大変人気が悪くて、自然破壊だって声もありますけれども、少なくともこのコウノトリの取り組みをめぐる言えば、河川改修と自然再生というのがあれでうまく融合している。そういった例が出てきています。

果てしない道のりを歩んでまいりました。ただ、いつかきっと空に帰ると信じて。あるいはいつか鳥かごに鳥を入れた人々は、「いつか空に帰したい」。その思いをずっとひたすら持ち続けて、そしてようやく実現をいたしました。しかし、まだ農家の女性は居ませんし、牛も帰ってはいません。その意味ではこれからまだまだ果てしない道を私達は歩いていくことになります。このコウノトリをめぐる取り組みの、長い長い歩みを思う時にいつも心に浮かぶ言葉があります。「願うこと」「願い続けること」「投げ出さないこと」。(会場拍手)ありがとうございます。

先ほど、一つのキーワードとして失われた大切な物を取り戻すということをお話をいたしました。実はもう一つこのコウノトリをめぐる取り組みのキーワードがあります。それは「命への共感」です。今から日本の野外で43年ぶりに生まれて、46年ぶりに巣立って行った最初のコウノトリの誕生から巣立ちまで、約3分間の映像をご覧ください。この時に、ほんとにたくさんの人々が拍手喝采をおくりました。当時の、参議院、河野洋平議長から私宛に祝電が届きました。これはとっても不思議な事でした。この広い広い日本の中で、たった1羽コウノトリが生まれ巣立っていった。ただそれだけなんです。にもかかわらず、なぜあれほどまでに人々は拍手喝采を送ったのか。それはやっぱ



り、「命への共感」って事だと思えます。賢明に生きようとする命、賢明に守ろうとする命。人間とコウノトリと姿形は違いますけれども、たった一回限りの限られた命を持つ。そこに同じ命としての共感を私達は持っていたのではないかと思います。あのコウノトリの親子の姿は私達の人間の姿でもあります。このコウノトリをめぐる長い長い物語の、2つめのキーワードは「命への共感」だと思えます。

今日明日草原についての様々な取り組みのご報告がなされ、あるいは議論が交わされ、さらに「この地の草原を良くしていこうや」というたぶんそういう決意がなされるんだろうと思えます。しかし、それはただ草が生えている場所ではありません。そこにも、たくさん生き物がある。しかもその生き物は、原始的なものではなくって、人間がちゃんと草原を管理しているからこそ生きられる生き物だろうと思えます。その意味では、まさに人間と生き物との間に共感を持つという、同じような取り組みではないかなと思えます。豊岡は豊岡の道を歩んで参ります。みなさんはそれぞれの道をそれぞれでしっかりと歩いていただきたいというふうに思えます。

とりあえず私の話はここで終わらせていただいて、もしよろしければ何かご質問があれば受けさせていただきたいと思えます。ありがとうございました。

—— 今、毎年何羽コウノトリが羽化しているか、それから今後、また放鳥していく予定があるのかどうかちょっと聞かせていただきたいと思えます。

中貝 年によってばらつきがありますが大体 10 羽前後、増えてきています。生まれるのはもっと生まれるんですけども途中で色々な事情で死んでしまったりして、今年は 9 羽、野外で雛が巣立ちました。飼育下でも何羽か生まれてますので、大体 10 羽前後です。



放鳥をこれからもするのかというお尋ねなんですけど、今年の秋に放鳥いたします。放鳥にも色々な方法がありまして、いきなりバーツと放す放鳥もあれば鳥かごを田んぼの中に作りまして、一定期間過ごさせて、「ここがあんたの住む所だよ」と覚えさせてから扉を開けるという。それが今年の秋なされます。それからもう一つありまして、雛をちゃんと孵す経験を持っているカップルを田んぼの中の鳥かごに入れて、次の年の春に雛が誕生し、巣立つとその雛だけを外に出していくという、3種類の方法で放鳥がなされてまして、今年の秋、もうすぐですけどもなされます。

ただ、その先やるかどうかはわかっていません。野外でも順調に巣立って増えていって、今日の段階でも 35 羽になっています。ですから、これから研究者の方が議論をして今後の取り組みを決めていく事になるのではないかと思います。

野外だけでも今年も 9 羽増えましたので、おそらくいつまでも豊岡には収まっていられないだろうと。飽和状態になってくると、現にさっきみたいに色々な所に飛んでいきますから、ひょっとしたら皆さんの所に来るかもしれません。ただ、居着くかどうかはその自然と人々が良いかどうかにかかっていますので、もしみなさんの所に来て居着いて欲しいわ、と思うのだったら、今の自然再生を大いに頑張っていたいただければなと思えます。

—— こうした数の少なくなった生物の復活というのは、少ない数から繁殖を繰り返していくということで、近親交配を進めていく事になるのではないかなと思うんですが、その辺は大丈夫なんでしょうか。

中貝 仰るとおり、非常に心配な点であります。実は、この極東のコウノトリは、国際的な血統管理の種に指定をされてまして、少なくとも飼育下にあるコウノトリはこの鳥の親は誰なのか、というふうにきちんと解っていて、意識してその血が濃くならないような交配をするようにしています。さらに、ロシアの方で捕獲された野生の鳥が豊岡の方に送られてきたり、あるいは逆に、豊岡で生まれた鳥を国内の他の動物園へ持って行ったり。来年は、ロシアに持って行って、ロシアで放そうという計画もあります。ということで、今できる範囲内での血統管理はなされています。とはいいながら全体で、せいぜい 3000 羽ぐらいですから、実は不安ではある、ということも言えます。

— 今話を伺いまして、取り組みに対してもっとも熱心にやられてるのが中貝市長というふうに理解をしたんですが、市長がそのように熱心に取り組まれるようになった、経緯といいますか、市長自身の生い立ちといいますか、そういったものをお話いただければと思います。

中貝 私は、豊岡生まれの豊岡育ちで、浪人中と大学と京都に行きまして、それから県庁に13年勤めておりました。県会議員をしていた父親が死んでいまして悪名高い二世議員として故郷に帰りました。それまでコウノトリの事は、何の感心も持っておりませんでしたが、市の職員がうまく私をおだてまして飼育場につれて行きました。

そして、ずっとコウノトリの保護にかけてきた職員に会いました。その職員から、コウノトリをいつか空に帰したいんだという思いを聞きました。それまでの長い歩みも知りました。「じーんときちゃった」と、いうことですね。なんていうか、人間が人間に惚れるみたいな。そんなに努力をして、辛い目にあいながら希望を捨てずに来た人がいる。その夢をかなえたいと言うのが、いわば情動としてわき上がってきたということですね。

さらに調べてみるとこれは気持ちを熱くするだけではなくて、ちゃんとした理念を持っている。一度失われてしまった種を保存するという、すごく大切な理念がある。さらに実は、その向こうにその種を守ろうとするとその種を生かしている環境を元に戻さなければいけないってところがあって、これはまさに環境問題のシンボルである。さらにやってみると、これはどうも経済にもつながる。政治家として大切なことは、地域の活性化でもありますから、単に美しい理念で子孫を守るだけじゃなくって、そのことによって地域が元気になるのであればこんなに良い事はない。

と言うような事があって、面白くてどんどんどんどんやってきたわけですが、幸いにしているんなキーパーソンが出てきました。飼育員で松島という飼育員がいます。市の職員でも上手く私をおだてたり、あっちおだてたりして仲間に巻き込むような職員もおりました。農業の分野では、ひたすら有機農業をやってくれる農業者も沢山いました。それから技術を開発し教えるという、県の普及センターの普及員なんかもおりました。そんなことで、色んな人達が仲間に入ってきてくれたのでそれに励まされてここまで来る事ができたかなと思っています。



各地からの実践報告1 群馬県みなかみ町「上ノ原 入会の森」

人と生き物が入り会う茅場を再生・利用

浅川 潔（森林塾青水 事務局長）

群馬県のみなかみ町上ノ原で、私ども森林塾青水がおこなっている活動とフィールドの紹介をいたします。私ども森林塾青水は、ほとんどの会員がみなかみ町には住んでいなく、首都圏に住んでいる人が集まっている団体です。それなのになぜ、みなかみ町の草原保全活動をおこなっているのか、お話ししていきます。

私どもが保全活動をしているみなかみ町は、知名度が高い谷川岳や東には尾瀬、日本の名山である武尊山や、朝日岳などに囲まれた地域です。最近のニュースでも話題となっている八ッ場ダムなど、群馬県は非常にダムの多い地域です。みなかみ町は、利根川の最上流域で首都圏の水道の80%といわれている利根川の水瓶、水源地域にあります。みなかみ町は平成17年に月夜野町、新治村、それから水上町が合併し、平仮名の「みなかみ町」となりました。今までは、主に団体のお客さんをターゲットにした温泉観光が非常に強い、観光が産業の中心です。北広島町と同じように、雪が非常に多い地域で、スキー場、そしてやはり一番は温泉、それから先ほどのダムが有名な町です。喝水になるとよくニュースに出ます矢木沢ダムは、利根川の源流にあります。上ノ原はみなかみ町の中でもさらに上の方の藤原地区にあります。その上ノ原のゴルフ場の一番外れの所に上ノ原「入会の森」があり、私どもは町から借り受けて管理をしています。側には、宝台樹スキー場という、スキー場があります。

私どもがちょうど3年前に、藤原地区の地域資源調査を行い、地域の資源を元に藤原の地区のすばらしい自然・資源・歴史・文化を伝えていこうと、ガイドマップを作りました。我々のフィールドは、ほんとに小さい場所ですが、集落と結ぶ古道などが残っている地域です。藤原の風景としては、芸北と同じように田畑と里山が共存するような地域です。

我々が管理している「上ノ原入会の森」は、全体が21ヘクタールです。かつては200ヘクタールの上ノ原高原という草原でしたが、ゴルフ場などに開発され、最後に残された21ヘクタールの内の11ヘクタール、



猫の額みたいな草原です。南側にはカラマツの人工林、それから草原以外の場所はミズナラを主体とした薪炭林で、全体は集落の入会地として利用されていた場所です。21ヘクタールという狭いところですけど、非常に恵まれていたのは、ここには草原・ミズナラ林があり、それから真中に十郎太沢が流れていて、非常に多様な生態系が楽しめる点です。20年前ぐらい前に群馬県が自然調査をした時には、ススキ草原には県の約6割の蝶がいるという報告があり、やはり草原は生き物が非常にたくさんいる場所になっていることがわかります。この21ヘクタールの旧入会地を、茅場の再生ということで、生物の調査をしながら、活用を進めています。

藤原地区には、自然を感じることができる「古道」が結構残っています。地域資源を調査しながら、古道の整備などを行い、里道の活用から人・里・資源の活用を進め、人と生き物が入り会う現代版入会地を考えています。元々は地元の入会地でしたが、現在は、みなかみ町の所有になっています。それを我々首都圏の住民と地元、それから行政が一緒になって、新しい入会的なルールづくりや、新しい観光資源づくりを進めています。私どもがこのフィールドを活動の拠点にしたのは、首都圏の水源という理由です。私も利根川の下流の浦安というところに住んでいますが、飲む水の

源を考えてということで、「飲水資源」という言葉を我々は合言葉にしています。この藤原地区も高齢化率が4割という所で、小学生も10人、中学生も10人ぐらいです。高齢化していく中で、自然を地域が持続的に守っていくために、地域の活性化を含めた活動をおこなっています。

上ノ原は元々入会地でしたが、水上村に払い下げられて一部カラマツ林になり、昭和35年頃には藤原地区も最後の茅葺がなくなってしまい、茅葺の屋根がトタンをみんなかぶせてしまい、ススキを利用することがなくなってしまいました。その頃から野焼きをしなくなり、草原は放置されてしまいました。その後ゴルフ場やホテルになり、残ったのが21ヘクタールです。それを中之条の町田工業という茅葺の業者さんが部分的に茅刈りをはじめ、このススキは茅葺きのススキとして良いということで茅刈りをしていました。その後、平成15年に町と森林塾青水で賃借契約を結び、我々が保全と活用に向けて活動を始め、平成16年に40年ぶりの野焼きが行われました。

上ノ原のススキ草原を守っていくためには、昔の入会の知恵を生かしながら、保全をしていく必要があります。地元の人達から色々お話を聞きました。ここではススキは、屋根の葺き替えとか炭俵に利用されていました。また、ハギやクズは飼料に使われていました。そういったものは非常に需要が高かったということで、いつから刈っていいよという「口開け」などのルールが設けられていました。あとは、ワラビをはじめとする山菜ですが、ワラビの根っこのデンプン質を糊や食べ物の原材料として売られ、結構な現金収入になっていたそうです。

私も森林塾は、2002年に現代版入会慣行を考えるとということで、東京で有志が集まり、そのあと町と



契約しました。その後、野焼きの復活や調査を進め、色々受賞もしています。現在、会員は70名程度で、首都圏の人間が多いです。活動は月に一回程度行っています。森林塾の主な活動は、ススキ草原のフィールド調査と生き物調べ、茅場としてススキ草原の再生と活用、古道を再生しフットパスに利用することです。そして、都市住民や子供達に伝えていく自然ふれあい環境学習などです。そして、今年も持続的に管理、利用していくシステムの検討をしているところです。

当初、ススキ草原は30年くらい放置されていたので、非常に森林化が進んでいました。2003年にどのくらい樹木が生えているのか、第一回目の調査をしました。最初に、どのくらい茅場が森林化したのかを把握するために、10mピッチの区画を15ぐらい作り、高さ・それから種類・太さ、などを調べました。面積的には全体の約14%ということで、日本では森林ではありませんが、世界基準でいえば立派な森林になっているという状況でした。シラカバ、カエデ類それから一番多いのが、低木のタニウツギでした。ここは日本海気候型の植生で、そうした樹木がどんどん生えてきています。タニウツギは一面に咲き、花はすごく綺麗で、それを楽しみにしていた方達もいましたが、除去しながらススキ草原の再生を目指す活動をしています。ススキ草原で1m×1mの区画を刈って、ススキのバイオマス量も調べました。刈った後、乾燥させてその重量を量ると、1ヘクタールあたり約7.4トンという数字になり、バイオマス量としても非常に多いということにびっくりしました。それから、草原だけではなく薪炭林の方の調査もおこないました。ここでは、イタヤカエデ、ミズナラ、サクラ類、カエデ類などが非常に多く、薪炭林として利用されていたので、株立ちが多く見られました。昨年からは森林の中で、生き物調査も本格的にしています。草花や蝶に詳しい方もいまして、おもに蝶について色々調べています。ススキ草原と人間との関係という部分では、ススキを利用して、茅葺き屋根の材料に使っていますし、他にも堆肥などへの利用も検討しています。草原の中の草花には、昨日のエクスカージョンで見せていただいたハバヤマボクチとか、同じような種もありますし、ノハラアザミとかヤマハギ、ここではマルハギでしたかね、それから最近あまり見られませんが、ナンバンギセルといったような草花もあります。

調査の結果、森林化している状況から元々の入会がきちんと成り立っていた草原に戻そうということで、

タニウツギなどを除去しています。ほんとは夏にやるのがよいのですが、夏になるとススキがいっぱいできるので、野焼きの前がちょうど作業をやりやすいということで、4月ぐらいに作業をしています。刈っても刈っても、また何年かするとタニウツギがでくるので、やはり根本的に根っこから取り除かないとだめかなと思い、除去もしています。

4月に、茅場を維持していくためのボランティアを私どもの会以外からも募集し、それから地元の人達、みなかみ町と一緒に野焼きをしています。野焼きの前に「山の口開け」という行事をします。山の口開けをする方には野焼きの総監督や、茅刈りの時の指導などをいただいています。この地区は大々的な野焼きをする所がありませんで、元々は、雪の合間を焼くということで、雪が溶けて穴が開いたところだけを燃やしていたので、全員で決まってやるような行事はなかったみたいです。我々が最初に始めたのは、雪を周りによせて防火帯にし、その中を焼くということです。他の地区からすると野焼きとしては非常に安全性の高い野焼きではないかと思っています。ただ、雪を寄せる手間がかかるので、その辺をどうするかが課題になっています。雪がまだ残る時期の野焼きですので、野焼きの火と残雪がほんとに美しい風景です。僕らはなんでこんなに遠いところまで行くのかなとも思いますが、こういう風景を見ると、やっぱりここをなんとか守っていこうと勇気づけられます。野焼きの後には炭黒の世界で、その中を消火確認します。野焼きをしてもほとんど表面しか燃えてないので、ススキが重なっているところでは、下の方がほとんど燃えてないところもあります。野焼きの後からは、センボンヤリなど、光を好む植物が最初に目立ちます。野焼きをしたところは周りよりも成長が3週間から1ヶ月



近く早く、ススキも非常に成長が促進され、緑色に見えます。野焼きは天候によって延期することもあります。いまのところ毎回行われています。

刈った茅を集めたものを、この地区では「ボッチ」という呼び方をしています。小さな束を一つにまとめ、上の方をまとめてボッチとして、業者さんに1ボッチを500円で買い上げていただいています。多少乾燥させるという意味合いもあるのですが、茅刈りは10月中ぐらいから11月中ぐらいまでの間に行われます。そのあとは雪が降ってしまいますので、1ヶ月という非常に短い期間の中に刈らなければいけません。このボッチ作りとススキの搬出を、もう5年ぐらいずっと続けています。昨年、そのような活動の中でももう少し都市住民の方にも広げたいということで、茅刈りコンテストを開催しました。講習会はたぶん他にも結構行われていると思いますが、コンテストというのはたぶん日本初、世界初じゃないかと僕は思っています。最初に「どんな刈り方が良いか」とか「どういうススキが良いか」とか「どうやってきちっとボッチにするか」というようなことを、町田工業という業者さんや地元の古老から指導してもらった講習会を開催し、次の日にコンテストを行いました。40名ぐらい参加していただいて、初めて草を刈るという方も大勢いらっしゃいました。コンテストということで、どういう審査基準が望ましいか決めるのが一番難しかったです。ただ量だけ、早さだけではないということで、ボッチの姿とか形、それから茅の品質、すなわち他のものが混ざってないか、それから真っ直ぐで1.5m以上のものはあるかとか、そういったところを基準にしました。業者さんからは、ここは細くて真っ直ぐな非常にいい茅だと評価を得られています。刈り終わった後のボッチは、しばらく残したあと、トラックで搬出します。上ノ原の藤原の真中に、雲越家住宅という、重要文化財になっている茅葺きの建物がありますが、昨年、一昨年と2年かけて、半分づつ屋根の葺き替えをしました。その時に上ノ原のススキが使われ、刺し替えによって、非常に美しい茅葺きの屋根ができあがりました。芸北でも、茅葺きの家が何軒か見えましたけど、地域によってデザイン的に棟などが多少違うように感じました。また、同じく藤原にある諏訪神社という神社の舞台の屋根では、葺き替えがほとんどなされてなくて、屋根自体が草原になっています。この樹木が調査する必要があるというほど、いつ壊れてもおかしくないような状況になっています。諏訪神社

は、獅子舞が無形文化財になっていて、子ども達も一生懸命に繋いでいる芸能文化です。その舞台になっている所なので、諏訪神社の葺き替えをぜひ行いたいと、いろいろ画策しているところです。

それから、草地の再生だけではなく、都市住民の方が自然にふれあうことによって、生き物だけでなく地域の文化に接してもらえる、という考えから、古道を再生するという活動もしています。地元の青木沢峠などで、雪による倒木を除去したり、草刈りをして安全に歩ける道を作っています。作業の時には、地元の田園空間案内人クラブや古老の方々から「昔はこういうふうに使われていた」とか「こういったところに石碑がある」とか「ここにはこんな大木があった」とか、いろんな話を聞きながら進めています。こうした情報をまとめて、「古道ガイドマップ」を作ろうと今年も調査をしているところです。「芦ノ田峠」のルートでは、橋が壊れてなくなっていました。それを地元の藤原案内人クラブのメンバーの人達が、一生懸命作業していただいて橋を作ってくれました。僕らだけでは、橋をつくるまではできませんが、地元の方が僕らに協力してくれます。ほんとにすばらしい地元の方達がいるなぁといつも感じています。藤原中学には「古道クラブ」というのがありまして、先生も非常に熱心です。藤原地区は高齢化していますけど、青木沢峠の古道では、数少ない地元の生徒さんたちと一緒に古道の再生作業を行いました。地域が高齢化していますので、次の世代、子供達にどう伝えていくかという所が今一番の課題になっています。冬はスキー場が有名ですが、だんだんスキー人口も落ちている中で、スキーだけではなく、雪の中の自然も楽しむということで、雪原散策もやっています。地元の古老からご指導いただきながら、カンジキを作って、カンジキで雪原を歩き散策すると、なかなか他の時期には見られない動物達の足跡や風景が見え、非常に楽しいプログラムです。大幽という洞窟では、氷の柱ができるので、そこに行くような雪原散策のプログラムも作っています。千葉県麗澤中学という私立の中学一年生が、自分たちの水源であるみなかみの自然を知るということで、毎年行われているフィールドワークでは、我々の上ノ原のフィールドとブナ林の奥にある水源林の案内をしています。学校・教室で得られる知識だけでなく、この現場で説明してあげることで五感に感じ、映像の世界ではない自然を感じる、大切なプログラムです。

我々は地元ではないので色々な知識を知りません。

そこで、地元の歴史とか文化とか人の営みについて色々話を聞きながら、我々が「こうしたらもっと生きるか」とか、「こういうふう利用できないか」と考える懇談会を、地元の人達と、いつもやっています。どちらかという都市住民の団体である森林塾青水だけでは、奥里山水源地域であるみなかみの草原や森を守ることはできません。森林塾が核となっているわけですが、みなかみ町の町有林を借りており、活動についても町行政からも本当にサポートしていただき、一緒になって取り組んでいます。一緒になって上ノ原・藤原地区をどう盛り上げていくかとかいうのを考えています。地元住民の方、特に藤原案内人クラブという、非常に積極的な古老達との繋がりが非常に多いです。先ほどの橋もそうですし、茅刈の講習会とか野焼きなどはこの方達を中心となってやっています。それにたいして我々は人を集めたり、そういったところで繋がりを持っています。また、我々は毎回地元の民宿に泊まるようにしています。活動に対して積極的な方の民宿に年6、7回泊まるようにして、少しでも地元にお金が落ちるように考えています。地元では、藤原自治区の住民の方も、最近は色々な意味でサポートしていただいていますし、子供達も少しずつ関わようになっていますが、藤原地区ではなくてみなかみ町とか周辺の市町村など、もう少し広い意味での地元の人達との繋がりが弱いということが課題になっているかなと思っています。環境関係組織という方面では、全国草原再生ネットワークに入りまして、全国の草原の活動の情報を提供いただいています。ちょっと弱いのはまだ研究者とか大学とかそういったところとの結びつきで、少し広めながらもうすこし理論的なものを作りあげていきたいなと思っています。一番大きいのは、伝統建築物の建設業をやられています町田工業さんという企業で、萱刈から茅葺きまでタイアップしています。それ以外の利根川流域の水の貢献を受けている企業・市民ともっと密接な関係を作りながら活動を広めていきたいなと思っています。これからの方向性としては、ススキの資源利用とか価値をどう広めるとか、自然とのふれあいということでエコツーリズムとかを広めていきたいと思っています。

みなさんのお知恵を拝借したいと思しますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

各地からの実践報告2 大分県九重町「坊ガツル・飯田高原」

景観保護と草原維持の為に大切な野焼き文化

高橋裕二郎（坊ガツル・飯田高原野焼き実行委員会 副会長）

みなさんこんにちは。大分からやってまいりました、坊ガツル・飯田高原野焼き実行委員会という組織を作っております、高橋裕二郎です。大分県九重町といいますがあまり有名ではないんですが、お隣が湯布院ですね。湯布院町は今由布市になったんですが、九重町は熊本の黒川温泉とのちょうど間になります。真ん中に飯田高原というところがあるのですが、阿蘇くじゅう国立公園の中に一角にあります。飯田高原、それから坊ガツルの野焼きをやっております。

野焼きをするというと「あんた自然を守る会の癖にそんなことをしていいのかな」という感じのことをいわれるんですが、一般に野焼きっていうと産業廃棄物の野焼きちゅうのがありますんでそれとよく混同されます。なんにもしない放っておく、手を加えないのが自然ちゅうとらえ方をしている方が多いんですね。

私どもの所は国立公園内なんですが、景観がいいということで公園指定をされています。その景観の一番大きなのが草原です。阿蘇もそうですが、くじゅうも指定をうけています。ただ、そのまま自然だからと放ったんでは、草原維持はできません。大半が入会地で、昔から農家の方が、畜産をするたんびんに茅を刈って使っていました。そのために、春は野焼きをして、また新しい草が全部でてきて、牛馬に食べさせる。野焼きをすることによって、ダニとか害虫がいなくなるということで、ずっと昔から農家の方が野焼きを続けてきたんですね。

くじゅうには、久住山といって九州本土で一番高い山があるんですが、その向こうっかわが三俣山と言います。お隣は、今は竹田市になったんですが、久住町。それと反対側、久住山の北側が九重町です。

昔は3月の終わりぐらいに両方の町で日にちを決めて、「じゃあ3月30日に野焼きをしましょう」とかいうたら、両方から一緒に火をつけよったんです。

古来は、一人でに山が燃えるまで燃やすような、そんな野焼きだったそうです。ですが最近では、木を植えていたから、森林が増えまして、そんな方法じゃで



きなくなりました。今は、野焼きをするために、春に（今丁度やってるんですが）「わじ焼き、わじ切り」と言って、防火帯を周りにつくらないと野焼きはできません。それをするのが一番大変な作業です。

私どもの町も田舎ですから過疎ですね、過疎・高齢化で農家もお年寄りばかりが増え、若い人が少なくなって野焼きができなくなったんですね。10何年もそのままになってたから、草原じゃなくなっていました。野焼きをやめると10何年もしないと、ノリウツギとかマツとかそういうのがいっぱい生えてきて、森林になるんですね。

草原が森林化してしまいますんで何とかして野焼きを復活しようじゃないか、ということで呼びかけて、有志を募って、野焼きを平成6年に始めました。

私ども野焼き実行委員会で野焼きをしてるのは、約600ヘクタールです。平成6年に初めて、野焼きの範囲を年々増やして行って、だんだん広くなりました。一番先に火入れをしたのがそのラムサール指定をされた坊ガツルとタデ原です。平成17年に坊ガツルとタデ原を合わせてラムサール指定をしていただいたんですが、そこで野焼きを続けて草原を維持してきたし、再生してきたんです。一時は木が沢山増えまして草原じゃなくなりよったから、なんとか取り戻そうじゃありませんか、というようなことをお願いしました。ま

ず防火帯を作るわけですが、最初は分からないから地元のお年寄りをお願いをして、加勢をしてもらいました。昔の年寄りの知恵ちゅうのはすごいですね。こちら辺は危ないところだから広く防火帯を作れとかですね、ここはもう全然せんでも適当にしとけばここから燃えていくことはない、というような場所があるんですね。風向きとか草の深さとか、そういうことをお年寄りに聞いて指導していただいて、そして野焼きを始めました。

野焼きをやっていくのには、ボランティアをお願いして、過去に一番多い年は野焼きの時に200人に加勢をしていただきました。お金全然払わんですから、全部ボランティアです。いくらボランティアっていても、一番大事なのがワジ切りです。先ほど言うたように、今やってます。先週坊ガツルのワジ焼きが終わったとこなんです、今の時期にするのが一番いいんです。そのワジ切り、草刈をするのが一番重労働です。ひどいところは坂の転げ降ちるような急な所も切らんといかんから非常に大変、重労働ですね。

ボランティアで加勢をしていただくんですが、全部が無償というのは気の毒です。僕らが言っているのは「せめてお弁当は差し上げましょう」それから「10時と3時のお茶は差し上げたい」ということです。また、草刈機はないから自分のみなそれぞれ持ってきていただくんです。ですから草刈機の燃料は実行委員会で差上げます。それからできれば何年に一回かは、刈り払い機の刃を買って配るんです。刃は消耗品ですからね。毎年はできないけど、そんなことにやっぱりどうしてもお金がかかるんですね。お弁当を配っても、一人500円にしても200人おったら、相当お金がかかるんです。私どもの飯田高原野焼き実行委員会だけで、年間40万ぐらい、そういうことにお金がかかっていきます。

たまたま僕が「ほんがわ」のスキー場をやっとるんですが、隣接地が九州電力の八丁原で地熱発電所です。発電量11万kWと日本で一番大きいんですが、その九州電力の発電所がある関係で九州電力の社長がお見えになった時に、たまたま僕が案内をして、「野焼きをするとこんなに綺麗になるんですよ」ちゅう話をしたら、「なんとか坊ガツルも野焼きができないですかね」ちゅう話から、じゃあ野焼きをするようにしましようちゅうような事になりました。九州電力が水源かん養保安林として持っている平治岳というのがありますが、その麓が坊ガツルなんです。後からまた出して

いただきますが、坊ガツルはそれまで野焼きはできてなくて、荒れていました。「どうして坊ガツルは野焼きができんのか」ちゅう社長が言うので、「それはお金がねえんじゃ」と僕が言うたら、大分の支店長が来てですね、「どうしても野焼きをしたいけど、社長がいうたからお金はなんぼでも出すよ」いうて言いました。「なんぼいるんね」と聞かれたのですが、ポツと聞かれても分かりませんから「そりゃ300万ぐらいいるじゃろね」と言ったら、「わかった。はい、いいですよ」という答えでした。

ところで、坊ガツルはお隣の竹田市の入会地なんです。一番下の盆地が芹洋子さんが歌った坊ガツルの賛歌の坊ガツルです。よその山を勝手に焼くわけにはいかんから、「竹田の人と同意を得てくれませんか。九電が出してくれてお金あるんじゃから焼かせておくれ」と九重町の役場に行ってお願いをしたら、「わかりました」って竹田のに話をしてくれました。そうしたら「加勢はできんけど、焼くのはあんたじゃけえ焼くなら焼いていいですよ」という話になりました。「九電も加勢してくれますか」って言ったら、「いいですよ。組合とか山岳部がありますんで、そんな人達をみんな頼んでお願いしてやりましょう」ちゅうことで始めたから、坊ガツルについては、九州電力がお金は全部出してくれるんです。ですからなんぼ刈ってもいいちゅうんで、九州電力のおかげで野焼きはできとります。

これを年々増やしていったんですが、去年は国土交通省が「道路景観維持のために補助金をだしましょう。なんかありませんか」ちゅうから「野焼きをもっと拡張したいんですが中々お金がないですね」て言ったら、「わかりました」ちゅうんです。それで去年は、81万円ほど補助金を頂いて、50ヘクタール面積を広げました。

「大変なんですよ」ちゅう話をしよったら、今年の



4月にアサヒビールが「アサヒスーパードライ地域還元資金」という名目で、スーパードライ1缶につき1円補助金をくれることになりました。これはアサヒビールが全国各地でやっている事業ですが、大分県では、県内で1ヶ月に売れたビール1缶につき、1円を坊ガツル野焼き実行委員会と飯田高原野焼き実行委員会にあげますということです。当初は「宣伝をしたら、130万本ぐらいは大体は売れるから130万～150万ぐらいでしょうね」ちゅうような話でした。「少額でもでもいいです、なんぼでもください」ちゅうことだったんですが、あっちこっちで「アサヒスーパードライ飲むと1円私にしてくれるんですよ」という話をしたら「ほんなら飲みましょう」とか、「キリンビールじゃねえけどスーパードライにしましょうとか」とかいうような人が多くて、思わぬほど売れたんです。202万円いただきましたから、1ヶ月に202万本売れたちゅうことですね。これで今から気持ちよく野焼きができるぞ、ちゅうようなことを言ったりします。

毎年そんなお金がかかるもんですから、実行委員会でお金が無いときは、僕はスキー場をやっていてレストランがあるから、野焼きに加勢をしてくれた人の昼食は、全部うちのスキー場でカレーライスを食べてもらいよったんです。実行委員会のお金があるときはもらうけど、お金がねえときはもういいわ、うちのスキー場がかぶればいいんじゃないわ、と言って提供していました。

野焼きの防火帯を作るのも、私の職員を10人ぐらいつれてって班編成を割り当ててあります。ワジ切り(草刈り)をして、それを焼くまでが班の分担の責任で、どのエリアは何班で、誰が切る、というおまかせをしています。今日一緒にきた、自然を守る会の班もあります。それから、観光協会の班、民宿組合の班とかもあります。一般の人は、土曜日日曜に、観光業の人は忙しいから作業をするのは平日に、というように班編成をしてありますので、班で草刈をしてもらっています。刈ってから2週間から3週間ぐらいで草が枯れた頃に焼きます。ワジ焼きをするから、防火帯を作る作業は2回せないかんとです。ワジ焼きちゃんと完全に出来ない、春の野焼きができません。

野焼きは春の3月末か4月の初めぐらいにします。そのときには各班の人が全部、全員でてきてもらって、なおかつ一般の人にも呼びかけをして、加勢をしていただける方を集めて、野焼きをやります。今はもう各班ごとに、1万円で、食事代から何から全部してくだ

さいということを決めています。大体1シーズンで40万から50万ぐらいお金がかかります。アサヒビールに頂いた200万円で、もう4年間は今のやりかたで良い、ちゅうような話をしています。

昔は全部焼けていたんですが、もうできないところもあります。あと150ヘクタールぐらいありますので、いいところからというより、焼きやすいところから取り組んで行き、まだもっと広げて焼きたいと思っています。近いうちには、それを全部広げて焼きたいなと考えております。



九重に来られるみなさんからは、「草原がいいですねえ」「緑がいいですねえ」ってよくいわれますけど、これはやっぱ野焼きという昔からの伝統文化で、この草原の景観維持できてるんですよ、といつも言ったりします。今後もみんなに協力をしていただきながらこの活動を続けていかねば草原維持はできないと考えております。ラムサール登録をしていただいたのも、この野焼きをみんなにお願いをして、ボランティアで続けてきたのが認められたからです。これはもう僕ら言いよるのが僕らの力じゃないんですよ、みんながこんなに協力してボランティアで加勢をしてくれるから、ラムサール登録をされたんです、みんなの手柄ですから、ぼくだけのものじゃありません、ちゅうようなことをみんなに言っています。地道な、そして大変な活動でもあるんですが、もっと若い後輩の人達にお願いして、これを引きついでってもらうのが、僕らの仕事ではなかるうか、ちゅうようなことを思っております。

ありがとうございました。

北広島町芸北地域における草原保全活動

川内信忠（八幡高原地域振興協議会 副会長）

みなさんこんにちは。私は町内でも八幡高原にずっと住んでおります川内といいます。よろしくお願いします。

人間の生活が、狩猟から農耕に変わっていった自然との関わり方もずいぶんと変わってきたかなという風に思います。同時に江戸時代の人口に比べりゃ今は4倍近いというような環境の中で、自然等の付き合い方が変わってきた。今日おられるみなさん方はコンクリートジャングルの中で住んでる方が多いんじゃないかという風に思います。それも一つのジャングルですが、私達が住んでる農村もどんどん森林が押し寄せてきました。かつてはその間に里山がありましたね。草を刈って薪を切って手入れをされて、それが美しい農村の風景だったのかなあという風にも感じます。今は住居を出るとすぐ森林。そこは熊・イノシシが出入りしても不思議のない世界かもしれません。

私は八幡高原でカキツバタの取り組みをしております。まあ、またカキツバタいうても「お前カキツバタしか知らんのか」と言われそうですが、これは昭和10年頃の八幡高原のカキツバタです。2ヘクタールありました。こういった湿原は、農地にならなかったから残っていたというのが現状でしょう。その八幡にですね昭和8年・12年と、2回ほど牧野富太郎先生が来られました。世界的に有名な植物学者ですが、今日は有名な中越先生もおいでですから、植物については負けておられません。これは、来られたときに山頂に登られた写真です。みなさん方から見て左側の、蝶ネクタイの方です。その来られたという事が縁になりまして、土佐から青石を送られ千町原という所にこういう句碑が設立されました。「衣に擦りし 昔の色か燕子花」。句碑に書かれている有名な句でございます。

私達が取り組んできたカキツバタの活動は、なんとかそういった時代を取り戻そう、昔あった物を取り戻そうと新しい物を作るより昔の物を復権させようじゃないか、という発想で始めたのがカキツバタの再生で



す。そこで、休耕田を生かしまして圃場にいたしまして、カキツバタを植えていきました。このときに120人ぐらい集まっていただきました。全部ボランティアです。

ですけどものすごい草が生えましてね、これはどうしようもないっていうことで草取りの作業に追われるのが1,2年目か2年目。ずーと、ぶっ詰んで生えて何にも見えない状態をみなさんの力で綺麗にしていったんですが、また今生えております。

これが取り組んできたときのカキツバタの里。このぐらい咲いてくれます。6月の時ですね。これは交流です。カキツバタのシンポジウムにしたらええか、まあちょっと祭りしようかということであんな田園の空間の中で紫の中で篠笛を吹いておられます。結局このカキツバタは、ボランティアの皆さん方のお力なかったら再生できなかった。地元だけではとてももう手が足りません。そういったことです。

つぎに、八幡湿原自然再生事業にちょっと触れさせていただきます。これはですね、向こうから1947年・1976年・2001年の霧ヶ谷です。

森林化していったということです。ようするにどんどんどんどん森林になっていく状況です。そこを自然再生法でなんとか元の湿原にもどそうやと、いろいろな話の中からこういった工事を行っているということ

です。湿原そのものは、常に地下水が貯まって水があり、そこに植物が生えているような状態だと思っていたら結構だと思います。ですから、水を行き渡せる必要があるということで導水路を掘り、水を場内に循環させると、いう工事を行っております。

これが取り組む前の写真です。このように、どんどんどん木が入ってきて森林化している。つまり、草原生の動植物は去って行ってしまふ。今度は森林を好む動植物が入ってくるというような環境の中で、ここを変えていこうじゃないかというのが再生事業です。ここは一時期牧場でございました。牧場が廃止になって、閉鎖したときには、牧場自体は草地ですから、草を刈り取ります。これは掘って排水をした、三面水路です。これを取り壊して、緩やかな川にしようということで石を積み、水を回しながら、緩やかな流れの中にどういった植物や水生昆虫など、色んな生物が入ってくるかを観察しています。

これは導水路。今工事を行っている所でございます。そして、このように再生しました。これはもう工事が終わったところですが、春の雪解けのあとの霧ヶ谷湿原の内容です。さきほど見ていただいたように水が行き渡っておりますので、湿原生植物が入ってきてるかなという所です。こういったように絶滅危惧類のハッチョウトンボも見られますし、またちょっと小さな池、水たまりがあるもんですからモリアオガエルの産卵も行われてきました。今までいなかったものが帰ってくる。これはカスミサンショウウオの幼生ですが、こういったものも増えてきている。もちろんカエルもオタマジャクシも蛇も何にも増えてきてます。

次に千町原の草原保存に入りたいと思います。千町原も草原ですが、さきほど話がございましたように、飯田高原みたいに何十ヘクタールちゅうようなもんじゃ、ちょっとないんです。規模は小さいんですが八幡高原にも草原はあったんです。これはかつて、ほんとの昔の戦前だと思うんですが、千町原の写真ですけどマツムシソウがいっぱいこう群生してた。そこでもうずっとみなさんがいてね、草を刈ってとって帰りたい肥にして使っていた。というところで、こういう草原が保たれていました。ところが、戦後ちょっと陸軍に接収されて開拓団の方が入られて、そして60年代に牧場になった。牧場になったからこういう草地をなりましたけども、ここに帰化植物も入ってきた。これは一見綺麗に見えますけど、帰化植物のオオハンゴンソウです。こういった外来種がどんどん入って来ました。

ここはですね手前は、草地みたいに草を蒔ったりしたところですが、向こうはもう山になってるんです。かつては向こう側も全部草原だったところが、80年代に牧場が終わりまして、20何年たちますと、木も物凄い勢いで成長しますね。茅とか色んな植物があった所が、ワレモコウとかですねさっきの話にもございましたように全部変わって行くということです。

これを何とかせなあかんな一ということで、白川さんを中心にですね「おし、これはちょっと昔の千町原に戻そう」ということを私達も決意いたしました。地元だけでは無理なんでまたボランティアをお願いしようということで、ボランティアの方に来て頂いて草を刈っています。もちろん子供も女性も参加してくれますし、さきほど高橋さんの話では弁当とか無償で提供しなきゃちゅうんですが、うちらも金がありません。頂かないとまだできないんです。金が集まりませんでね、はい。

これは昼の昼食風景で、こういったことで地元も参加しますし、町から来ていただいた方と色んな交流を通じて、感想としては「よかったよ」「たのしかったよ」「またやろうね」と言う風に、次に続いていくかなあと言う風に考えております。これはですね、地元の人が刈った草をトラックに積みまして、持って帰りたい肥にしようというところ。「刈りっぱなしじゃあもったいないじゃない、何か使おう」というのが考え方です。

その人は頑張ってくれました。そのたい肥を使って、もちろん他に肥料を一切入れずに作ったのは、ちょっと細いんですけどやっぱり、はらっぱ大根。こういうような物ができました。そして今の大根はですね、来た人にねボランティアの人に一本ずつ差し上げるんですよ。ほんと喜ぶますね。

そして2007年にはこの草刈作業もですね、大きな変化がありました。草刈りには子供達が参加してしてくれますので、キッズプログラムを作成いたしました。子供達が全員で作っていただいたのが、阿蘇の方でやられるそうですけど草泊まり。あの中へ入って、何日か寝泊まりして周辺の草を刈ってくちゅう。これはもう昔のことですけど、子供達を安全に守っていく中で、保護者の方と一緒にあってああいう立派な草泊まりができました。子供にとってもいい体験ですし、やはり後世につないでいくというのは子供に草とはなにかを教えていかなきゃならないのかなと思います。

さきほどございましたように刈るだけでは中々前に進みませんので「一回火をいれましょう」「やりましょうか」と言うような話で火を入れてさせて頂きました。これは、去年ですね、約7ヘクタール、火を入れて焼いているところです。この火を入れるということは、表現によって色々あるようですね。楽しかったり、楽しいちゅっちゃあいけんだろ、危険な事です。亡くなられた方もいるんですからね。でも、どういう風にとらえていいのかわかりませんが、火を入れることはやっぱり楽しい、人間と火とは切っても切りはなせん のじゃけ、やっぱり面白く楽しく作業することが肝要かな、と言う風に思います。どんどん火をいれて山火事になっちゃいけません。

これは完全に焼けた所です。消火活動にもわたっていますけど、今日は消防さんおってんないと思います。やかましい事を言われましてね。火が消えるまで次を付けちゃいけん。煙が出るぐらいのことは、わしらは少々ほっといて次にいきたいんですが、水をかけて完全に消せって。ほんなことをしとったら時間内できんなあ、いう風に思った次第ですが、焼けました。

これはその時に参加してくれた方です。このときには、98名ぐらい参加がありまして地元が30名、残りの方がボランティアの方です。一様にみんな満足感といいますか、楽しかった、よかったねと言うことで終わったように記憶しております。

これもやっぱり刈り取り風景です。刈った草をほんとは持って帰りたいんですが、まだノイバラとか低木がいっぱい草ん中に入りますよ。どうしても区分できないので、そのままたい肥にすることが非常に難しいんですよ。ああいう物が入ってきますと、腐るのに何年もかかる。ノイバラは腐りませんからね。ということで、こういう風につんで、とりあえずここを草原化しようという事で進めております。草の間にあるのが全部樹木ですから、機械では刈られません。

先の講演でも、文化、命といっぱい言葉がでてきました。私もずっと思っているのは、命とは何かということ。命とは、次のものへ何かを伝える事なんだな、と言う風にずっと理解してあります。ある人にとって、それは芸術かもわからないし、ある人にとってはそれは技術かもわからない、音楽かもわからない。人は何かを次世代に伝えるために命もらってるんだな、という風に私は思うんですよ。それから考えると、この各先人達が行ってきた草刈、あるいは自然との関わり、そういったものを私達はもう一回再生して、次世



代につなげる努力をしなきゃいけないのかな、と言う風に思います。

課題としましては、刈った草の一割を捨てています。利用せんともったいないなと言うことで、利用して有機農業に転換していかなくやいづれいけないかなと思っています。やっぱり安全安心な食材を提供していくのが我々の仕事であり、それをまたみんなに伝えていかないけん、と言う風に思います。

先ほど言いましたが、活動続けるのに費用が脆弱。資金はほとんどありません。500円頂いております。今日ご会場にいらっしゃった方で、「よし、わしがちいとしちゃろう」さっきの話のように300万ぐらい出してくれる方おられましたら、私らほんとに助かりますんでね。どんどんやっていきますんで、まあ一つそういう方手を挙げて・・・いや無理ですね。

こうしてせつかく草原植物が再生しても、もうすぐに盗掘されてしまう、という問題がございます。マナーの問題ですよ、先ほどちょっと美しい村ということ。をいいましたけど、美しい村、美しい草原、美しい自然を作るのはみんなの心が一つになって、そっちの方向むかないと。手伝う手伝わないってことは別なんですよ。やっぱりみんなが努力して作る。育ててる物を盗掘なんてやっぱりだめだと、みんなで言うようにすることによって子供達にまた守っていただく。日本の先の道徳の話の中で主張されましたけども、そういう風にやっぱりこれもルールというものをピシッと教えていくのを我々の責任でもありますし次世代につなぐことかなと思います。もし盗掘なん等々されてる方見かけましたら、「ちょっといけんじゃあないか」と注意していただくと良いと思います。同時に町の方も条例を作って厳しくしていただく。それによってルールを作ってくという必要性があるかと思えます。

ありがとうございました。

第1分科会

全国こども草原サミット

座長：淀淵可菜（雲月小学校 児童会長）

企画責任者：雲月小学校

発表1「ウスイロヒヨウモンモドキ保護活動」

鳥根県大田市立志学小学校

発表2「ふるさと子どもガイドーふるさとに学び，ふるさとを愛してー」

山口県美祢市立本郷小学校

発表3：「オペレッタ「雲月の宝」」

広島県北広島町立雲月小学校

総合討論



島根県大田市立志学小学校

志学小学校5・6年生は、絶滅が危惧される蝶「ウスイロヒョウモンモドキ」の保護活動に、昨年度（平成20年度）から参加しています。

以前より、志学小学校では総合的な学習などにおいて、「三瓶山紹介ビデオ作成」「三瓶山観光マップ作成」「三瓶山紹介ポスター作成」「三瓶山で観察される鳥類の調査」など、三瓶山の自然環境について毎年テーマを持ち、活動に取り組んできました。「ウスイロヒョウモンモドキ」についても過去に調査して結果を発表したこともありました。

このような先輩たちの取り組みを引き継ぎ、昨年度は三瓶温泉スキー場のある「東の原」について、その歴史や生息する動植物についての調査・観察に取り組みました。三瓶自然館サヒメル学芸員の方々にも協力いただき、昔は女三瓶山の頂上まで草原で牧草の草刈り場であったことや、絶滅が危惧される蝶「ウスイロヒョウモンモドキ」が島根県で唯一生息している場所であることが分かりました。そして、「ウスイロヒョウモンモドキ」についてもっと知りたいと思い、保護活動に参加することにしました。

保護活動の内容は、女三瓶山の山頂付近のススキを刈り取り、「オミナエシ」と「カノコソウ」の苗を植えることです。「ウスイロヒョウモンモドキ」は、この「オミナエシ」と「カノコソウ」に卵を産み付け、幼虫は新芽を食べて育ちます。昔は「オミナエシ」も「カノコソウ」もたくさん自生していたのですが、環境の変化により現在は苗を植えなければならない状況です。

保護活動に参加したことで、環境省、島根県自然環境課、大田市役所、大田の自然を守る会、島根大学、三瓶自然館サヒメルなどいろいろな人たちが協力して取り組んでおられることが分かりました。また、三瓶の自然環境が変わってしまったのはなぜか、考えるこ

ともできました。

今年度は、実際に「ウスイロヒョウモンモドキ」の成虫を初めて観察しました。そして、保護活動に必要な「オミナエシ」の苗を自分たちで育てています。育て方は、大田の自然を守る会の方に教えていただきました。さらに、「ウスイロヒョウモンモドキ」だけでなく三瓶にはたくさんの種類の蝶がいることが分かりました。これからも保護活動に取り組むとともに、三瓶の自然のすばらしさを調べて、たくさんの人たちに伝えていきたいと思っています。

山口県美祢市立本郷小学校

私たちのふるさとは、全国的に有名な秋吉台や秋芳洞があります。

秋吉台は山口県の中心部よりやや西に位置しており、わが国最大の広さを持つカルスト台地です。カルスト台地というのは石灰岩でおおわれた台地のことで、岩の多い地方という意味があります。つくられたのは3億5千万から2億3千万年前で、暖かく浅い南の海のさんご礁であったと言われています。また、かつては森林でしたが、江戸時代あたりから人の手が入り、今のような美しい草原になったそうです。草原は、ドリーネを生かした畑作が行われ、季節ごとに咲く草花が多くの人々の目を楽しませてくれます。

一方、秋芳洞は東洋一の洞くつと呼ばれ、一歩足を踏み入れると、不思議な世界が広がっています。石灰を含んだ雨水が天井から落ちることで、鍾乳石や石筍、石灰華などがつくられ、まるで神秘的な宮殿のようです。

さらに、秋芳町では、石灰の溶け込んだ土地を利用して、秋芳梨と呼ばれる梨の栽培が盛んです。梨にはとてもよい土地らしく、甘くてみずみずしい梨が収穫でき、全国に発送されています。

私たちは、このようなふるさとのよさや特徴を調べ、



秋吉台に来られる多くのお客さんにガイドをしています。ドキドキしたり、失敗したりすることもあります。が、勇気をふりしぼり、友達と助け合いながらガイドをしています。ガイド後も、たくさんの手紙やメールをやりとりしたり、かけがえのない大自然を守っていくよう清掃活動をしたりしています。

私たちが実際に取り組んでいる「ふるさと子どもガイド」を実演します。

広島県北広島町立雲月小学校

雲月小学校の校区にある雲月山は、とてもきれいな草原の山で、今もなお絶滅危惧種を含む貴重な植物が数多く残る自然の宝庫です。それは、古くから地域の人たちの手で、牛を飼う草を確保するために草刈りや山焼きが行われてきたからです。しかし、さまざまな事情により、山焼きが行われなくなってしまいました。すると、背の高い草木がたくさん生え、貴重な植物の生育が難しくなり、絶滅しかけてしまいました。そんな時、地域の人たちが山焼き再開に向けて立ち上がり、5年前から再び山焼きが行われるようになりました。それからは、草原の植物も少しずつ増え、牛の放牧も再びできるようになりました。

雲月小学校では、山焼きに参加するとともに、春、夏、秋と年間を通じて雲月山を訪れ、自然観察をする雲月学習をしています。貴重な植物の名前や特徴を覚える中で、山焼きが再開されてから、雲月山に咲く植物の種類も数も、年々増えてきているということを実感しています。児童は、雲月学習を通して、自分の故郷の宝とは何かを考え、それを守るための地域の人たちやボランティアの人たちの思いにも触れることができました。

これらの学習で分かったこと、感じたことを保護者の方や地域の人たちに伝えることができたらと、オリジナル曲「I LOVE UZUTSUKI」を作り、さらにこの歌を元にした、オリジナルのオペレッタ「雲月の宝」に取り組みました。全校児童は17名ととても少ないのですが、一人何役もこなし、自分の故郷、雲月山への思いをこめて演じました。そして、一人1回はソロで歌うことにも挑戦しました。

児童が着ていた衣装は、保護者の方々の手作りです。雲月山に咲く、貴重な植物をイメージし、デザインから全て取り組んでくださいました。児童、保護者、職員、地域の人たちの思いが詰まったオペレッタです。



全国こども草原サミット 北広島宣言

私たちは、草原の生き物や自然環境、人の関わりなどを学習してきました。今日の全国こども草原サミットでは、それぞれが学んだことを発表しました。

三瓶山ではウスイロヒョウモンモドキという希少なチョウを保全するために、活動しています。ウスイロヒョウモンモドキは、草原に生えるオミナエシやカノコソウしか食べないので、草原が無くなるとウスイロヒョウモンモドキも生きていけません。貴重な自然は、一度失われると取り戻すことが本当にたいへんなのだと分かりました。

秋吉台は石灰岩に覆われたカルスト台地です。地面の下にはたくさんの洞窟があり、2億年以上の歴史が秋吉台の自然を作っています。その自然の恵みをもらって、おいしい梨も収穫できます。自然が作った環境に人が関わることで、草原が保たれています。この草原を守り続けていくためにも、ふるさと子どもガイドの活動は大切なことだと分かりました。

雲月山では、一度は途絶えていた山焼きが再開されました。山焼き再開には、地元の人だけでなく、都市からのボランティア、消防団、研究者など、多くの人々の協力が必要でした。山焼きが再開することによって、ササユリなど、たくさんの花や虫が命をつなぐことができるようになりました。私たちも、自分にできることを考えて、草原を守っていくための活動を続けたいと思いました。

今日、私たちは、お互いの活動を発表し合うことで、自分たちの住んでいるところとは違う草原が、日本各地にあることが分かりました。また、草原の自然や、人々の関わり方もそれぞれに違うことが分かりました。そして、草原のことを学習し、草原保全の活動をしている仲間が、各地にいることも分かりました。

ここに集った大田市立志学小学校の児童代表 14 名、美祢市立本郷小学校の児童代表 11 名、北広島町立雲月小学校の児童 17 名は、これからもそれぞれの場所で草原の学習を続けていくとともに、今日の出会いを大切に、お互いの交流を続け、いつまでもふる里の草原を守り続けていくことを、ここ北広島町において宣言します。

平成 21 年 9 月 27 日

第 1 回 全国こども草原サミット 座長
広島県北広島町立雲月小学校児童会長

淀 渕 可 菜

島根県大田市立志学小学校

日 高 諒 大

山口県美祢市立本郷小学校

松 井 千 紘

第2分科会

西中国山地の魅力—登山と草原—

座長：野島信隆 ((一社)広島県山岳連盟普及部部长, (社)日本山岳会広島支部環境委員会副委員長)

企画責任者：広島県山岳連盟・(社)日本山岳会広島支部

講演1「西中国山地の自然—魅力と現状—」

吉見良一 (広島山稜会)

講演2「登山者や山をとりまく現状—山岳ツアーガイドの視点から—」

清水正弘 (深呼吸クラブ 代表)

講演3「広島県山岳連盟および関連団体のとりくみ」

福永やす子 (東広島山の会)

講演4「山の会として、今後取り組むべき課題」

斎陽 (日本山岳会広島支部)

総合討論



野島信隆（座長） まず自己紹介からお願いします。

吉見良一（広島山稜会） 創立 50 周年を迎えた広島山稜会の創立メンバーです。本日は「草原がどういう形で出来たか」を中心にお話ししたいと思います。

福永やす子（東広島山の会） 広島県山岳連盟（以下岳連）理事で普及部チーフをしております。東広島山の会代表も務めております。皆さんとともに「里山・草原への岳連の取り組み」についてお話ししたいと思います。

清水正弘（深呼吸クラブ代表） J A C 広島支部（以下 JAC）で自然環境委員会に所属しています。深呼吸クラブ代表として皆さんを里山から国内外の山岳・辺境の地に案内して 20 年以上になります。住まいは安芸太田町筒賀でにわか百姓もやっております。本日は「人間と自然との距離感」について考えたいと思います。

斎 陽（日本山岳会広島支部） J A C 自然環境委員会に所属しています。昔、国体のスキー競技監督をしておりました。「里山・草原への日本山岳会の取り組み」についてお話ししたいと思います。

野島 草原の定義は色々ありますが、ここでは広く草地ととらえて、そこにどう関わっておられるか、それぞれのご意見を聞かせてください。

吉見 西中国山地は北東から南西へと山並みが続いていてその隙間に太田川が流れている地形です。この山地は古い時代のものでですから山容がなだらかで低い



が特徴です。どこも海拔 1,500 m の森林限界内に収まっています。ここに 1730 年タタラの産業が入ってきました。砂鉄から銑鉄を取り出すために多くの木を切り倒し炭にしてみました。出来た銑鉄は良質のため刀や槍に仕上げられました。このタタラ跡は現在も深入山、雲月山、恐羅漢山など広い範囲で見ることができます。

伐採のため長い間^{はげ}禿山のままで放置されていたこのあたりも現在は森林や草原に戻りつつあります。こうした変化は動植物の生態系にとっても好ましく、また山登りなどで自然に接する私たちにとっても豊かな環境になってきたと言えます。

福永 岳連としてこの地域に向けてやっていることは色々あります。例えば雲月山の山焼きボランティアと自然保護指導員研修会がそのひとつです。あるいは昨年 2 月恐羅漢山でスノーボーダー 7 名の遭難事故があり幸い全員無事救出されましたが、これを契機に西中国山地一帯の登山道分岐や山頂に標識を設置しました。呉のグリーンヒル郷原で開催した「第 8 回ひろしま『山の日』県民の集い」は野呂山への登山道整備をおこないました。水質保全のため雲月山や臥龍山など県内 6 カ所で水質検査も行ないました。7 年前岳連と広島駅弁当で共同開発した「山のおべんとう」は売上の一部を自然環境基金として岳連に寄贈していただいております。山に登られる方にこのお弁当をもっと活用していただければと思います。



清水 草原というとモンゴルやチベットを思い出します。この夏チベットに行きましたが広大な緑の草原で放牧を見ました。ここでは家畜の移動のなすがままに人間は介添えとして移動をしているんですね。モンゴルで遊牧民調査をした時もこのような人間の草原との

折合いを見ました。

日本の草原はタタラ跡を含めた人工の手による里地里山を指すようですがインターネットを開いてもいつの時代から草原と呼んだのか分かりません。一方登山に関して言いますと100年前の日本人は信仰のために登山をやっていました。そこへウェストンが来日して上高地で登山を始めた。これがヨーロッパのアルピニズムの始まりで、次第に日本にこの近代登山が定着していきました。実はそれより前の江戸時代に日本人は自然との接し方を知っていたんですね。物見遊山と言います。この真の意味は、人の力が加わった自然の中に“心を遊ばせる”それは物を見ることであり、そのことわり(物理)を理解する姿勢であり、生きる意味を感じる場だったのです。時代はぐんと移り高度成長期になると田舎から出てきた若者たちが仕事の合間にグループをつくり山登りを始めました。大学や高校でも盛んになりましたがやがて下火になりました。次いで元気に活躍し出したのがバブル以降の中高齢者です。しかしリーマン・ショック以降は変わってきました。対象が山から里山・草原に移ってきたように思えます。



齋 私たち日本山岳会は登山もですが自然環境保全にも力を入れております。まず西条酒で有名な東広島市西条町には竜王山がありますがその地下水が酒づくりには欠かせないんですね。その水源確保のために竜王山の森の整備を私たちも加わって毎年何度となく行なっています。二つ目は雲月山の山焼きです。参加して感動するのは火の力で広大な草地を生み出すことです。人力だったら何千人も要るところをわずかな集落の人たちの手でこれまでやってきた。やがてその手も足りなくなって私たちが参加するようになりました。

草地の上の方にまず火をつけます。これがコツです。ゆっくり火が下の方に燃え移って防火帯ができますと今度は下からも火をつけます。猛然と火が駆け上がっていき合流します。その黒い焼け跡から新しい草が芽生えるのです。3つ目は私の住む千町原も昔は牧場でしたが放置されて雑草だらけになっていました。現在はみんなの手で森林に戻しています。昨日も白川学芸員が一部火入れを行ないました。4つ目は日本山岳会創立100周年記念に全国規模で中央分水嶺踏査を行ないました。そのコース途上に聖湖そばの高岳から野田の百本松間が含まれているのですが、踏査後古道を開こうじゃないかという声が挙がり大勢が参加して道づくりをしました。おかげで西中国山地の秘境区域が縦走路でつながり登山者に喜んでもらっています。今年も整備を行ないましたが2年ごとに草刈りをしないとすぐ草が伸びて元に戻ってしまいます。

野島(座長) 吉見さん、自然が生き物に与える影響についてお話ししていただけますか。

吉見 昭和8年内黒峠や十文字峠に林道ができました。伐採された木は炭にされその道を利用して運び出されました。昭和13年には帝国製鉄が誕生し炭の需要がますます増えました。昭和17年頃には炭焼きを生業とする人たちの子供の小学校分校も山間部に出来たくらいです。炭は中ノ甲から内黒峠、那須部落を経て運ばれました。やがて需要は炭からパルプ材に移りましたが宮島の木工製品用のように吉和冠山の木が使われた例もあります。そのほか山を生活の場とする人も多く、昭和30年代にはワサビが繁盛して当時としては珍しく車を買った人までいました。道も国道488号線として湯来と益田がつながったりしました。



こうした時代の流れで山は禿^はげて荒れました。しかし現在では山の地肌が見えないくらいに回復しています。植物の成長も早いテンポで元に戻りつつあるようです。鳥類や昆虫などを含めて生物環境として良い状態になってきたと言えるでしょう。

野島（座長） 清水さん、里山や草原に接する人間の関わり方の変化について詳しくお話ししてください。

清水 最近と言ってもこの1年前あたりから深呼吸クラブの参加者に20代30代の女性が増えてきている特徴が挙げられます。ピークを目指してストイックに重たい荷をかついで登山をする雰囲気ではないんですね。よく見ますとストレスなどのデトックス（体内毒素を排出する）を目的にしているように見受けられます。考えてみれば、消費の満足に限界を覚えた世代が、気がつけば移ろう季節も感じないで人工物に取り囲まれて圧迫を受けている。この日常を何とかしたい。精神的に充足感を得たい。このためには自然の中に入りブナ林を歩くだけでいい。木漏れ日に立ち止まること自体がすばらしい。こういう形で自然に接することを望んでいるのです。このムーブメントとは非日常体験の獲得なんですね。持続可能な社会でしかも自然の中で自分を再生したい。本日テーマとしている里山や草原がその舞台になるのです。団体行動というよりも一人か二人で十分で、そこには自分の存在を薄くしない、アットホームな状況を保ちたいという心情があるようです。

野島（座長） 福永さん、岳連活動を通じて皆さんに呼びかけたいことがありますか。

福永 岳連加盟団体が集まって自然保護指導員活動を活発にしたいと思います。全国的に見ても広島県の指導員は多い方ですから里山や草原づくりにもっと多くの人が活動に入ってきてほしいですね。ワッペンをタンスにしまいこまずに腕につけて集まりたいものです。これとは別の話ですが「わんぱく登山部」も行なっていますので協力してほしいと思います。定年後にはこうした場で持ち味を発揮されたいかがでしょうか。里山に親しむということでは私自身が何度となく北広島町にやって来てその素晴らしさを受け留めています。昔のままの風景を眺めたり自然に触れたりしていていやされております。この地を訪れて5年に

なりますが学芸員の白川さんのおかげで続けております。皆さんもぜひ里山・草原の中においでいただき、溶け込んでみてください。

野島（座長） 齋さん、道開きとなると行政との関わりが出てきませんか。そのあたりを話してください。

齋 先ほど話しました平成17年の分水嶺踏査のあと消えていた古道を復活しましたが、背丈もある熊笹を刈る作業は大変です。雑木林や倒木もあります。具体的には西中国山地は国定公園ですから可部地域事務所での承認が要りました。いきなり「こうしたい」では通りませんから日常のつきあいが大切になります。奥匹見峡の東側は国有林ですから管理担当をされている広島営林署の広島森林管理署に折衝に行きました。運よく日本山岳会会員に行政と関わりのある方がいましたので折衝が円滑に進みました。素人では伐採・草刈りが無理な区域には北広島町からも島根県の匹見町からも森林組合のプロ5名ずつがわれわれの先頭に立ち双方から詰めて1日で計画通りの道を切り開いたことがあります。同じように高岳山頂からもきれいな聖湖や臥龍山などの山岳パノラマを展望できる状態にしたいと地権者の許可を得て整備を続けております。



野島（座長） これを機会に里山・草原の理解を深め大切にこの自然を守り育てたいものです。本日はどうもありがとうございました。

—西中国山地登山者宣言—

【登山目的の多様化】

最近の価値観の多様化に伴ない、登山の目的を「山頂へ到達する」事だけでなく、「自然からの恵みを満喫する」事に設定する人が増え始めています。「歴史散策歩き」や「ブナ林自然観察ウォーク」など、これ迄の「登山」の概念では括れない、多様な自然への接し方が現れ始めています。又、自分を「登山者」と強く意識せず、「非日常的な体験を自然の中で体感する」という満足感や日常生活でのストレスや不足感を解消する目的で山や自然に接する、新しい動きが増えています。山やその周囲の自然環境は、単なる「登山技術」や「野外生活技術」向上の場だけでなく、「豊かで健全なライフスタイル再構築のヒントを見出す場」へと、その役割を拡大しています。

【「里」への回帰】

中高年・若年を問わず、自然に接する活動の場を、「身の丈の距離」に求める傾向があります。自分の生活拠点から日帰り又は1泊2日程度の日程での活動は、結果として「我が町・我が地域」の魅力再発見にも繋がっているようです。これは、現代社会が失いつつある「地域のローカリティ」や「アイデンティティ」に対する、潜在的な危機意識がその背景ではないかと推測されます。地元の「里山」「里原」「里海」「里川」という自然に接する事により、過去の人々の知恵と工夫が生かされた場面に出会ったり、身近な季節の移ろいを肌で感じながら、故郷の魅力を再発見する事が、最近特に注目を集めてきています。

【ツアー登山における参加者意識の変化】

旅行代理店が主催する募集型ツアー登山は、「寄せ集めの・大人数募集」から「アットホーム的・少人数募集」へ、需要は移行し始めています。利益優先・内容軽視に陥りやすい「寄せ集めの・大人数募集」型ツアー登山への不満の多くは、「共有感の無さ」にある様です。自然に触れた時に得られる驚きや喜びは、それを共有できる仲間や同行者がいて、感動の密度や濃度を増幅してくれます。ツアー登山を希望する参加者自身が、「ゆとり感」や「落ち着き」を持ちながら自然の中を歩く事の重要性に気づき始めている様です。

【西中国山地の変化】

半世紀前まで西中国山地の美しい山々や田園風景は、そこに住む人々の生活、つまり農林業の営みの結果として維持され、多様な動植物の生息の場として、豊かな自然環境を創りだしていました。しかし、農作業に牛馬が使われなくなり、農作物の肥料が堆肥から化学肥料に代わり、煮炊き暖房など生活の為の燃料が電気やガスに変わった為、山焼きや牛馬の放牧、草刈り等が殆ど行なわれなくなりました。その結果、かつてはどこにでもあった放牧場や草刈り場としての草地をはじめ、集落周辺の里山環境は急速に悪化して、背丈の低い植物や草地に生息する昆虫や野鳥などが、生息場所を失って減少しています。又、奥山でも林業の低迷・衰退によって、植林されたものの手入れがされていない山林は荒廃が進んでいます。

【望ましい山の姿】

私達の世代にとって農作業や山仕事を手伝い、野山を駆けて小川で魚捕りをした子供時代を思い出せば、容易にその懐かしい風景を思い浮かべる事ができます。奥山ではブナやミズナラなどを中心とした原生林が残され、里山では山焼きや放牧・草刈り場として利用される。高台に立てば美しい草原が広がり、ススキやマツムシソウやオミナエシなど、可憐な野の花が咲き乱れる。手入れが行き届いた里山にはササユリやキキョウなど、四季折々の野草が方々に見られる。山道は草刈りがされ、安全に楽しく登山ができる。時計を逆戻りさせる事はできませんが、私達にとって望ましい西中国山地とは真にそんな状態だと思います。

私達ができる事を4つ宣言します。

【私達にできる事1. 自然を学ぶ】

望ましい山の状態にする為に、私達は「自然環境についての正しい知識」を身につける努力をします。例えば、広島県山岳連盟の自然保護指導員制度は、登山者が自然を学ぶきっかけの一つであり、自然環境保全に関する自己啓発や勉強会などを効果的に実行できる環境にあります。又、西中国山地には、今でも貴重な動植物が残っているだけでなく、学芸員や研究者など、自然環境や動植物に関わる多くの専門家がおられます。これらの専門家と連携する事により、活動の質を高め、拡大していきます。

【私達にできる事2. 自然を伝える】

私達は仲間同士の登山は勿論のこと、普段は登山をしない人、登山を始めたばかりの人、また子供たちと行動する機会もしばしばあります。そのような機会には、西中国山地の魅力伝え、「自然に対する関心」を醸成していく努力をします。広島県山岳連盟の加盟団体も、「各会の例会山行」・「各種登山教室」・子供「わんぱく登山部」・韓国との「国際交流登山」や「里山の散策」を通して、会員同士・新人・子供・若者への普及活動や、自然環境保全に関する啓発活動を行なっていきます。

【私達にできる事3. 行動する】

私達は、従来から親しみやすく、魅力ある里山と登山環境づくりを進めてきました。東広島市龍王山の「西条水源の森づくり」や、「雲月山の山焼き」・「千町原の草刈り」など、様々な自然環境保全の活動に参加してきました。今後も、草刈りや雑木の整理など、里山の手入れによる自然環境保全の輪を広げていきます。林業の衰退や化石エネルギーへの転換、農業形態の変化などによる山林の利用低下により、山道・登山道が荒廃または消滅しています。魅力ある登山道を整備・保全する為に、阿佐山ルート、高岳・匹見ルートなど、安全で快適な登山道整備を継続して実施していきます。山焼きや草刈り、放牧など草原が利用されなくなった為に、聖山など多くの草山で遷移が進んでいます。それによって、山頂および登山道の見晴しが悪くなるだけでなく、多様な動植物が生息する豊かな自然環境が失われています。私達は、雑木の整理や草刈りによる景観の維持・改善を進めていきます。

【対話の継続】

私達は、これからも様々な形で西中国山地の豊かな自然の中に身を置き、「自然界からの恵みを受けたい」と願っています。その目的を実現する為の活動には、関係する自治体や、地権者をはじめとする地域の人々に私達の活動を理解して頂き、活動の了解を得て、時には協力して頂く事が大切です。その為には、対話と協調が不可欠です。私達は、関係する全ての主体と良好な対話環境を醸成し、維持していく努力を続けていきます。

第3分科会

草原と暮らす，私たちの未来

座長：宮本裕之（雲月山活性化委員会事務局長）

企画責任者：八幡高原地域振興協議会・雲月山活性化委員会・西日本草原研究グループ

講演 1 「時代がつくる草原の価値」

井上雅仁（鳥根県立三瓶自然館）

講演 2 「草原を維持している地域の現状」

藤澤 通（雲月山活性化委員会 会長）

講演 3 「都市・農村連携による草原保全の取り組み」

山内 康二（財団法人阿蘇グリーンストック 専務理事）

総合討論

井上雅仁 私が住む三瓶山では、大田市の職員やボランティアなど約 100 名が、毎年 3 月 20 日前後に野焼きをします。これだけ多くの労力をかけてまで維持される「草原の価値」についてお話ししたいと思います。

大田市には、2 年前に世界遺産登録を受けて有名になった石見銀山があります。石見銀山が世界遺産登録を受けた第一の理由は、人が住んでいた所、銀を積み出した所、それから銀を掘っていた所など、鉱山とし

て一体的にきちんと残っていた点です。そして、もう一つのキーワードが「自然との共生」でした。海外の鉱山や足尾銅山など、近代的な開発をされた鉱山は、たいていはげ山になってしまいます。ところが石見銀山は、城跡がある山や山の中を縦横無尽に走っている「マグ」と呼ばれる穴を掘った跡なども含め、昔鉱山で開発された場所も緑で覆われています。「緑につつまれた鉱山」「上手に山林の資源を管理して石見銀山というのが守られてきた」ということが世界の審査員の方の心をグッとつかんで、世界遺産登録につながりました。

当時の絵図を復元したのを見ると、坑道の入口や内部の補強などに、たしかに山林からの資源がたくさん使われています。当時は鉄など無いので、周りの木、特に腐りにくいクリなどがよく使われていました。木が足りなくなると、隣の村から調達したり、それでも足りなくなってくるとクリを植樹したりしたようです。また、銀を精錬するには、燃料の炭や、ツバキの灰などが必要でした。こうして見ると、当時から銀山の周りには豊かな森があったような印象を受けます。

ところが、古文書などで詳しく調べてみると、山の



半分くらいは入会などの草山だったということが分かりました。これは石見銀山だけではなくて、当時は全国的に草の山があったようです。たとえば長野県の善光寺というお寺に残っている天保年間の絵を見ると、お百姓さんが低木のシバを田んぼに入れたり、馬を引いたり、山に草原が広がっている様子が描かれています。田んぼの肥料、牛馬の飼料などが必要だったということを考えると、石見銀山の周りに草原が広がっていたというのも納得できます。そう考えると、登録のキーワードになった「緑につつまれた銀山」というのは、本来の姿では無かったということになります。

草原の恵みは、牛馬の餌や肥料だけではなく、堆肥やきゅう肥、屋根の材料、薬草、それからワラビなんかも採れます。三瓶も「三瓶ワラビ」と言っていて、地元の人達が結構な距離を歩いて採りに来たと聞いています。こういう恵が、様々な形で地域の農林業を支えてきたんじゃないかなと思います。ところが、1960～70年に、高度経済成長とか企業革命が起こってくると、牛の餌は外来の牧草になっていき、化学肥料が導入され、屋根の材料も瓦の屋根が中心になっていきました。センブリなどの薬草も化学薬品で置き換えられるようになりました。今まで草原から取れた資源が他の物に取って代わられるので、放牧や草刈りが無くなり、草原が私達の生活を直接支える存在ではなくなってきました。

そこで草原の価値が変わったことで、草原の面積がどう変わったのかを、地形図を使って調べてみました。明治時代半ばには、中国地方の広い範囲を草原が覆っていました。ところが、1990年代の地形図を見ると、残っているところは非常に少なく、大山、三瓶、秋吉台などと、河川敷に帯状に見られるだけで、多くの草原が姿を消しています。三瓶山も、ほとんど木が無い山でしたが、草が不要になり、今は木に覆われています。しかし、草原は本当に価値が無いのでしょうか？あるいは、どのような草原を利用する道があるのでしょうか？

広島県高野町では、農家さんが刈った草を田んぼに入れています。草を刈る作業はたいへんなので止めたから、米の味が悪くなったそうです。そこで、草を入れることを再開したら米の味が戻ったということです。四国の塩塚高原では、茶畑にススキを敷いています。これには、雑草のマルチと土の流出防止の意味があるそうです。お茶を買い上げるお茶屋さんからは、ススキを敷くように指定があるそうです。このような例は



他にもたくさんあって、草はバイオマスエネルギーや、ペット用の飼料など、様々な需要があります。

また、例えばオキナグサやダイコクコガネなど、草原にはその管理方法に従って、特有の生物が生育・生息しています。森林などに比べると絶滅危惧種の総数としては少ないですが、密度は高く、狭い範囲に多くの生き物が成育しています。草原の植物を、盆にお墓に供える風習や、阿蘇の「草泊まり」など、伝統を伝えるための大切な場にもなっています。見通しが良いために安全な草原は環境教育にも最適で、阿蘇ではススキの和紙を使った卒業証書も作られています。何よりも、のどかな風景そのものが草原の価値と言えます。観光客へのアンケートからは、阿蘇や三瓶の草原は数億円にもなるという試算結果が報告されています。

このように、草原は、資源として、生物多様性保全の場として、環境学習や伝統文化の継承の場として、今も価値が高いことが分かります。また、二酸化炭素の吸収源となっている可能性もあるなど、新たに価値が見出されつつあります。このような、生態系が与えてくれる価値を「生態系サービス」と呼びます。草原から与えられる生態系サービスは、価値があることは確かですが、人手がかかるのも事実です。それでは、どのようにすれば良いのか、というのが、本日の大切な議論になると思います。

—— エクスカーションでは雲月山で牛道を見ましたが、三瓶にもあるんですか？

井上 三瓶にもそれらしいものはありますが、あまりはっきりしません。牛道というのは急傾斜のところでできやすいのですが、三瓶の放牧地はなだらかなので、どこでも歩きやすいためにあまり発達していないのだ

ろうと思います。ただ、イバラが生えてくると、牛はそれを避けて通るので、牛道のようなものできます。

—— 山口県の両端に草原が多かったようですが、なぜですか？

井上 おそらく、地図を作る時の問題だと思います。山口に隣接する広島や島根にも、古文書などによると草原は残っていました。木がまばらに残っていたためにマツ林とされて、山口の図を作る時には草原とされたのではないかと思います。つまり、作る人の主観が反映されているのではないのでしょうか。

—— お茶の生産農家に対して、お茶屋さんが引き取る条件にしているということでしたが、お茶屋さんの名前はわかりますか？ペット用の飼料として高く買われているということですが、業者の名前を教えてくださいいただけますか？そういうところにススキを売り込みたいのです。

井上 具体的な名前まではわかりません。飼料は、動物園の飼料としての需要があるということでした。

—— 5年ほど前の調査で、三瓶山を訪れる観光客が70万人ほどだと聞いたのですが、石見銀山に登録されてから増えていますか？

井上 残念ながらあまり恩恵は無いようです。今60万人くらいで、逆に世界遺産にお客さんを取られているのではないとも言っていますが、仲良くやっています。

—— 僕は九重から来ています。ちょっと気になったのが、僕らで言う「盆花」。そういう貴重な植物の盗掘に苦慮しているところですが、具体的な対策があれば教えてください。

井上 基本的にはなかなか難しいです。三瓶山は国立公園で希少な植物もあります。夜、薄暗い時間にアヤシイ人がいて、翌日には無くなっている、ということもあります。50万円の罰金も規定されていますが、なかなか無くなりません。やはりこまめに見回りをする必要があると思います。子どもなどを連れて歩くときにも、必ず「捕ってはいけない」という話を

します。すると、ほとんどの方は理解してくれます。そうしたことを繰り返して、地道に理解者を増やしていくしかないのではないかと思います。

藤澤 通 雲月地域でどのように山焼きをやっているか、をお話ししたいと思います。雲月山は、昔はイベントで山焼きをしていました。人を集めておいて「雨だから中止」ということは難しく、イベントとして開催するにはリスクが大きく、地域も高齢化したので、止めようということになりました。それから時が経ち、木立が生えてきて、このままだとただの山になってしまう。なんとか昔の姿を取り戻さないか、という話がありました。

昔は市内の方からも、バスを何台も連ねて人が来られていたこともあります。地域の高齢化はありますが「そがあゆうてもやれんで」ということで、ボランティアを募って実施してはどうかということもあり、みなさんのおかげで、地域の者も出て、本日の山焼きが継続されているところであります。ボランティアの方々も、今年は133人でしたが、だいたいそのくらいから200人まで、年によって変動はあります。たまたま日和の加減で、この5年間は火を入れることができました。

雲月地区は7集落あり、各区長さんに集まっていたら、合議をして火入れをしようということになっていますが、今年も非常に辛い判断をしました。私一人に責任があるわけで、事が起きた時にはたいへんなことになるわけです。町からは、いくばくかの助成金もいただいていますし、消防団にも手伝っていただいているところですが、火入れの意志決定についても、一緒に意志決定していただきたい、というところが大きな課題です。



牛も放牧していただいているのですが、ご覧頂いたように、部分的には牛が集まるところがあって、もう草がない状態になっています。雲月山の草原は、現在44町ありますが、その中の8町と12町を切り分けて焼いており、残りのところは、木立が高くなっています。これを切らねば牛も入らず、景観のためにも、放牧のためにも、木を切って草原を広げなければならぬと思っています。今年は上野先生からの指摘もあり、いくらかの伐採をしました。

9月に雲月山1周の道を草刈りしましたが、その時に、採取網を持っている人がいました。やはり、どこも同じことみたいですが、植物の採集、昆虫の採集がされています。これも方法が無いように聞きました。とりあえずは看板を作って、頂上のところと六角堂の2箇所くらいに設置したいと思っています。西中国山地自然史研究会と一緒に立てようか、と思っています。

ボランティアの方々にお出で頂くのはありがたいと思っていますし、マスコミで放映して下さるのはありがたいのですが、問題点として、もしも物見遊山で来られる、写真を撮りにこられる方だけになるとやれないし、駐車場も限られているので困ります。勘違いされると困るのですが、山焼きの目的は草原の維持・管理で、「火を入れておもしろい」というわけではありません。ボランティアのみなさんとは防火帯と一緒に刈ったり、火入れした後は消したり、という作業を伴っています。安全に裏打ちされた火入れでなければいけないし、そうでないといけない。草原管理の方法としては火入れしか無いわけで、あの山を刈る、集めるわけにはいかない。手法としては火入れしかない、と私は思っています。

安全対策については、さらに良い方法が無いか、模索しており、ジェットシューターの数をもう少し増やしたりしなければならない、と思っています。町が合併したことでもあり、よその地区の消防団のものを借りる、という方法もあるかと思っています。色々な作業が一通り終了した後で、ボランティアの方々にアンケートを書いていただきますが、昼食は少しもの足りなかった、ということもあるので残念です。豪華にすれば良いのですが、うちも500円を頂いてボランティアに来ていただいている、というたいへんありがたいことなのですが、町からの資金援助もウン万円しかいただけていないので、もう少しいただきたいところです。今まで5年間やってきましたが、竹下町長には1度も来ていただけず、残念に思っています。通常のイ

ベントでは無い、という心構えでやっていますが、1度くらいはお出で頂き、この事業に理解をいただきたいと思っています。

— 岩手で大きな茅場を作って20～30ヘクタールを管理しています。昨日は山まで行けずに残念でした。火入れは、どのくらいの頻度でやっているのですか？子どもの頃、岩手の山は3年おきくらいにやっていたのを覚えています。

藤澤 現状としては、燃えにくい場所を除いて、それ以外の場所を8町と12町に分け、交互に焼いています。つまり1年おきです。

— 牛を放牧しているのは焼いているところですか？

藤澤 12町のところと、燃やしていないところです。

— 牛馬を放牧すると、ススキが食べられて弱ってシバ草原に代わると思いますが、そのことについてはどう思われますか？

たまたま、牛を放牧しているところは、ススキがあまり生えていなくてササが多く、ササを食べています。

宮本裕之 44町のうち、22町には、十何年火が入っていません。大きな木が生えて、ここには火を入れても燃えません。そこで、毎年何本かずつでも切って、草原にしようと思っています。

岡本洋壮 牛は先にササを食べます。そして、何もなくなったらススキを食べます。それで、今はススキは



残っています。面積がかなりあるので、木が入っているところにも入って行って笹を食べるので、ススキは残っています。ササが小さいササになったら、牛が喜んで食べる、という状況です。

山内康二 阿蘇の草原は「千年の草原」と言われていますが、最近の研究では1万年前から火入れがされていたと分かっています。ただ、「万年の草原」というのはあまり語呂が良くないので「千年の草原」と呼んでいます。ハナシノブ、ヒゴタイなどの希少種も多く見られます。阿蘇は、年間1,900万人くらいの観光客が訪れますが、東京農大がアンケートをしたところ、60-70%の人が「美しい草原景観が阿蘇の魅力の1位」と答えたそうです。また、九州を流れる1級河川は9本ありますが、そのうち6本が阿蘇を水源にしています。阿蘇地域は年間3,000ミリの雨が降るのでそうなのかな、とも思いますが、草原が関係していることが分かってきました。水源涵養という、すぐにみなさん、森を思い浮かべますが、京都大学の総合地球学環境研究所の研究によると、草原は、森に劣らず水源涵養機能があるそうです。ヒノキ林では、降った雨の30%ぐらいが遮断蒸発により、地面に到達する前に蒸発しますが、草原に降った水は地面に達します。その意味で、人が有効に利用するためには、森林よりも草原の方が良いそうです。阿蘇の外輪山の内側は、森林になっていますが、昔は全部草原でした。古い年配の人はみんな、草原を森林に変えたら川の水が減った、と言っています。そういうこともあって、ますます草原を守ろう、ということに力が入っています。

阿蘇も明治時代からすると草原が半分ぐらいに減っています。阿蘇全体の草原面積は約23,000ヘクタールぐらいで、入会権者が9,000戸から1万戸ぐらい

です。昔は入会権者の農家全てが、馬か牛を飼っていましたが、今は有蓄農家は12%くらいです。野焼きは入会権者の義務なので、ほとんど全ての農家が出てきますが、防火帯作りは有蓄農家がする、というところが多く、草原を維持する農家は1割くらいということになります。有蓄農家は平成7年から比べても50%ぐらいに減ってきており、草原の管理がたいへんな負担になっています。その中で、14年前に財団が発足し、それから3年目ぐらいにこのボランティア活動をはじめました。

阿蘇の野焼きボランティアは11年前、当時110人のボランティアで始まりました。現在は、輪地切り(防火帯づくり)も含めて、年間に約2,000名のボランティアが参加し、5,500ヘクタールの草原を管理しています。阿蘇の野焼きはたいへん危険なので、研修に参加してもらわないと参加できません。毎年2月に、2回合計で150人ぐらいがボランティアの研修を受けます。これは地元との約束で、「何も知らん人が来ても足手まといになるだけで、ケガをされてもこまる」と初めは仰っていました。しかし、3年くらいすると、ボランティアが非常にマジメなことを理解してもらえました。また、阿蘇ではこの辺と違って、いつ野焼きをするか、というのは一般の方や観光客には知らせません。特に写真を撮る人は、近づかないと良い写真が撮れないので近づいていきます。これがたいへんな事故になるので、一般にはお知らせしません。今年の3月、大分で痛ましい事故があったので心配したのですが、今年も大勢の方がボランティアに参加してくれました。阿蘇の場合、ボランティアさんは、参加するときにライターかマッチを持つというのが鉄則です。万が一の場合には、自分を風上に置いて、火を付けて燃やしてそこに逃げ込む、というのが、昔から伝わる、自分を守る方法です。このような形で11年、無事故のまま続けてきました。昨日・今日も、輪地切り、輪地焼きをしています。

ボランティアの合い言葉は「阿蘇への恩返し」です。何年前かに地元の人が、ボランティアが熱心に来るのを不思議に思って聞いたところ、福岡のボランティアが「阿蘇への恩返しと思ってやっている」と答えたのです。阿蘇は九州の源流になってますので、生活の水であり、ドライブ、登山などで楽しませてもらった恩返しをする、という気持ちでやっています。ボランティアには、地元の牧野組合から温泉券が1枚提供されるだけですが、弁当も交通費も手弁当です。その他、



年間 2000 円が聴取されます。

防火帯を作る輪地切りは、今が真っ盛りで、これから 10 月くらいまで続きます。阿蘇郡全体では 550 ~ 600km くらいで、熊本から静岡くらいの距離になります。それを毎年作るのは本当にたいへんな労力です。われわれはこのうち 36 箇所、160km くらいを応援しています。当初、ボランティアは野焼きだけだったのだが、二年目からは輪地切りもはじめました。最初、野焼きには人が来るけれど、輪地切りには来ないと思いました。しかし、最近は輪地切りの方が人気があります。なぜなら、火入れでは「ボランティアは、消火に徹しなさい」ということになっています。火を入れることができないので、飛び火などが無く、何も無いときには活躍の場面がありません。その意味で、ボランティアは主役になれないのです。輪地切りでは、自分たちが主役になれます。きついけれども人気がある作業です。地元の方は、輪地切りは自分たちの牧野だけなので、年に一度の作業ですが、ボランティアの人で熱心な人は年に 15 回 -20 回来られます。3 年もすると、地元の人と同じくらい仕事ができるようになるのです。阿蘇郡で一番の急傾斜地は 60-70 度の傾斜で、登山用のスパイクを点けないとすべる傾斜が 300m くらい続いていますので、ボランティアも自衛隊や消防隊員など、ここに行けるのは選抜隊です。ここでの輪地切りは、最初の 2 年くらいは地元の方が先頭を行っていましたが、今はボランティアの方が先行します。

阿蘇郡では、全体で 16,000 ヘクタールの野焼きがされています。150 くらいの牧野で野焼きがされていますが、小さな野焼きも合わせると、消防署に届けがあるのは 170 箇所くらいあります。火を引くのは地元の人で、ボランティアは火消し棒を持って後ろから付いていきます。火を入れる時には、輪地焼きをしてあっても、必ず上から 1 線か 2 線火を入れて、防火帯を拡げて、下から火を入れます。火引きのタイミングが合わないと、周囲の山林に火が入るので、タイミングを合わせるのが大切です。

困っているのは、地元の後継者が居ない、ということです。私達のボランティアでは、火を付けるのは、風向きや草の乾き具合で火の勢いが全然違うので難しいため、ボランティアは絶対に火をつけてはいけない、ということになっています。しかし、地元の高齢化で、だんだん火を付ける人が居なくなっている。一番たいへんなところは、60 から 70 ヘクタールくらい

の草原を、6 軒の入会権者でやっています。このうち、65 才以下は 1 軒だけで、一人は 85 才の人が出てきています。そういうところでは「もうできん」と言ってやめたらお仕舞いです。何カ所かは、ボランティアに火を付けるのを手伝って欲しい、練習しながらやって欲しい、という話しが出ています。今のところ、ボランティアリーダー会では「基本的には辞退する」ということになっています。しかし、どうしても、という場合、地元の人に付いて教えてもらいながらなら、指示に従って点けるということになっています。しかし、既にそういうことでは済まない事態になっているのが現状で、なんとかやっていけないかな、ということを模索しながらやっています。

ボランティアから推薦を受けた人で、「自分になっても良い」という人には、救命救急など講習を受けていただいて、リーダーをしていただいています。今、登録いただいているボランティアが 650 名、そのうちの 60 名ぐら이가ボランティアリーダーです。ボランティアは県内が多いですが、福岡や、本州では山口や広島、最近では、新潟の先生がリーダーになられて、そこの大学から、毎年学生がやってきます。ボランティアのメンバーは、始まったときには 50 代の人が多かったのですが、熱心な方はずっと続けて 60 代が中心になりました。地元の高齢化もたいへんなんですが、ボランティアの高齢化もたいへんなんです。そこで、今年から学生ボランティア組織を作ろう、という試みがあります。私も知らなかったのですが、熊本県立大の副学長がボランティアに来てくださっていたようです。ボランティアの時には肩書きナシなので、大学の先生だろうと、JR の専務だろうと関係無いんです。今年、120 名くらい学生が輪地切り体験に来る予定ですが、その中で学生組織を作ろう、ということを考えています。

阿蘇には 170 くらい牧野組合がありますが、牧野組合長が野焼きの全責任を負うことになります。昨年何カ所か延焼がありましたが、地元の人たちは慣れていて、自分とこの牧野の森林だったら、3 日くらい警察と消防に怒られないといけなかな、という感じで、よっぽど大切な森林が燃えないかぎりには大きな問題になりません。植林地に経済価値があった時代には、焼けた木を切って、苗木を植えて 15 年から 20 年下草刈りをしてお返しをする、という約束があったようですが、従って延焼というのはたいへんなことだったのですが、今は材の価値があまりないので、わりと仲が

良いところなんかは焼酎3本で済むこともあるようです。それでも、牧野組合長さんは、野焼き当日には神経をピリピリさせていますし、消防署と警察署には怒られに行かないといけならしいです。

阿蘇では、8箇所200haくらいの草原で、一部は環境省の草原再生の協力を得ながら、野焼きを再開してきています。例えば、九重と阿蘇の境に約2ヘクタールの瀬の本高原という草原では、平成13年に、ボランティアといっしょに、4年か5年ぶりに野焼きを再開しました。中には20数年ぶりに再開したところもあり、こんなところはジャングルを切り開くように輪地切りをしました。20から30年ぶりでも、5年くらいしたら見事にきれいな草原になりました。阿蘇では2002年に第5回の草原サミットが開催されましたが、その時の分科会で、現地を見学した参加者から、「半分は野焼きされている山、半分はされていない山が並んであるが、なんとかならんのか」という意見がありました。それが南阿蘇村の夜峰山ですが、一昨年、10年ぶりに野焼きを再開しました。輪地切りにはボランティアのべ350人、地元が100人参加し、3日間半で防火帯を作りました。10年ぶりくらいなので、茅が堆積しており、ひざまではまりながら防火帯作りをしました。さらに、堆積した茅をのけないと、火入れはできません。それくらい、野焼きを再開するのはたいへんです。2年目に、私は2日はかかると思っていたのですが、100名で、半日で終わりました。そのくらい野焼きの効果はあるのです。

草原の価値という点では、北海道大学関係の研究者が調査を進めています。以前は、野焼きをすると地球温暖化になるのではないかと、という話がありましたが、それ以上に、腐敗しない炭という形でのCO₂の固定化に役割を果たしているのではないかと、ということ北海道大学と宮崎大学が調査しています。そうすることが科学的に証明されたら、草原の価値がさらに見直されるのではないかと、思います。地元では、お茶、トマト、キュウリ、花壇の花などに、野草堆肥が良いということで利用されています。ボランティアさんには草刈りが好きな人がいっぱいいて、輪地切りも、お昼前に終わるようだと言われ、消化不良だ、と言う人もいます。そこで、地元の農家の人などと協力して、傾斜地で機械が入らないところの草を切って野草堆肥を作る試みが進んでいます。また、去年は京都の茅葺き職人から頼まれて、茅材を10トントラック2台くらい出荷しました。今年も出荷する予定です。このように、新しい草原の価値が明らかになり、新しい茅の利用方法が広がっていけば、地元のためになるし、草原も再生されるのではないかと、思います。阿蘇を世界文化遺産にしようということで、熊本県も腰を上げつつあります。

都市に住む人々が受けている、空気、水、おいしい食べ物などは、ほとんどが農村から供給されています。都市の人々も、もう少し草原景観の維持などに目を向けるべきだと思います。お年であり活動に参加できない人は賛助でも良いし、元気が残っている年寄りも活動に参加していけば良いのではないかと、思います。



－草原の担い手宣言－

【草原の価値】

私たちは、半自然草原がもたらす恩恵が、他に代わるものが無い、貴重なものだと考えます。草原から得られる草は、有機野菜や茶の栽培、和牛の飼育など、安心・安全・高品質な食材の提供に不可欠です。このような伝統的な利用に加えて、草のバイオマスエネルギー利用など、技術革新による新たな価値も生まれています。また、今日、重要性を増しているのが文化面での利用です。草原を対象としたエコ・ツーリズムは、個人旅行・団体旅行を問わずに各地で盛んになっており、重要な観光資源として草原が認識されつつあります。旅行者にとってだけでなく、地域に暮らす私たちにとっても、草原はふるりの原風景であり、精神的な拠り所でもあります。目に見える様々な価値を供給してくれる一方で、草原の存在そのものは、大規模森林火災を防止するための機能も有しています。草原生態系がもたらす恵みと、それらを支える生物多様性は、火入れや採草、放牧など、人による利用と管理が、長年にわたって続けられてきた結果です。私たちが祖先から引き継いだ草原の恵みを、我々の子どもたちが変わらず享受できるよう努力することは、社会的な責務であると考えます。

【地域の現状と担い手づくり】

草原とともに暮らす私たちの地域が抱えている共通の問題は、草原の管理・活用をする次代の担い手が不足している、ということです。今日、日本の中で草原を維持しているのは、中山間地など、都市から離れた地域です。戦後の日本では、経済成長を第一目的とし、社会機能が都市を中心に整備されてきた結果、中山間地帯をはじめとする過疎地では、少子化・高齢化が進行しました。火入れ・放牧・採草など、人の手が入ることによって維持されてきた草原は、管理せずに維持することはできません。しかし、そもそも地域の担い手が不足している現状では、地域の中だけで草原を管理し続けることは不可能です。今後、草原を維持していくために、地域は積極的にボランティアの協力を仰ぎ、安全に気持ちよく活動していただけるように努力します。都市に住むボランティアも、地域のお手伝いができるよう、無理の無い範囲で地域を支える努力を続けます。また、今後は、地域の出身者が山焼きのために里帰りをしたり、キッズプログラムなど、若い人や子どもが参加できるような工夫を続けていきます。

【行政との連携】

山焼きを困難にしているそもそもの原因は、地域活力の低下にあります。住民が住みやすい地域づくり、定住を促す環境づくりのためにも、産業、教育、医療、福祉など、様々な面で行政の協力を仰いでいきたいと思えます。私たちが望んでいるのは、山焼きそのものを観光として実施することではなく、良好な草原を保全し、活用していくことです。安全に山焼きを継続していくためには、行政との連携が欠かせません。第一に、消防団の協力無しに、山焼きを実施することは、不可能です。第二に、山焼きが実施できるよう、現状に即した条例の整備と運用が必要です。第三に、当日の実施体制の中で、地域への告知や関係団体との連携など、調整が必要です。伝統的な草原管理が途絶えないように、地域は、行政と継続的に対話していくための方法を探っていきます。

サテライト分科会

草原の持続可能な利用と生物多様性

コーディネーター：中越信和（広島大学大学院国際協力研究科・教授）

日時：2009年9月4日（金）10:00～12:00

場所：広島大学大学院国際協力研究科2階201教室

はじめに：開催趣旨と日本の草原の問題

中越信和（広島大学大学院国際協力研究科・教授）

講演1「広島県における畜産の動向と放牧の実態」

神田則昭（広島県総合技術研究所畜産技術センター・副部長）

講演2「リモートセンシング技術による草地の健康診断」

川村健介（広島大学大学院国際協力研究科・准教授）

総合討論

指名コメンテーター：東敏生（広島県総合技術研究所畜産技術センター・次長）

おわりの挨拶

塚本俊明（広島大学地域連携センター・教授）



－広大メッセージ－

【日本の草原が危ない】

1998年9月21日、広島大学で日本植物学会第62回大会のシンポジウム「二次草原の生物多様性の保全」が行なわれました。その全内容は雑誌「遺伝」53巻10号の14～47頁に「日本の草原が危ない」と題する特集として発表されました。この中で、森林が成立する環境下に成立している全国の草地を、今後積極的に維持管理しなければ、わが国は草原を失ってしまうことが、全6本の論文いずれにおいても主張されています。この特集から10年経過しましたが、いまだ日本の草地を守る運動は全国的なものになっていません。

【生物多様性の高い草原生態系】

中程度の攪乱を受ける草地には、数多くの草本性植物が生育し、またその植物に頼って生きている動物もたくさんいます。特に、さまざまな段階の草地、例えば放牧地、刈り取り草地などがモザイク上に分布している場所は、極めて高い生物多様性を保持しています。

これは、火入れと放牧で維持されている雲月山の草原でも同じです。したがって、いままで通り、手を加えなくてはなりません。放置しておく、低木林、高木林に生態遷移して草地は無くなります。草原生の動物も絶滅します。また、草地を狩場に行っている大型の動物にとって生活しにくい場所になります。

【広島県の畜産と放棄耕作地の生態保全】

広島県では、市場で評判の高い広島牛の生産を奨励しています。野草で育てた牛は大変元気です。でも草地が減少してきて、牛を飼育するのに苦労しています。県内にもっと草地が必要です。これとは別に県内では農地の放棄も著しく、その景観管理に苦慮しています。これを同時に解決するため、牛を放棄耕作地に放牧することを始めました。結果は上々で、牛も元気で、農地の形状もいつでも耕作できる状態に保てます。広島県はこのように、牛を使った環境保全と畜産の振興に努力しています。より多くの農家がこの事業に参加してくれることを望んでいます。

【草地の健康診断】

短期間に遷移して森林になる場所では、草地のモニタリングが不可欠です。人工衛星や無人飛行機及び波長分析器の発達で、草地の遷移度や草の栄養状態（窒素やリンなどの含有量）を把握できるようになって来ました。昔のように全ての草地を調べなくても、問題がある草地を見つけ出し、そこの管理をすれば良いことになり、草地の管理が効率的に行なえます。また、GPSなどを使えば家畜がどこをよく利用するかも判るようになりました。

【今後の課題と展開】

研究者の役割は、研究を通じて解ったことを、いかに上手に農家や草原ボランティアに伝え、利用しやすい管理マニュアルを示すことにあります。また行政に働きかけて、草地の維持がどのように大事かを解き、草地や文化的景観の保全のための予算組みをお願いすることでしょう。そのために、もっと研究を深めなければいけないと考えています。



全体討論

座長：高橋佳孝（全国草原再生ネットワーク会長）

パネラー：淀淵可葉、上田 琳（雲月小学校）・野島信隆（（一社）広島県山岳連盟・（社）日本山岳会広島支部）

宮本裕之（雲月山活性化委員会）・中越信和（広島大学大学院国際協力研究科）

高橋佳孝（座長） 今から全体討論会の司会をさせていただきます。高橋と言います。ちょっとだけ自己紹介をさせていただきます。私は島根県の大田市、さきほど発表があった志学小学校の近くに住んでいます。そこに職場があるんですが、ずっと草原の研究をやって来ました。今日掲げております第8回全国草原サミットの第1回目が、1995年に久住町というところでありました。その後、草原サミットにずっと関わって来て、関わってるうちにですね、守りたいという熱意だけはどこにいてもすばらしいんだけど、みなさんがいろんな悩みを持っていらっしゃる。それぞれの問題をかかえていながら、それぞれに解決している場所もあって、これは情報の共有とか、受け渡しをすれば、もっともっと草原の活用や保全というのは進むのではないのではと思って、全国組織を作りました。そういう立場上、今回司会進行させていただきますが、何ぶん慣れないものですから、不手際があろうかと思えます。パネラーのみなさんに助けていただきながら、少しでも良い形で進行して行きたいと思えます。

それではまず、先ほどまで行われておりました各分科会からの報告を、若干の自己紹介を兼ねながら、報告していただこうと思います。はじめに第1分科会、淀淵さんと上田さん、よろしくお願ひします。

淀淵可葉 私は雲月小学校6年、淀淵です。よろしくお願ひします。

上田 琳 私は5年上田です。私たち2人はオペレッタでササユリを演じました。よろしくお願ひします。

淀淵 私たちの第1分科会では、全国子ども草原サミットとして、草原のことを発表して話し合いました。参加したのは、島根県大田市立志学小学校の児童代表14名と、山口県美祿市立本郷小学校の児童代表11名、そして雲月小学校の全校児童17名です。また、たくさんの方々がサミットを傍聴してくださいました。

上田 私たちはそれぞれの学校で学んできた、地域の草原のことをパワーポイントを使ったり、オペレッタを演じたりして、発表してきました。発表の後には意見や感想を話し合いました。そしてみんなで全国子ども草原サミット北広島宣言を宣言しました。今からその宣言を読み上げるので、聞いてください。

淀淵（-- 宣言読む --）以上が第1分科会からの報告です。ありがとうございました。

高橋（座長） とっても立派な報告で、びっくりしました。それから、各地で子供さんたちが自分たちの宝を守るために一生懸命関わっていらっしゃるのわかりました。これを機に交流が進むといいですね。

それでは第2分科会の報告を野島さんの方からお願ひします。

野島信隆 第2分科会で座長を務めました野島です。私は、広島県山岳連名の副会長兼、普及部長をしておりますが、日本山岳会でも自然保護指導員の副委員長、それから登山講座の委員長を務め、現在は中国新聞の文化センターの里山ハイキングの主任講師をしております。益田の出身です。第2分科会は「西中国山地の魅力ー登山と草原」と題して、パネラーに広島山岳連名から2名、日本山岳連盟広島支部から2名、合計4名の登山愛好者で、合計73名が参加し、話し合いをしました。草原（そうげん）は草原（くさはら）に限定せず、広く草地と捉えまして、登山の関わり、魅力、自然環境保全の必要性を話し合い、我々が今後取り組むべき方向というのを検討しました。宣言文はちょっと長いですが、読み上げます。（-- 宣言読む --）以上です。

高橋（座長） ありがとうございました。先ほどの子供サミットと同様に、登山という立場から草原を扱ったというのは初めての試みで、非常にたくさんの御示

唆をいただきました。登山の対象とか年齢構成とかが様々に変わるなかで、登山者のまなざしそのものが変わって、さらに行動しようと言う決意表明だと思えます。

それでは第3分科会の報告を宮本さんの方からお願いします。

宮本裕之 第3分科会の座長を務めさせていただきました、雲月山活性化委員会の事務局、宮本です。

第3分科会では、「草原と暮らす、私たちの未来」ということで、三人の方に講演をしていただきました。最初に「時代が作る草原の価値」で、島根県立三瓶自然館、井上雅仁学芸員のお話をきかせていただき、これに対して意見と質問を三点ばかり受けました。講演の二番目が「草原を維持している地域の現状」ということで、雲月山活性化委員会、藤澤通会長に、山焼きを始めた時の様子、これからの課題について、いろいろと話をうかがいました。三番目に、財団法人阿蘇グリーンストック専務理事、山内康二様に「都市・農村連携による草原保全と地域振興の取り組み」ということで講演をいただきました。三人とも熱く語られまして、最後の総合討論ができませんでした。時間が全く足りませんでした。そういった中でも60人を越える方のご参加をいただき、飛び入りで地元出身の衆議院議員、橋本博明先生もこの分科会に加わっていただきました。

それでは、第3分科会で決まった宣言を読み上げさせていただきます。(→宣言読む→)以上です。

高橋(座長) ありがとうございます。草原は様々な価値を持ち、それに代わることの出来ないものがたくさんあるんだ、ということ認識した上で、それを持続するためにはたくさん問題があるんだ、ということ御提起いただきました。しかも、その解決のために今一生懸命取り組んでいる。行政との連携も含めた、そういう取り組みの展開を宣言していただいたと思っております。

それでは第四分科会の中越さんの方からご報告をお願いします。

中越信和 中越でございます。広島大学に勤めております。

実は他の分科会が本日開かれたのに対して、私のサテライトの会は9月の4日になっております。その

へんの事情もふまえてお話をさせていただきたいと思えます。実は4月の18日に、重い病気になりまして、今はもう治ったのですが、後遺症があって、鎮痛剤を飲んでいるものですから、末梢神経が麻痺していて、酔っぱらってしゃべっているように思われるんですけど、(酔っぱらっていることもあるんですけども)今日は普通の状態こんな状態になっております。

どうしてサテライトなのかというと、もともと第4分科会という研究者の会を開くことにしていたのですが、私が入院してしまったので、いつ復帰するのかわからないということで、切り離されてしまったのです。さらに言いますと、ここに来ることももしかしたらおぼつかないしれないので、9月の4日になんとかして開いた会のメッセージを今日の資料に印刷させていただいております。これを全部読むわけにもいきませんから、肝心な所だけを申し上げることにして、広大メッセージとさせていただきます。

9月4日に「日本の草原の問題」ということで、広島大学の関係者と、広島県の総合技術研究所畜産技術センターとで、合同の研究会をいたしました。

ご発表いただいたのは、広島県総合技術研究所畜産技術センター副部長の神田則昭さん、広島大学大学院国際協力研究科准教授の川村さんです。

日本の草原が非常に危険な状態になって、草原がなくなるという心配から始まり、生物多様性の高い草原生態系の話を中心にさせてもらいました。広島県での取り組みをご紹介いただき、広島県の畜産と放棄耕作地の生態保全ということで神田さんにお話をいただきました。川村さんには、草地の健康診断が最新の技術で人工衛星、あるいは飛行機であるとか、さらには波長のちがうスペクトルで、診断できるんだと、そういう最近の研究成果をご発表いただいたわけです。これに対して、総合技術研究所畜産技術センターの次長、東敏生さんにコメントをいただきまして、さらに広島大



学地域連携センターの塚本俊明教授に終わりの挨拶をしていただきました。どうして、塚本先生がいらっしやったのかというと、広島大学と北広島町と連携をしております、連携の一環として学術的な貢献を北広島町にお伝えすると、そういう役目を持っております。

広大メッセージは長いので、一番最後だけ読ませていただきます。(―宣言読む―)以上が広大メッセージでございます。どうもありがとうございます。

高橋（座長） ありがとうございます。自然を再生したり、保全したりするときには科学的裏付け、きちんとした間違っていない方向性という検証が当然必要でして、そういう意味では研究者の責任というのは非常に大きいのだらうと思います。今後は現場に役立つように、現場にも研究者は入って行きたいという決意表明だった様に思います。

一応、分科会の報告は今のような概要で、いろんなことについて討議がされたようです。

今から、パネルディスカッションをさせていただきますと思いますが、論議の切り口として、言い古されたことではあるんですけど、「草原の魅力って何なのか」ということをお聞きしてみたいと思います。まず最初に、雲月小学校の淀淵さんと上田さんにお聞きしたいんですけど、お二人は学校の授業で、雲月山の勉強をしていますよね。お二人は雲月山のどんなところが好きですか？

淀淵 私は雲月山に一度言ったらまた行きたくなる所です。雲月山は景色もよく、かわいらしい植物がたくさんあります。自然がたくさんあるので、とてもいやされます。島根県側に行くと、笹がたくさんあって、かくれんぼもでき、楽しいです。



上田 私が好きな植物はササユリです。雲月山は夏になるとササユリが咲き誇ります。そのササユリはとてもきれいでかわいらしく、見ていると嬉しくなります。ササユリはいろいろな色があって、何度見ても新しい発見があるので、見ても飽きません。

高橋（座長） はい、ありがとうございます。花もたくさんあるし、歩いていても楽しいと、子供さんにとっても非常に魅力的な所ですね。

山登りをされる方にとって、草原はどういう風な位置づけや魅力を感じるものでしょうか？

野島 2つ話したいと思います。ひとつは「登山の気持ち良さ」、もうひとつは「見晴らしの良さ」かなと思います。

一番目に、登山の気持ち良さですが、登山を始めたり、続けるという動機は人それぞれに違います。たとえば登山そのものを楽しむだとか、健康のためだとか、山頂の展望を楽しむ、花や植物、それから鳥をみるだとか、写真を撮る、それから日本百名山をめざすとか、色々あって人それぞれですが、多くの人が、山にしても草原にしても日常生活のストレス解消があるんじゃないかなあというのが、一番目です。また、登ること自体は苦しくて、何度もやめようかと思うこともありますが、山頂に到達した時の達成感とか、非常に難しいルートを達成した時の満足感とか達成感というのはまた格別にあります。そういう喜びを、個人ひとりではなくて、一緒に登った仲間と共有できるという、そういう楽しみがあって、登山しているというのではないかというのが一番目の「気持ち良さ」です。

二番目に、見晴らしの良さです。山頂とか、登山の途中での見晴らしの良さというのは、登山の大きな魅力です。あの山はどこか山かということを確認することを我々の中では「山座同定」と言いますが、見晴らしのいい所であれば、山の上から見た山並みだとか、下界の風景などを展望するという楽しさ、気持ち良さというのが素晴らしいものです。このまわりでも聖岳だとか、臥竜山でも、昔は展望が良かったんですけども、（聖岳は何年か前に刈りましたので、展望が戻っていますけれども）見晴らしや展望台近くの木が大きくなって、見晴らしが悪くなっているのは残念だと思います。

高橋（座長） ありがとうございます。気持ち良さ

と見晴らしの良さということでした。中越先生にお聞きしたいのですが、学術的な面からの草原の魅力・価値というのは何でしょうか。

中越 私は2つのことを申し上げたいんですが、一つは、森林に覆われている所にたくさん植物があるのではなく、実は草原の方に植物の種類が多いことは、よく知られていることなのですが、意外に伝わっていないんですね。また、今日もいくつかご報告があり、すでに阿蘇山では調査をされているようですが、手入れの悪い森林よりも、よく手入れされている草原の方が保水力が高い、すなわち水をためる力が強いということがわかっています。木があれば必ず水を吸ってくれるものだと思いますが、雨が降れば木に付きますので、それが蒸発して川の水源にならないんですね。そういう意味で、草地には木がないから水がないんだというわけではないので、このへんは環境に関わる大事な問題だと思います。

それともうひとつ、みなさんに聞いてみたいのは、マルコポーロという人をご存知の方、手を挙げてください、どれくらいおられるか・・・割と多いですね。小学生はどうなんでしょうか、知らない？マルコポーロって？じゃあ、そのヘロドトスって言ったらもっと知らないでしょうね。ヘロドトスを知っておられる方、どれくらいおられますか？ああ、あまりおられないですね。ヘロドトスは、今から2400年前に、ギリシア人で、「歴史」という本を書いたんですよ。ものすごく長い大きな本なんですけど、その中でご本人が、スキタイという人たちのことをお話しています。いっぱい書いています。結論をいうと「自分たちギリシア人は森林で暮らして高い文化を持っているのに対して、スキタイという草原で暮らしている人たちの文化レベルが低い」とギリシア人たちが一般に信じているけれど、まちがいだという風に書いてあるんです。草原には草原の暮らし方があって、草原の良さをよくよく知っている民族がいる、と。しかし、2400年前以来ずっとこのかた、穀物を作る人たちの方が人数が多いものですから、森林を壊して作るだけのたくさんの水や肥料だとかそういう資源が無くなってきた。穀物というのは、森林がある所は森林をとっばらって耕作地を作るわけですね。そういう2つの大きな世界の中の価値観の違いがあると思うんです。私たち日本人は森林の中に慣れてきていて、草原的な暮らしを知らないのです、本当は半分しか世界を知らないんです。半

分しかわかっていない。私も農耕民族の末裔、日本人ですから、どうしても森林が第1というふうに考えてしまうんだけど、この地球上では森林と同じぐらいの面積の草原があって、その草原で生まれた文化があるんですね。これは非常に大事にしていけないといけない。

このことがわからなかったら、日本の草原も分かってもらえないんじゃないかと思うんです。そのためにどうするかというと、一番大事なことは、生物多様性という切り口だけでは、草原というものはなかなか守っていけないというふうに思っています。いろいろみなさん語られるような草原が持っている魅力、それが価値があるんだという理解、これがまず第1義的に必要だと私は思っております。

高橋（座長） ありがとうございます。森林に劣らない、優れた生態をちゃんと理解するということが第1条件になってくるということですね。今、いろいろなお話をいただいて、いずれも草原が重要だと、保全していくべきだということが共通した認識だと思います。ただ、草原を保全していくというのはとても大変ですよ。おそらくそれが今一番の問題になっていると思います。

雲月山で生活している、ササユリのお二人にお聞きしたいと思うんですけども、魅力的な草原を残していくためには何が必要だと考えますか？

淀淵 春に山焼きをすることが草原にとって大切です。山焼きをしないと、草や木が大きくなり、草原がなくなってしまいます。草原がなくなり、大きな草や木ばかりになると小さな植物が日光にあたらなくなってしまいます。そうすると私たちササユリ等の植物は成長できないし、新しい芽も出てこられなくなります。実際、雲月山は昔山焼きをやめたことがあり、草や木が増えて、たくさん貴重な植物が絶滅危惧種と呼ばれるほど少なくなりました。またこれらの花の蜜を吸って生きている昆虫たちも、生活できなくなったりします。草原の植物や生き物を守るためには山焼きをしなければなりません。

高橋（座長） 雲月山の場合、山焼きをしなければいけないということですね。他の草地だと、刈り取りをしなきゃならなかったり、放牧をしなきゃならなかったりということになるのでしょうか、さっきもお話

があった様に、その管理をずっと続けていくのは本当に大変なことですよ。

ここで、会場から、いくつか質問票をいただいておりますので、その回答を兼ねて、コメントをいただきたいと思います。やっぱり、一番重要な問題は人手不足と農村の問題、地元の問題じゃないかという質問をいただいています。今の、子供さんたちからの提案も含めて、宮本さんの方から、人手不足、地元の問題について語っていただけませんかでしょうか。

宮本 はい、5年前までは雲月山は山焼きをやめておりました。一番の原因は地元です。昭和30年くらいまでは、土橋という地元の集落が20人くらいで大きな50ヘクタールある山を焼いていたんですが、高度成長時代に入り、草を焼くことを止めて、放牧もしないので、バイオマスも使われなくなってきて、そういった技術はもう無くなり、現状では人手がないともう焼けません。それで、今はボランティアを募って山焼きをやっているんですが、一番の問題は地元で担い手がないということです。この大きな問題は、農業が廃ってしまったから、農業で食べて行けなくなった、ということで、どこの中山間地も、日本全国すべてそうだと思います。

一番多い時期に日本の国土の一割以上草地だったわけですよ。これは今1%未満にまで減っています。今日の第3分科会でも様々な意見が出ましたが、今中越教授からも話があったように、草原の方が、森林よりも保水力がある、というのは、雲月山もそうなんですよ。日照りがずっと続いた時も、あそこの水は枯れません。なんでかな、と思っていたのですが、やはりそういったことが今日分かりました。これから担い手を育成するためには、やはり農業振興が一番だと思います。今日衆議院議員の初当選された橋本先生にもそのことを言いました。

「よく分かっています、自民党に負けないくらいに農業政策を出します」とのお話をいただきましたので、期待はしておるんですが、そんな中で、安全の確保がとくに大事なんです。今年大分の由布市の湯布院町、ここで4名の方が野焼きの最中に亡くなっておられます。今年、雲月山も山焼きをしたんですが、ちょっと飛び火もしました。役場の関係者の方が、「町の条例では乾燥注意報が出ているときには火を入れてはいけません。私はそのことだけを伝えて帰ります」といって、さっと帰られました。地域の人たちが集まっ

たときに、「今日どが一するかいの?」、各区長さんが集まって、「乾燥しとらんじゃあ、山は焼んで」と話し合いました。これは事実なんです。山焼きに適しているのは、雲月山について言わせていただければ、3月下旬から4月下旬ぐらいのこの1ヶ月間が一番適している時期なんです。じゃあ、雨が降らずに乾燥注意報が出てない日は何日間あるんかと言ったら、条件が適した日は4、5日しかないんですよ。今日は適しているから、今日焼きましょうというわけにはいかんんですよ。やはり日にちを決めて、ある程度乾燥注意報が出とつても焼かないといけない。これが実情で、今日もいろいろ阿蘇の山内さんにも聞きましたけれど、やはりそうなんですよ。一番燃えるときに燃やさんかったら、雨が降る日に灯油たいて燃やすんですか、となるんで、町も条例がありますが、緩和を考えていただかないといけません。町の職員の姿勢をふりきってやるということは、ちょっと考えられないことです。色々聞いてみますと、大田市は森林法21条を適用して、大きな山焼きには火入れ条例は適用しませんというやり方で焼いているそうです。こういったことも、考えていただかないとならないと思います。

今からはうちらの方も65歳以上のかたばかりなんで、火のやり方など、しっかりとボランティアも含めて、教育が必要だと思います。阿蘇の方では教育を受けたボランティアでないと火入れの作業に入れないと聞きました。こういったことも非常に大事になってくることだと思いますし、何よりも担い手ができる環境づくり、これは政治的な役割も大きいと思いますので、そこらへんが重要だと思います。

高橋（座長） ありがとうございます。担い手が重要だということです。さっきボランティアの話もあったのですが、将来の担い手を育成する一方で、近々に草原を管理しなきゃいけない担い手を作りたいということもあって、ボランティアは阿蘇の方だけでなく、全国の草原にずいぶん入るようになってきました。どうしてそんな大変な作業にボランティアが入ってくるのか、お聞かせ願いたいと思います。

野島 なぜそんなしんどい目をして、ボランティアをやるんかということですが、まず一番目には、山への恩返しがあるんじゃないかと思います。我々登山者のフィールドというのは山です。その山への恩返しとして、これまで清掃登山だとか、登山道整備とか、看板

がけとかしていますが、そのひとつとして山焼きをさせてもらっているというのが、一番目です。

二番目には地域への恩返しがあると思っています。我々の登る山というのは、国だとか県だとか入会とか個人の持ち物なんです。その山に、他人の山に登らせてもらっているの、登山口や下山口に車を置くということも含めて、地域の方々には大変お世話になっているわけです。その他、ここ北広島町では特に白川さんのような学芸員だとか、鳥とか植物の研究者の方々もおられますので、そういう方々にたいへんお世話になっております。その恩返しの意味もあります。地域の恩返しが二番目だと思っています。

それから、火入れの技術を知るといふ喜びがあります。この山焼きに来る前は、火というのは下からつけるものと思っていましたが、初めて来たときにびっくりしたのが、まず火道を作るために境界線、島根県との境界線を5mくらい午前中ずっと草刈をしました。それから火をつけるのも、下からつけるんじゃなくて、上から着けて、ゆっくりじわじわと燃え広がらせておいて、多少飛び火しても島根県の方に火の粉が飛んでいかないということの安全を確認した後、下から一気に燃やすと。そういう技術を知ったことは、大きな感動でしたし喜びだったと思います。

四番目に、先ほどもいいましたが、大勢で作業をする喜びがあります。登山もそうですけれど、仲間たちと一緒に、大勢で作業するという、力を合わせるという楽しさがあります。次に、作業を終えたときに達成感というか充実感があります。日常の生活とか、仕事の上で、達成感とか充実感を味わうということはなかなかありません。だけれども、登山とか山焼きだとか草刈とか、いわゆる作業でしたら、終えた時の達成感・充実感というのは格別にあります。

最後に、ちょっと表現は難しいかもしれませんが、火を身近に見る感動というのがあると思います。火を

見ると感動するというのは誰でも同じだと思うんですけども、日常の生活で火を身近で見るといふことはありません。けれど、山焼きの場合は安全を確保された上で、火を身近に見て、バチバチいう草とか、木が燃える音を聞いたりといふのは、大きな感動があります。

そのように、山焼きや草刈という草原を管理する魅力というのがあるので、私たちは毎年これまで参加してきましたし、これからも楽しみにして、参加していきます。

高橋（座長） ありがとうございます。

ボランティア作業はつらいんだけど、それが持つ魅力というのがあるんだ、ということなんです。雲月小学校のお二人も山焼き作業に参加されていますよね？どんな風なことを感じられますか？参加していて、山焼きそのもの、火を見てどのように感じます？楽しいですか？

淀淵 とっても怖いです。

高橋（座長） とても大事なことを話していただきました。とても怖いものですよ、その必死さと、怖い中でもみなさん一生懸命やられたり、安全管理に一生懸命になって、大変な大人たちを見てかっこいいと思うでしょう？

淀淵 はい。

高橋（座長） おじいちゃん、かっこいいよね。

淀淵 はい。

高橋（座長） おとうちゃん、かっこいいよね。

淀淵 はい。

高橋（座長） きっとこの子たちはまた大人になったら、戻って来てくれると思うんですが、その辺ちょっと聞きたいんですが、山焼きは大切だということですね。淀淵さんはおっしゃったんだけど、大人になったら山焼き手伝いますか？お二人どうですか？

淀淵 はい、でも山を焼くことは怖いです。今年は特



にもものすごく大きな火がついたので、下から見ていてもとても怖かったです。だからその時には、男子に火をつけてもらいます。実際にクラスの男子は、中学生、高校生になっても山焼きに参加して、地域の人の手伝いをしながら山焼きのやり方を見て、大人になったら山焼きを指揮する人になりたいと言っています。

高橋（座長） ありがとうございます。貴重な決意表明をいただきまして、これで終わりにしてもいいかなと思っては見るんですけど、そういうわけにはいかないみたいなんで……

今、直接山焼きに関わるというお話をしたんですが、直接作業に関わらなくても、都市の住民や国民が、草原の保全に寄与することが出来るんじゃないかなと思います。その辺り、中越先生いかがですか？

中越 いろんな地域で、水源涵養のための税金とか、広島県で言うと森林環境税というような税金を、県税でとっているんですが、これの使い道が、今のところ森林の整備だけになっているんです。将来的にはそういった環境整備のためにそういう配分があってもいいんじゃないかなという風に思っています。特に保水力なんていう問題が先ほどもありました。もう少し詳しく言わなきゃいけないのは、手入れの悪い森林よりは、草原の方がいいということであって、森林そのものに保水力がないという意味ではありません。そうなりますと、人手をどこから持ってくるかということなんです。

例えば、私なんかは非常に簡単に、「授業の単位にするから山焼きに来い」って言えば、それでたくさん来るんですが、それは少し乱暴かなという風に思っています。実際に広島大学の学生さんは、山焼きではなくて、下草刈りとかそういった山林の整備には参加してくれてまして、東広島市、もう少し狭くいえば、旧西条町の中で大学生が活躍してくれています。あるいは西条農業高校という高校の学生さんがきて、ちゃんと社会人と一緒に森林の整備をしてくれていることもあります。報酬もなしです。単位も、これはよくまちがって伝えられるので言っておきますが、来れば単位を出すのではなくて、最後に試験をして、参加した意義がちゃんとわかってないと、落第は落第なんですね。それは申し上げておきます。

何度も申し上げますけれど、草原の持っている文化というものに対して、もっと敬意を払わなければなら

ないと思うんです。日本は明治以降、森林国だった国からの文化を強く受けていて、草原を主体とした国からの影響をあまり受けていません。そこは非常に問題があると思います。定住生活ももちろんいいんでしょうけど、そういう定住生活をしながら、なおかつ草原という開放的な場所が、国内に身近にあるということに、もう少し恩恵を感じなきゃいけないんじゃないかと思います。色々計算はできます。経済的効果とか、いろんなことが出来るだろうと思うんですが、まずは好きになっていただかなきゃいけない。私がよく申し上げることは、蚊がいないよ、とか、クモの巣がはっていませんよか、顔にあたるものがあまりないのでいいんじゃないですかと、爽快でいいでしょうと。まず山に行きましょう、草っばらにいきましょうと、こういうことは第1番目に申し上げて言う所です。それが肯定的に理解されれば、いろいろまくまわるんじゃないかと思うんですけれど。

高橋（座長） ありがとうございます。山焼きを直接手伝えることだけではなくて、いろんな支援の仕方があるんじゃないか、ということです。例えば草原からの産物を高く買う、ということもありますし、今、「環境支払い」というのがひとつのキーワードとなっています。ヨーロッパでは環境を保全する、あるいは地域振興に役立つような農業の形態そのものに対してお金を税金で払うという仕組みがあるんですね。そういうものは、草原側からもアピールしていいんじゃないかなという気がします。

ここでせっかくでするので、フロアの方とキャッチボールをしたいと思うんですが、実はいろんな質問をいただいています。これに全部お答えすると、3時間ぐらいシンポジウムをしなくちゃいけなくなるので、この質問に沿って進めたいと思います。盗掘の問題というのが出ているんですが、色々な罰則規定等も含めて、保全条例の話がこの北広島町で出ているそうなんですが。

中越 北広島町で、現在大事な生物を保護するための条例を作っています。条例って言うのは悪いことをすれば罰則があるわけで、罰金なども盛り込んだ条例をつくっておられる状況にあります。

国立公園や特別天然記念物等にも罰則がありますが、私一つだけ、どうしても気になることがあります。どなたが立てられるのか、所有者が立てられるのだと

思うのですが、「花をとらないでくれ」とか「盗掘をするな」と書いてあるんですけども、「美しい景観を守っていただいてありがとう」とか、あるいは「花を咲かせていただいてありがとう」という看板にして欲しいんですよ。考え方として「するな」じゃなくて、させないようにすること。これはすごく大事だと思います。また、広島市の植物公園では、身元がわかっているランの場合には、元の場所に戻すことを始めました。取って来たものを場所さえ分かれば、もとに戻すと免罪にする、ということをやっています。一度やった悪いことをリカバリーできないんじゃないかと、返すということもしてもらえないようにしています。今の首相さんのいう友愛の精神をもっともっと広げていただきたいですね。代議士さんもおられるみたいなので、自然にもぜひそういう発想で、対応していただくと嬉しいなと思っています。

高橋（座長） ありがとうございます。

その他に、例えば阿蘇では牧野組合が主体にやられたり、ここでも地区の方が主体に山焼きをやったりしているんですが、「自治体が火入れをやっているところはないですか」という質問なんですが、どなたか発言される方いらっしゃいますか？

会場 大分県の九重町でございます。野焼きに行政として直接は参加はしておりませんが、野焼きを推進しております。野焼きに一番大事なものは、防火帯をつくるということが大変な作業なんですね。この防火帯が出来れば、ボランティアの皆さん方に参加をしていただいて、野焼きもやりやすいんですけども、その防火帯を作るのに、町の方が、10メートル幅、1メートル切ったときに40円、補助をしております。これは10アールを8000円で切る、という計算でございます。その二分の一は地元関係者で負担をなさ



よ、町の方は2分の1はだしてあげるよ、ということです。私どもの防火帯補助は、31キロでございます。面積といたしましては、10メートル幅切らなきゃいけませんから、31ヘクタールの防火帯を設置して野焼きをしておいているという状況です。行政との関わりということでしたけれど、そういった面での行政の支援は必要じゃなからうかと思えます。

条例の不備も指摘をされておりますけれども、大分県では関係町村で、この10月に、条例どうするか、という関係者会議が予定されています。乾燥注意報が出るくらいじゃないと焼けないということははっきりしておりますから、緩和をする方向です。

高橋（座長） ありがとうございます。すごい決断をされて、素晴らしいですね。皆さんが共有して大事だというベースがあるからだと思うんですね。先ほど中越先生もおっしゃったように、それを基礎にしないといけないだろうなと思えます。

実際の安全対策等で、工夫をされている所、例えばジェットシューターを行政側なり、あるいは実施主体等で助成されているところがありますか？

会場 大分県の九重町、高橋でございます。私どもは実行委員会で野焼きをやっております。飯田高原実行委員会、それから坊ガツル野焼き実行委員会で組織をつくっておるので、組織でジェットシューターを買っております。今年はアサヒビールさんに補助金をいただきましたので買えました。坊ガツルについては、九州電力さんが50台ジェットシューターを買ってくれています。私どもの飯田高原野焼き実行委員会でも、会で持っているジェットシューターが40台をもう超えました。昔ははたきを持っていてたいて消していたんですが、それからすると、1台のジェットシューターが10人以上の仕事ができるから、非常に助かっております。これはもっと実行委員会として買って、充実していこうと思っています。

ついでですが、町の認可のことでお話しします。お隣の湯布院町で4の方が亡くなられたのですが、亡くなられて事故があったら行政としては責任を問われます。だから、異常乾燥注意報が出たら、坊ガツルの時には、竹田市から、ダメだ、許可しないとされました。春先の一番いい時期ですから、乾燥注意報は絶対に出ているんです。乾燥注意報が出ていないような日は雨で濡れていてできないということです。

ね。ですから、そんなことを言うんならどうして事故が起きたのか考えてくださいというのを僕は言ったのです。70歳代80歳代のおじいさん、おばあさんが出てこないで野焼きが出来ないような状況になっているんです。僕たちは実行委員会を作って、若い人にお願いをしてボランティアを集めて、実際やっているんですが、行政もそんなことを言うくらいなら、行政の職員が自発的にボランティアで加勢をして、「じいちゃんばあちゃんができないから加勢しましょう」というぐらいの話をしてくださいといったんです。そこらへんも含めて今年、副町長がいうように緩和するということを考えていただけそうです。

高橋（座長） ありがとうございます。実行委員会みたいな形で、行政はあなたはお金出す人、なんとかするひと、私が働く人、みたいな「すみ分け」ではなくて、一緒にやるっていうのも一つの方法かもしれませんね。

ところで、実行委員会で買われたジェットシューターを雲月山に貸していただける、とかいうことはできないんですか？できますか！それはいい事をお聞きしました。そういうことは、必要があればぜひ市町村長さんの方で折衝していただくなり、いろんな形で、実現されたらいいんじゃないかと思います。

他にもいくつか出ておっています。草原を再生して行く中で、お金を実際に産み出してないか、経済活動として自立していないかという質問があります。今阿蘇の方では、草をビジネス化するために、様々な機会をとらえてがんばっているんです。今日は紙漉きを実践していただいた九州バイオマスフォーラムさんなんかは、草の流通センター構想みたいなものを作っているってあって、ありあまる草を、何らかの形でお金にしていこうという仕組み作りをしかけたりしております。今後はそういう経済活動とリンクされ、経済活動を産み出すような形の保全再生が非常に重要になるのかな、という気がいたします。どうぞ皆さん考えてみてください。

他に、あとひとりくらいは質問ができると思うんですが、いかがでしょうか。

会場 質問というよりは先ほどの山焼きに対する補助の関係です。私山口県から参りまして、秋吉台について、少しご報告をさせていただきます。秋吉台は国定公園でもあって、国の天然記念物もあるということで、

美祢市が山焼きの実行委員会を設けております。山焼き対策協議会という形になってはいますけれど、一度に1,200～1,300ヘクタールくらいを焼きます。約1,500ヘクということになっておりますけれど、実質的には大分小さくなっていると思います。そのためにお金が600万くらい必要で、県も200万くらい支援をしております。基本的にはそのお金をもとに地元で自治会の方を中心に1000人以上のボランティアがでられて、火道を切って、2月の第3日曜日に焼くという形になっております。さきほどありました、安全対策という点では警察であるとか、消防署であるとか、そのあたりのところもきちっとやっています。秋吉台ではいままですと何百年も山焼きが続いておりますけれど、事故等の発生はないというふうになっております。観光ということで、地元にもお金が落ちるということで、草原を焼くことに関してして、お金を出しているという形となっております。一応ご報告をさせていただきました。

高橋（座長） ありがとうございます。事故がないということはとても大切なことです。あつたらもう終わりですから、そういう意味でも十分な配慮が必要かなと思います。

時間が来てしまったので、最後なんです。みなさんをお願いします。今後草原を残して行く上で、自分たちに何が出来るだろう。行政にあれをやってくれとか、消費者にあれをやってくれという前に、自分たちで何か出来るだろうか、というところでお話していただければと思います。はじめに雲月小学校のお二人にうかがいたいと思います。よろしくおねがいします。

淀淵 これからも、もっともっと雲月山のことを、山焼きのことを勉強して雲月山のすばらしさを全国の人たちに広めて行きたいです。そしてたくさんの人たち



に山焼きに参加してもらって、貴重な植物を守っていききたいです。

上田 草原を残すために、私たちにできることは、草原のことをみんなに知ってもらうことだと思います。これまでも雲月山に看板を立てたり、いろんなところでオペレッタを演じたりしてきました。山焼きのときには勉強したことを発表しています。今年はみんなで雲月山の写真集も作っています。

高橋（座長） ありがとうございます。続きまして、第2分科会の野島さん。

野島 大切なこととして、3つほどあげます。ひとつはボランティアとして参加することが大切だと思います。人間として、自分の生き甲斐とか、何か世の中に役立つということがあります。雲月山の山焼きは、いつも白川さんが言われるように、参加費だとか、交通費なんかを自分で持って無償のボランティアに参加と、よくやってくれると言ってもらっていますが、やっぱり自分にとって世の中、人のためにたつこと。これは大切だと思います。

二番目に山の楽しさを伝えるということです。自分自身が楽しむということはもちろんですが、そういうことを楽しいということを身近な人だとか、山岳連盟のいろんな活動とか、いろんな講座も含めて、いろんな活動のときに伝えて行きたいと思います。対象者の方はいまはまだ中高年の方が多のですが、これからもっと若い方、小中学生も含めて、若い人たちに伝えて行きたいと思います。

最後に、登山者の山のマナーを啓発して行きたいと思います。登山者の中には、先ほど盗掘とかもありましたが、たまにマナー違反をしておる人もおると思います。その中には自分が悪いことをしているという自覚がない人もいますかと思しますので、これからいろんな機会を通じて、山のマナーを守ると、そういう必要性を通して、説明して、啓発して行きたいと思っています。

高橋（座長） ありがとうございます。それでは第3分科会の宮本さん、お願いします。

宮本 雲月山を含めて、野焼きをしているところはたいてい環境保全型と思うんです。隣の安芸太田町の

深入山は、これはイベントでやっておられます。美祢の秋吉台もこれは観光も含めて両方やっているんだと思うんです。これから何が一番大事かなあと思ったときに、先ほど農業の話もさせていただいたんですが、千町原の草を刈ったのを堆肥として使っている流れもあります。すごくいいことだと思います。みなさん、日本という国は農業に向いている国だと思いますか？そう思う人はちょっと手を挙げてみてください。ああ、うれしいですね。このあいだ言ったときにひとつも手が挙がらなかった所があるんですよ。おっしゃる通り、カナダやオーストラリアのように広大な面積はないです。しかしながら、四季を通じてまんべんなく雨が降る、高い所には雪が積もったりして、それが春の雪解け水になって、連作可能な大地をもっている日本という国は、本当に農業に適していた国なんです。そういった中で食を考えると、千町原の草を堆肥にして坂井さんが作った大根とか、お米、こういうものを地域の小学校とかに食べさせていただくような食育とか、そういったものにやれば、本当に素晴らしい流れができるんじゃないかと思うんです。「今日のお米は千町原の堆肥で作った坂井さんとお米だよ」「田村さん所のほうれん草よ、千町原の堆肥で作ったほうれん草でとってもおいしいよ」というのが週に何日かあり、子供も興味を持っていく、といった流れが全国各地で広がっていれば日本の農業、食というのはもっともっと見直して、40%の食料自給率もそのうち50%、60%と上がっていく。そういった流れができる。それを草原をもってひとつの流れを産むんじゃないかと私は思っております。

高橋（座長） ありがとうございます。非常に元気のでるコメントをいただき、ありがとうございました。最後に中越先生、コメントしていただけますか。

中越 広島大学の教員とかあるいは県の畜産技術センターの研究員であるとか、そういう研究を専門にしている人間の立場からは、草地を対象にした、あるいは二次草原を対象にした研究を、もっと深めていかなければならないですね。その成果を、はっきり言うと国際的に評価されるもの上げていけば、きっと理解が得られると思います。国会なんかで証人喚問を受けて25%にどれだけ貢献するんだというところで、きちっと話ができる、そういう研究を、私たちはして行かなければならないんだろうと思っています。研究者とい

うと、こそこそとみんなの知らない所でなんかやっているという感じをお持ちの方が多と思うんですけど、前向きな研究者もたくさんおりますので、どうぞ、よろしくご支援のほどをお願いします。

高橋（座長） ありがとうございます。

非常に多岐に渡る内容についての論議が行われて、時間がなくて本当に残念なんですけど、これはまた次のサミットに持ち越していただいて、ぜひひとつひとつ解決していけたらと思います。これをもとに、市民宣言を採択したいと思うんですけど、最後に、みなさん今日は長い時間ありがとうございました。子供さんたち大変だったと思うんですが、雲月のように直接環境保全や草原の保全に関わっている子供たちがいて、その子供たちを育てていただいたご両親やご家族の方たちがいらっちゃって、それを指導している先生方がいらっちゃって、それを受け入れている地元の宮本さんのような方がいらっちゃって、その方達は安全なものすごく気をつけていらして、非常に辛い思いもされています。一方で、なんとか貢献したいということで、ボランティアという形で入っていただいて、地元や子供さんたちに、いい影響・循環を与えている。それを科学的に裏付けしたり、指導するのに研究者がちゃんと入っていくという、こんなすごいシステムっていうのはなかなかないですよ。草原ならではの魅力じゃないかと思います。すごい世界じゃないかと思います。最後になりますけれど、今日御登壇して発表していただいた、パネラーのみなさん、そして今日それに関わっていただいたあるいは育てていただいたみなさんご自身に拍手をぜひおねがいしたいと思います。よろしくおねがいします。

--- 会場拍手 ---

高橋（座長） ありがとうございます。それではス

クリーンの方をご覧ください。今日の内容をふまえて市民宣言を採択したいと思います。老眼で字が見えないので、間違ってもれませんが、読み上げさせていただきます。ご賛同される方は後で拍手をお願いします。（-- 宣言案読む、会場拍手 --）

ありがとうございました。ご賛同いただきまして、本当にありがとうございます。賛同をいただいたので、この市民宣言を採択致します。

それでは、署名を致したいと思いますので、各分科会座長のみなさん、よろしくおねがいします。

-- 各分科会座長による署名 --

高橋（座長） 今、北広島宣言が署名されました。この紙は、今日デモをやっていました、ススキで作った紙です。今日みなさんに署名をしていただきました。もう一度ご披露させていただきます。それではみなさんで握手しましょうか。

-- 座長、パネラーが握手 --

高橋（座長） ありがとうございます。

拙い司会で本当に申し訳なかったのですが、全体討論会、これで終わりにしたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。



全国草原シンポジウム 北広島宣言

草原は、いつも私たちのそばにありました。春に火を放ち、夏に風を感じ、秋にススキと戯れ、再生の季節を待ちながら冬を過ごす。当たり前のように繰り返される営みの中で、私たちは草原に働きかけ、草原から恵みを受けてきました。牛馬の放牧や、刈草を得るための草刈りは、草原の恵みを得るための行為であると同時に、草原を育むための大切な作業でした。いつもそばにあったはずの草原が、今、消え行こうとしています。社会の変化は草原を不要なものにしてしまい、人の営みが消えるのに従い、生態系の営みもまた消えようとしています。

自然と向き合った時、私たちはとても小さな存在です。疲弊した農村、自然とのつながりを持ちにくい都市生活、高い志へと向かう長い研究の道のりの中で、目前の草原が抱える課題の大きさに押しつぶされそうになります。そんな時、手がかりは、かつての農村の暮らしの中にありました。一人ひとりができることを考え、役割を分担する協同の形こそ、非力な私たちが難問を解決する唯一の方法です。今ならまだ間に合います。地域特有の地形や気候に即した「火入れの技術」、ボランティアの力、草原に新たな価値を与える研究者の視点が集まり、新しい協同体が生まれつつあります。

草原に携わる私たちは、それぞれができることを考え、実践します。ボランティアとして体を動かします。研究者としてモニタリングを続けます。草原の豊かさを伝えるために、地域の担い手として草原を保全しながら、活用の道を探ります。子どもにもできることはあります。地域に育まれた文化と技術を学び、それを伝えていきます。そして、いつの日か、地域を担う一人になれるよう、ふる里を大切にします。私たちは草原に集う多様な人々の存在、多様な価値観、多様な生物の生活を、認め、尊重し、共存します。草原が持つ多様性と、そこから産まれる恩恵を将来にわたって受け継いでいくために、対話を続け、共に行動することを宣言します。

平成 21 年 9 月 27 日

第 8 回 全国草原シンポジウム 座長
全国草原再生ネットワーク 会長

高橋 佳孝

分科会「全国子ども草原サミット」座長
雲月小学校 児童会長

淀淵 可菜

分科会「草原と暮らす、私たちの未来」座長
雲月山活性化協議会 事務局長

宮本 裕之

分科会「西中国山地の魅力ー登山と草原ー」座長
広島県山岳連盟 副会長・普及部長
日本山岳会広島支部 自然環境委員会 副委員長

野島 信隆

分科会「草原の持続可能な利用と生物多様性」座長
広島大学大学院 国際協力研究科 教授

中越 信和

第8回全国草原サミット

議長：竹下正彦（北広島町長）

参加者：竹内敏朗（鳥取県江府町長）・竹腰創一（島根県大田市長）・小坂眞治（広島県安芸太田町長）・
永尾宗忠（大分県九重町副町長）・河津修司（阿蘇市町村会長、熊本県南小国町長）

竹下正彦（広島県北広島町長，議長） 改めまして、おはようございます。北広島町長の竹下でございます。このたび全国草原サミットという非常に重要な意味を持つこの意義の深いサミット・シンポジウムをこの北広島町で開催をさせていただきまして、このサミットに大変お忙しいところを駆けつけていただきました市長さん町長さん、ほんとにお忙しいところ今日はありがとうございます。

最初に、第8回全国草原サミット開催の趣旨について、わたくしの方から説明させていただきます。

草原は火入れ・放牧・採草など人の営みによって育まれ、日本各地にふるさとの原風景とよべるすばらしい景観を作り出しました。かつては農村の生活を支える資源の確保の場でもあった草原は高度経済成長とともに利用されなくなり数百年以上かけた農村文化の象徴ともいえる草原が今失われようとしています。一方で観光、農村の文化、あるいは環境教育など、様々な観点からたくさんのひとたちが草原に関わりを持つようになってきました。特に生物多様性あるいは地球温暖化抑止など地球環境保全の観点からも草原の持つ役割はいっそう重要になってきております。世界的な視野から価値が見直されているのに反して草原を支えている地域は疲弊しつつあります。過疎化高齢化が進み安全に火入れを継続することが困難になってきております。草原が抱える課題はすなわち農村社会にかせられた課題であり、行政としても対策を講じる責務があります。

今回は草原を持つ12市町村の代表として、各地から5名の市長さん町長さんにお集まりをいただきました。草原を保全し地域を持続的に発展させたために草原の資源の活用対策、また適切な管理のシステムの構築について議論をしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、まずご出席の市長さん町長さんの方から、それぞれ自己紹介をお願いいたします。

竹内敏朗（鳥取県江府町長） みなさん、おはようございます。

鳥取県西部国立公園大山の裾野でございます。江府町から来ました竹内敏朗でございます。県境を挟んで蒜山地方と県境でつながっている町でございます。どうかよろしく願い申し上げます。

竹腰創一（島根県大田市長） みなさん、おはようございます。

島根県は大田市から参りました大田市長の竹腰創一でございます。どうぞ、よろしく願いいたします。わたくしどもの町は、東西に230kmと非常に長い島根県の、ほぼ中央に位置しております。日本海に面した人口約4万人の町でございます。その町から今日は野を越え山を越えて、やってまいりました。どうぞよろしく願いします。

小坂眞治（広島県安芸太田町長） おはようございます。私は同じ広島県の、当地北広島町に隣接しております安芸太田町から参りました。役場からここまでが20分弱くらいの距離でございます。隣の町でございます。また一緒にPRしていきたいと思っております。よろしく願いします。申し遅れました、小坂眞治でございます。

永尾宗忠（大分県九重町副町長） おはようございま



す。九州は大分県、九重町から来ました。町長が出席出来ませんので、副町長の永尾でございますけども、よろしく願いいたします。

河津修司（阿蘇市町村会長，熊本県南小国町長） おはようございます。その九重町の隣であります。熊本県阿蘇地域の市町村会の代表をしております南小国町長の河津でございます。どうぞ、よろしく願いいたします。

竹下（議長） ありがとうございます。それでは最初に、これまでのサミット開催の状況につきまして、概観していきたいと思っております。全国草原再生ネットワーク理事の高橋泰子さん、よろしく願いします。

高橋泰子（全国草原再生ネットワーク理事） 今日は、市民ネットワークの代表という形で、過去の状況をみなさんにお話しさせていただきたいと思っております。先ほど、ご紹介にあずかりました高橋泰子と申します。うちの市長も参っております。島根県大田から参りました。よろしく願いいたします。

まず、全国草原再生ネットワークについて、お話しなくてはならないと思っております。草原というのは日本の中でなかなかみなさんに理解されていない、ましてそこに住んでいる方々が理解していないということで、大変な認識不足のところでありまして。その草原に魅せられた人たちが、それから市町村が、過去に1回から7回まで、そして今日は8回でございますけども、草原シンポジウム・サミットを行って参りました。そこで解決した問題もあり、それから解決できない問題もあります。その輪を広げて、実社会で問題を共有して解決していく方策をどんどん作っていかなくちゃいけ



ないんじゃないか、ということで過去のシンポジウム・サミット開催地の実行委員長それに関わった個人団体が、2007年に全国草原再生ネットワークを作りました。私たちの目的はこの8回だけに終わらせず、将来もこれを続けていって、草原への理解を国民に知らしめることを目的にしております。

それでは前置きが長くなりましたが過去の開催状況です。

1回目は九州の久住町で1995年に行われました。このときは野焼きに特化して「野焼きボランティア参加の可能性と未来」というテーマで話し合われました。日本の中で草原をテーマに話し合う舞台を作り上げた、という点では、非常に感謝しております。

次に第2回目でございます。1997年島根県大田市で開催されました。そのとき私が実行委員長をいたしまして、行政の方々と協同の形を創ることができました。大田市の行政マンには大変に感謝しております。このときの副題が「草原の意義と生業による維持・保全・管理」というテーマです。

次に第3回北海道、網走の近くにある小清水町というところで開催されました。

ここには原生花園、花畑がありましてSLからこぼれ出た火の粉によって草原に火が付いて、そこで競合植物が無くなって花畑が形成されていまして。それは住民のみなさんには全然認識されてなく、SLが無くなってから、野焼きがそういった形で花畑を守ってくれたということで、野焼きを民間で始めたということです。ここでは「草の言い分、人の言い分」というテーマで話されました。

第4回は2001年の山口県秋吉台があります。秋芳町での開催です。山焼きに合わせての開催でしたが、ボランティアの参加とそれからそれを見守る観光客が多いことにびっくりさせられました。ここでの言葉で記憶に残っていることは、秋吉台では「野焼き」と言わないで「山焼き」というふうに言っているんです。「自分たちは「野焼き」ではなくて先祖代々「山焼き」と呼んできたことに誇りをもってきている」というこの言葉は、美東町長が言われた言葉で強く印象に残っております。テーマは「今、草原に必要なこと」ということでした。

第5回は2002年、熊本県の阿蘇郡での開催でした。昨日のシンポジウムでは阿蘇の草原は1万年かかって作り上げているというお話でしたけど、1万年ではゴロが悪いので千年の草原というふうにお話をされて

いるそうです。千年掛けて人々が作り上げた阿蘇の草原を「これからの千年先に向けて、今できることはなんだろうか」、そういうテーマで話し合われました。草原をベースに生活が成り立っている、と言っても過言ではない、阿蘇での市長さんたちの熱のこもったサミットというのが思い出です。

第6回は2003年長野県諏訪市、霧ヶ峰での開催です。草原を歩き回ったこと、それからススキの丈が非常に低かったことが印象です。また大田市ではレンゲツツジが市の花として大事にされているんですが、霧ヶ峰はレンゲツツジがやっかいもの扱いにされていた事が印象的でした。車観光の問題が取りざたされていたと記憶しております。ここでは「心に残る草原を未来へ」というテーマでした。

第7回は2005年大山があります鳥取県江府町、今日いらっしゃってますね。岡山県の真庭市を舞台に開催されました。草原や牧野の魅力を活かしたエコツーリズムを視野に入れて、「草原牧野から、大山蒜山山麓の景観と環境保全を考える」というテーマの話し合いを行いました。折に触れて紹介されたビューポイントの景観が今でも目に焼き付いております。

そして本日の第8回全国草原サミット・シンポジウムへとつながっております。本日の有意義なサミットを期待いたします。

竹下（議長） 高橋泰子さん、ありがとうございます。続きまして、昨日開催をされました全国草原シンポジウム、この議論を報告をしていただきますとともに、このサミットへの問題提起をしていただきたいと思います。シンポジウムの全体討論会で座長を務められました高橋佳孝さん、よろしくお願ひします。

高橋佳孝（全国草原再生ネットワーク会長、第8回全国草原シンポジウム座長） 昨日のシンポジウムで座長をいたしました高橋と申します。よろしくお願ひいたします。昨日、第8回全国草原シンポジウム、市民によるシンポジウムが開催されました。その概要をお話する前に、なぜ草原を活かす必要があるかというような簡単なご紹介をさせていただきたいと思います。

みなさんご存じのように草原利用というのは少なくなってきました。以前は、たとえば牛のエサであるとか、敷きわらに使ったりとか、堆肥源としてなど非常に重要でした。それから、屋根の葺き替え材とし

て、そして薬草を採ったりと、「生活に必要な資源を採る場」としてどうしても必要だった訳ですね。そのために全国至る所に草原があり、明治時代には国土の13%が草原景観だったというふうに言われます。農地をうわまるような面積の草原が全国各地に広がっていたわけです。ところが近代化あるいは燃料革命等によって、これらの資材を代替するものが作られるようになったきた。特に石油によって作られるようになってきました。そういうことから、草原を使う必要性が薄れてきたわけですね。そのために放置されたり、樹を植えられたりして草原が無くなった。これはみなさんご存じのとおりです。

ところが、昨日のシンポジウムの中で、草原の資源価値は今でも非常に高いんだというテーマのお話もありました。先ほどお話したような様々な資源としての価値もある、その一方で、新しい草原の価値というのが、今たくさん出てきているんだと。たとえば、生物多様性の保全に貢献しているとか、二酸化炭素の吸収に役立っているとか、あるいは気持ちの良い風景、あるいはそういうレクリエーションの場を提供している癒しの場となっているなどです。この意味では、以前よりたくさんの恵みの場を国民は草原に求めている、草原に対して期待していると、そういう状況にあるというふうに思われます。

それでは、昨日のシンポジウムの概要をお話したいと思います。シンポジウムの中では、実際に草原の保全等に関わっている地域の人たちや、それからその地域の担い手として重要である子どもさんたち、それから草原を使っている立場から登山愛好家のひとたちが、それぞれのテーマに従って分科会を行って討論をしました。分科会は4つに分かれておまして、このうちの3つ、「子ども」「地域住民」「登山者」の他



に、サテライト分科会として広島大学の方で「草原セミナー」というのを開催しました。広島大学の方では草原の保全や活用に対して、研究者側からの何ができるか、これから何をしなくてはいけないかという論議をしていただきました。各分科会の座長が、昨日、パネラーとして登壇してパネルディスカッションをしたという経緯です。

各分科会の内容をかいつまんでご紹介したいと思います。

第一分科会は子どもサミットということで、子どもさん達が、自分たちがやっている草原保全活動、あるいはそれをもとにした環境学習を、それぞれ子どもさんたちだけで披露していただく、大人は口をささむ余地はないという、すべて子どもが仕切って子どもで会議をしたという非常におもしろい内容でした。本郷小学校では「子どもガイド」ということで、草原も含めて秋吉台全般について、子どもさんがガイド役を実践しているというおもしろい発表がございました。それから大田市立志学小学校では、三瓶山に生息する非常に珍しいチョウ、ウスイロヒョウモンモドキの保全活動の内容を発表していただきました。地元の北広島町立雲月小学校には雲月山の山焼きや保全をテーマにした学習の集大成として、オペレッタを作って、自分たちで上演して、それをみなさんに披露していただきました。

この第一分科会で子どもさんたちが自分たちで考えている論議した要点というのは、ここに掲げられているような4点にまとめられるものだと思います。1点目は、いろんなところで子どもさんたちが草原に関する環境学習をしていることから、いろんなところに草原があって、みなさんが頑張ってるんだなということがわかったということ。2点目に、それぞれ人の利用によってそれは成り立っているし、その土地の立地条件によってやっぱり保全の仕方やテーマというのは違うんだな、と実感していきました。3点目に、それぞれの草原で目的とするもの、あるいは草原学習の発表手段が学校によって違うんだなと自覚していただいて、いろんな保全のしかたがあるんだな、学習の仕方があるんだな、と学びました。最後に、これらをまとめて、それぞれお互いこれからも交流できたらいいね、そうすることでまた自分たちの活動や学習に非常に参考になるんだね、というのを自覚したということです。子どもなりに非常にたくさんのことを学んだ分科会であった、という風に思っております。

次の第二分科会では、登山者の方たち、すなわち実際に草原を利用している人たちが草原に対して今後どうやっていこうかというお話をしました。80名もの方が議論に参加して、熱く語っていただきました。具体的に要点をまとめると、昔に比べて里山的な環境の喪失というのが中国山地で起こっている、草原を含めた里への回帰という新しい登山のスタイルとして、今後伸びていくんじゃないかということが指摘されました。それから、自然を学んで伝え行動するという具体的なアクションを起こすことが登山者としてもこれから大切と考えてますし、そのための整備を自分たちでもできることを進めていきたいという決意の表明がありました。また、自分たちでできないこと、あるいはしてほしいことを、地権者や環境行政の方といろいろ話をする事によって、よりよい協調関係、協同関係を築いて行きたいという宣言をされました。

はい、それでは第三分科会です。第三分科会は実際に草原を管理している地元の人たちの声を中心に、私たちが今後どうやって草原とつきあっていくかということテーマに開催をしました。分科会の要点ですけども、まず第一に、草原っていうのは価値があるんだよ、と、もう一度認識して国民に広く訴える必要があるんじゃないか、知らないという世界ではなく、知らしめるということは非常に重要ではないかというお話がありました。それから実際に火入れを行う地域は、いわゆる過疎の農村の問題点をすべて抱えているような地域です。ですから草原を保全するということは、「農村地域をどうやって今後再生して活性化するか」ということとまったく同じだということが話されました。

また、不幸にも本年、野焼きによる事故が起きたということもあって、実際に安全面を確保することが確



認されました。火入れを行おうとした時、様々な障害や問題を今でも抱えているんだ、そのことから、今後火入れをしたいんだけど、どうやってそれを持続性を確保するか、ということが非常に重要な問題だという提議がありました。最近では草原維持のための山焼きや野焼きにボランティアの方がたくさん参加するようになってきたわけですが、やはり一番懸念するのは安全性です。地元がボランティアを受け入れようとしたとき、事故があるというのは一番怖いことです。その責任を誰が取るかという重い課題を常に抱えながら、それでも地域の資源、あるいは地域の財産をですね守っていこうという意志のもとに今一生懸命やっている状況です。火入れを続けていくためには、今後自分たちができない所はぜひ行政のご助力やご提言をいただきながら、一緒になって協力して連携して進めて行きたいという決意表明がございました。

第四分科会、サテライト分科会は、広島大学の実際の学者さん、研究者の方が集まりました。この中では研究者の立場として、生物多様性を守るという国家的な使命の中で、草原は非常に重要な生態系であり、これが無くなるということは日本の生物のかなりの部分がなくなるんだというお話がございました。それから、いろいろな形で保全の取り組みがなされているんですけども、まだまだ今の草原を守ろうとしたときに技術的な面が十分ではありません。保全と同時に、草の利用についてももっともって技術的な観点から行っていく必要があるし、そういう動きも研究の中では出ています。研究者として研究業績なり、その成果をどういう形で現場にフィードバックしていくか、そういう管理手法のガイドラインのようなものをつくっていかねばいけないんじゃないか、とご提言いただきました。

以上をふまえて、シンポジウムの中で出てきたものを、キーワードとしていくつかまとめてみました。

ひとつ目は「固有性（アイデンティティ）」です。たとえば北広島雲月山にはあっても他の地域には無い、地域固有性というのがあります。それは草原の生き物や自然環境も違うんですけど、そこにずっと育まれた文化も違うわけです。そういういわゆる歴史を背負うということ、非常に重要なことだと考えているんです。このことは子どもサミットのテーマとなりましたし、各分科会でもやはりテーマとなっております。環境とか管理方法・生態系とか全てに関し、たとえば大きな阿蘇の草原があるから他の草原はなくてもいい

よ、という世界ではないということですね。北広島の草原はそこに雲月山という草原がある必然性・歴史性がある、それを守らなければいけない、地域で守らなければいけないということです。

それから2番目は「資源としての可能性」です。たとえば第三分科会からの報告ですが、動物園に草を売ろうすれば非常に高い値段で売ることもできます。それから茅葺き屋根等の資材も、今非常に不足しているので、大きな市場ではないけれども、需要と供給の関係でまだまだあります。畜産にとっても非常に重要なものだということは提言されています。これは第一分科会とか第二分科会・第三分科会すべてに出てきた、サテライトにおいても論議された内容です。先ほど、新しい草原の価値があるとお話したように、資源としての価値は新しい観点から検討していかなければいけないし、利用することが草原の保全につながるんだという仕組みを作ることが、今後の草原保全の持続性を確保するために必要だと論議が行われました。

3番目に、火入れそのものの「重要性、正当性」です。火入れの技術そのものが遺産的価値を持つんじゃないか、むしろ火入れを世界遺産として登録したらどうか、という話もございます。これも第一分科会や第二・第三分科会の中から出てきました。草原の維持において、火入れというのは非常に重要な手段、すなわちツールの一つなのですが、条例との整合性が懸念されるような部分もやはり出てきてますよ、という指摘がございました。これは全国的なことで、もちろん住民だけでは解決できない問題ですので、そのあたりの配慮が必要ではないかということです。

4番目に、正統性と関連して「安全性の確保」が、やっぱり近々の最も重要なテーマの一つです。安全性の確保方法には、様々なものがあります。たとえば、火を消すジェットシューターの整備によって安全性を確保するだとか、人員の配置によって確保するだとか、天候を見てきちんと意志決定をするだとか、様々な方法があるんですけども、そのやり方というのは地域によってバラバラです。ある地域はこのことはやっているけど別の地域ではやっていない、ということがありますが、地域同士を横につなぐことによって、自分たちだけでは気付かなかったような安全性の確保方法を他の地域でやってるなど、いろんなものが見えてきます。あるいは具体的な方法として、たとえばジェットシューターを使わない時期に、お互いに使い回しをしたらどうだろう、という論議もありました。そういう

ことを含めてそれぞれの良い所を情報として集める、ということはあるといいんじゃないか、という指摘もございました。

最後に、やはり「連携と協調」が必要です。連携と協調については全ての分科会で重要なテーマとして出ておりました。今までお話ししたキーワード全てに関わることですが、たとえば先ほどのジェットシューターの話にしても連携という中で実現が論じられることだと思います。連携・協調というのは、すべてを他人に委ねるのではありません。まずは自分たち自身も出来るところはやるんだけど、できない所は何らかの形で連携・協調して行きましょうということです。この連携・協調は一人で解決できることではありません。複数のいろんなセクターやみなさんがいなければいけないということで、その分時間もかかる内容です。ただ、これからの21世紀の社会を、協調の社会だとか自然環境を守る社会だとか考えたときには、やはりもっとも重要なテーマでもあります。市民としても今後も連携と協調が、持続できるような仕組みや、あるいはより積極的に行政や他の機関と話し合いを続けていきたい、対話を続けていきたいという意思表示がなされております。

以上のような経緯を踏みまして、シンポジウムでは「全国草原シンポジウム 北広島宣言」というのを採択いたしました。これを読み上げて総括とさせていただきますと思います。

--- 宣言読み上げ ---

こういう宣言をいたしました。これを議長にお渡ししたいと思います。どうぞ、よろしくをお願いします。

竹下（議長） 高橋さん、ありがとうございました。

高橋さんの方から昨日のシンポジウムの状況をまとめてご報告いただきました。今日こうしてサミットの傍聴においでいただきましたみなさまも、このシンポジウムあるいは分科会に、いろんな立場から関わられた方もたくさんおいでであろうと思います。改めまして大変御苦労さまでございます。ありがとうございます。今、全国草原シンポジウムの北広島宣言という、ススキの和紙に書かれた宣言書を受け取らせていただきました。これから、このシンポジウム・分科会等の報告等々ももとにしながら、サミットの議論を進めていきたいと思っております。

高橋さんのお話を要約をしますと、ここで議論のテーマになるものが3つになるかと思っております。第一に、

草原の新しい価値を見いだしていく、ということがありましたが、草原の活用を考えていくということが地域にとって非常に重要になってくるということです。第二に地域の担い手の問題です。高齢化が進んできている、あるいは過疎化が進んできている中で、地域の担い手のありようや確保の問題です。そして最後が火入れをどう安全に続けていくのかという、行政との関わり方の問題にもなりますが、火入れの安全性の確保の問題です。これから協議を進めるにあたってのテーマは、この3つになるかと思っております。

はじめに草原の活用について江府町の竹内町長に、お話しを聞きたいと思っております。前回の全国草原シンポジウムは江府町で行われ、ビューポイント、景観ということが大きなテーマであったと聞いております。これに関して、江府町が取り組んでおられる、草原あるいは自然の観光活用についてお話をお願いします。

竹内（江府町） 江府町から発表させていただきます。

わたくしどもの町は国立公園大山南山麓に位置し、岡山県蒜山町と隣接した地域です。私どもは大山の南山麓を望む江府町を奥大山という表現で呼んでいます。大山周辺には山麓部分ではなく、里山の山相景観など、多くのビューポイントを持っているところです。春には毛無山のカタクリが咲き、また木谷沢溪流、なんといっても西日本一のブナ林がある大山周辺です。特に奥大山地域江府町の秋の紅葉は見事で、一番のパノラマではないかと思っています。現在国立公園地内だけではなく、奥大山江府町では環境観光をキーワードとしてすすめており、今年の6月には全国六番目の環境王国に指定をされました。環境王国とは、農産物を中心とし37の評価項目があり、73点満点のうち43点以上を達成した市町村を指定するものですが、江府町は西日本で初めて、全国で6番目に指定をされたところです。



このように町全体の環境や景観に優れたポイントが多くあるわけですが、植林地や田園、集落周辺の環境は、残念ながら、高齢化や畜産の衰退のために荒廃が進んでいます。現在、観光地として経済活動の場になっているところもありますが、そうでない場所も多くあります。今後は大山の古道の復活や、森林、景観、環境などの保全など、10年20年先を見据え、ブラッシュアップしながら、住んでいるものにとっての魅力ある環境作りを進めたいと思います。このことによって、訪れる方にも魅力的に映るだろうと考えています。

さて、草原として、具体的に二カ所あげさせていただきます。ひとつは草地を牧場として活用しているところです。岡山県との県境にある地域で、大山烏ヶ山を一望できる、奥大山を代表する景勝地のひとつです。現在、地元の集落での牧野組合が管理しており、5月中旬から10月末までの期間、町内の牛を集め、約30頭を放牧しています。もうひとつは、国立公園内の休暇村大山鏡ヶ成周辺です。湿原と草地が広がり、木道も整備され、環境景観が確保されています。江府町の花はアヤマメですが、実は、こうした湿原で植生していたノハナショウブをアヤマメということで町の花に指定したのです。しかし、最近では牧野開発等のため、ノハナショウブも少しずつ少なくなっています。今後、改めて地元の人と行政が一体になって、ノハナショウブの咲く草地・湿原を回復していきたいと考えているところです。このように、観光地や放牧等で現在使われている土地もありますが、かつては各集落に入会地として共有の草地があり、火入れ等を行って管理されていました。しかし、現在は管理できなくなり、原野化したり、分け山として植林が行われています。草地は残念ながら減少している状況ですが、先ほど述べた二カ所については、町全体総ぐるみで保全をし、景観のビューポイントとして活用していくことを、今後努

力していきたいと考えています。

簡単ですが、以上で発表を終わります。

竹下（議長） 竹内町長ありがとうございました。

環境観光ということで、自然を活かした取り組みがされているということですが、参加の市長、町長方、今の発表に、何かご質問等ありますか。伯耆大山のふもとの草地のひろがり、放牧のひろがりということに関しては、阿蘇の状況と少し共通点があるのかなという風にも思わせていただけていますが、その辺りはいかがでしょう。

河津（阿蘇市町村会） 阿蘇の草原は原野といわれますが、ほとんどが、放牧場として利用されています。ただ、だんだんと牛の数も減っており、放牧場として利用されない原野が多くなってきています。江府町の場合は、新たに牧場として利用するというのですが、新しい取り組みというか、私どものところで参考になることがあれば、もう少し詳しく聞かせていただきたいと思います。

竹下（議長） 竹内町長おねがいします。

竹内（江府町） 阿蘇地方に比べると、私どもの放牧地というのは本当に規模的に小さいと思います。しかし、地元の方の熱意や思いというものが一番大切ではないかと思います。牧野化ということと、本来の湿原との共存共栄とを両立させる部分が一番の悩みです。牧野にして放牧にする場合はどうしても湿原を小さくしてしまい、湿原の多様性が損なわれます。その一方では、湿原の植生を回復したいという思いもあります。自然との共存共生という部分、また行政としての役割がうまく地元とタイアップしていかなければならないと、正直言って悩んでいるところが現状です。

竹下（議長） そのほか何かご質問等々はいかがでしょう。

竹腰（大田市） 火入というのは非常に危険なわけですが、私どもも安全に万全を期して実施しているところです。また一方で、火入れにはひとつのスペクタクル的な要素もあり、非常に見応えがあります。そこで、大田市においては環境観光ということで、NPO法人緑と水の連絡会議の提案により、JTBに働きかけをし



て体験型ツアーということでひとつの旅行商品になっています。環境観光ということで、江府町では、具体的にどのような形で観光がすすめられているのか、そのあたりをお聞かせください。

竹下（議長） 環境観光の具体的な進め方ですね、こちらへん踏み込んだご質問でありますけど、よろしくお願ひします。

竹内（江府町） 江府町の観光観光は、具体的には、今ようやく地に着いたところです。

環境観光の一番はやはり、景観であり、おいでいただいたみなさんにビューポイントを感じていただく部分だと思います。私どもが手がけているのは、観光客においでいただくことよりも、まずは住んでいる町民が環境という部分に意識を高めることです。例えば道路際の雑草をきれいにするなど、マナー的な部分を地元のボランティアや住民が積極的に対応しながら、景観を保全し、おいで頂いた人にビューポイントを味わっていただく、という状況を作っていくことだろうと思っています。環境観光をひとつの大きな目標、キーワードとしながら、今、ようやくスタートした状況だと思いますので、具体的にまだまだこれからだと思っています。

竹下（議長） ありがとうございます、

それでは次に、草原の活用ということに関して、観光、畜産、農業、さらには特産品の開発など、広く取り組んでおられ、しかも相当の実績をお持ちの、阿蘇の市町村会長であり、南小国町の町長でもあります河津町長、この辺の状況はいかがでしょう。

河津（阿蘇市町村会） 阿蘇について少し状況説明をさせていただきます。

阿蘇地域は熊本県の北東部に位置しており、真ん中に阿蘇山を有し、面積は熊本県土の約15パーセントを占める10,079平方キロメートルの広い地域です。一般的に阿蘇地域といわれるのは、市町村合併により誕生した阿蘇市を中心に、北の方の産山村、南小国町、小国町、南の方の南阿蘇村、高森町の、阿蘇郡市と呼ばれる地域に加え、合併して山都町になった旧蘇陽町も含まれます。標高が400メートルから800メートルに位置する高原の冷涼な地域と言われているのですが、ここ数年の温暖化により、夏には30℃を越える日がだ

いぶあり、冬の積雪量も減少している状況です。その地域の素材や資源を活かしながら、ゆっくりのんびり過ごす、タウンツーリズム・エコツーリズム・グリーンツーリズムを柱として、スローな阿蘇作りということで、阿蘇地域の事業を展開しており、年間1,800万人ほどが観光客として訪れます。かつては阿蘇登山、阿蘇の火口見物が観光の中心でしたが、近年は、周辺にある温泉や、温泉にひたりながら雄大な景観を眺めて過ごすような観光が増えつつあります。また、阿蘇ではいたるところに名水といわれる水源が湧出しており、水を汲みに来られるお客さんも大変増えています。

農業においては、高大な原野・草地や夏場の冷涼な気候条件を活かして畜産が営まれ、米、果樹、野菜などが作られています。また、林業もさかんな地域です。耕地面積は2万ヘクタールで、県全体の17パーセントを占めていますが、阿蘇全体の中では田んぼが45パーセント、畑が24パーセント、そして採草草が30パーセントとなっており、採草草地放牧地が広いことが特徴です。草原は、阿蘇では草原と言うより原野と呼ばれています。平安時代から火入れを行って草原を維持し、農畜産のための放牧・採草に利用されてきており、千年以上の歴史があるということです。この歴史を活かし、草原を維持するための維持活動を含めて、阿蘇山を中心とした文化的な景観をぜひとも世界遺産に登録したいということで、今年からは熊本県と一緒に推進協議会を設立して、世界文化遺産への暫定リスト入りを目指して今活動を始めているところです。

主な特産としては、高冷地野菜の阿蘇高菜、高原野菜のキャベツ・大根などが主な産物です。また、畜産もさかんです。もともと、阿蘇で飼われていた牛は「阿蘇の赤牛」といわれる赤毛和種の赤い牛です。日本では黒牛が有名ですが、阿蘇の場合は赤牛が大変おとなしくて飼いやすいということで赤牛が主流でした。こ



こ数年は価格が高い黒い牛に替わりつつありますが、阿蘇にはやはり赤牛が似合うと感じています。牛乳はジャージー牛乳を生産しています。畜産物を使った新たな製品として、様々な乳製品やキャラメル、ハムなどの加工品にも利用しています。

それから、草原を維持するための取り組みも進めています。草原を農産物の生産に利用していこうということで、草原再生シールの会というのを設立しました。この会では、阿蘇の草原から採ってきた、主にススキなどの、草を利用した堆肥で生産した農産物には、阿蘇草原再生シールを貼って販売していこうという取り組みです。新しい取り組みとして、阿蘇市の方では、バイオマスの利活用を試みています。刈り取った草を、ガス化発電技術によって、温水プール、温泉施設に利用していこうということで、今、試験的な取り組みがなされています。

野焼きも高齢化、過疎化でなかなかできにくい、という話が出ていますが、阿蘇では阿蘇グリーンストックという法人組織があり、10年前から野焼きボランティアを受け入れる取り組みを続けています。現在の登録員数は650名ほどで、年間延べ2,000名の方にお世話になっており、46牧野組合がボランティアの支援を受けて、野焼き、輪地切り、輪地焼きを実施しています。野焼きは大変な作業です。私もここに来る前、一昨日は輪地焼きをしてきました。隣に飛び火して、あわや一大事かという場面もありましたが、幸いにもたいしたことにはなりませんでした。

野焼きの安全性という点では、当町ではけが人や事故者はいなかったのですが、隣の山林に燃え移って大変な消火活動が行われたり、延焼後の保障問題も今起きております。これを解決するための労力というのが、牧野組合の世話をされる方にとっては非常に大きな問

題であり、その牧野組合に来年以降も野焼きを実施していただけるものかどうか、という心配もしているところです。安全性については、私ども行政としてもしっかりと協力しながら、ジェットシューターも、それぞれの市町村において牧野組合へ補助し、ジェットシューターを利用した野焼き、輪地焼きを行っております。また消防団も、もしもの時に備えて消防車を出すなど、積極的に野焼きを支援しています。

なんとかして、こういった草原を維持したいと私どもも願っております。そのための努力というのも今後続けて行かなければならないなと思っております。何かいい意見がありましたら、またお聞かせください。よろしく申し上げます。

竹下(議長) はい、河津町長ありがとうございました。

大阿蘇の、本当に幅広い取り組みをご紹介いただきました。

年間の観光客が1800万人ということですので、相当なスケールではないかと思えます。

また先ほどは、江府町の観光への取り組みもいろいろと紹介をしていただきましたが、観光という面から非常に共通点のある発表をいただいたように思います。

阿蘇の南小国町のことについて、ご質問等をいただきたいと思えます。いかがでございましょうか？

小坂(安芸太田町) 私たちも今、観光という領域で取り組んでいます。各地ではボランティアのみなさんの力を借りながら、山焼きに取り組んでおられますが、ボランティアとの連携をどのように具体的に展開していくのか、また安全制度をどのように確保していくのか、という点に非常に興味があります。この点についてお聞かせいただければ嬉しいのですが。

河津(阿蘇市町村会) 阿蘇の場合はグリーンストックという財団が、10年前から今まで、ボランティアとして協力願う為の登録をしていただき、育成をしてきました。最初は、果たして素人の方に野焼きができるのかな、という心配をしておりました。また輪地切り等で刈り払い機も使いますから、ケガなどの心配もしておりました。しかし、様々な講習会等を実施し、経験も積んでいただきました。普段は農業に関わらず、山に来ない農家の若い跡取りも、山焼きの時だけは帰って来たりして協力するわけですが、そうした人



達と比べたら、ボランティアのほうがよっぽど上手に、安全性も充分気をつけて協力いただいています。さらに、ボランティアリーダーと呼ばれる方々には、リーダーとして先頭を行っていただくような形もこれからは考えられます。このように、安全性の心配は、ボランティアの方々に経験を積んでいただくことで解決できると考えています。

竹下（議長） まず講習会をしながら、経験を積んでいけば、問題問題は解決できるということです。

阿蘇とはお隣同士で、県は大分県ということになりますけど、永尾副町長、いかがでしょう、何かご質問等はいかがでしょう。

永尾（九重町） 阿蘇の野焼きを、世界遺産に登録するという動きがあるとのことでした。私ども九重町も、阿蘇くじゅう国立公園に含まれます。大分県の別府から阿蘇までが一体になって、世界遺産に登録されるといいな、という風にお聞きしました。阿蘇の方はグリーンストックさんが先導して野焼きをしておられるので良いのですが、私ども九重町は実行委員会で実施しています。昨日、高橋裕二郎から実践報告をしましたが、野焼きを続けていくためには、マスコミ等を通じて大切さを訴え、協力してくれる人、オーナーを探すということも大事だと思います。

竹下（議長） 阿蘇くじゅう国立公園が一体となって世界遺産をとともに目指す、というご提案がありました。こうして見ますと、大田市は石見銀山が世界遺産に登録もされており、北広島町も、壬生の花田植という伝統的な花田が世界無形文化遺産として推薦決定がなされ、来年の9月くらいには、登録決定になる予定です。こう考えると、阿蘇くじゅうの世界遺産登録が実現すれば、この6人いる首長のうち、4人が世界遺産登録

の町となるわけです。草原を持っている市や町は、自然だけではなく、この豊かな文化こそが素晴らしいという風に思われます。

それでは続きまして、先ほどから野焼きの問題が要所々々でどうしても出てきておりますけれども、安芸太田町の小坂町長、野焼きを安芸太田町では観光のイベントとして、進めておられるということでもあります。ここらへんの状況についてお願いをします。

小坂（安芸太田町） それでは安芸太田町の様子を少し話させていただきます。

安芸太田町は合併をして5年を経過しています。過疎化・高齢化に有効な手だてがなく、現在、広島県で一番人口が少ない7,800名の町民が生活を、町作りをしているところです。この北広島町に隣接し、広島県の北西部、いわゆる西中国山地に位置する町です。広島県最高峰の恐羅漢山、あるいは国の特別名勝の指定を受けている三段峡など、美しい山容あるいは溪谷を誇っています。今日的な生活をやる上では厳しい条件の地ですが、幸いなことに町の南側は広島市に隣接しており、広島市の中心部から町の中心部までは、直線距離で約30キロであり、車なら1時間で広島市と連絡がとれます。そこで、広島市の100万の人口を対象にした観光、レクリエーションのエリアとして、交流を促進しながら、元気のある町作りを取り組んでいます。

その一環として、重要なのが深入山です。深入山の標高は1153メートルで山頂まで草原が続いています。1時間で山頂まで登れる独立した山で、頂上からは360度の展望が得られ、天気がよく日には遠く益田沖の日本海が望めます。そのため、多くの登山愛好家楽しんでいただいています。今から約260年前、



1749年には、すでに山焼きがなされていたという記録があります。生活が代わり、農業のスタイルが変わった現代では、観光を目的に、毎年4月の第2日曜日に山焼きを実施しています。春の山焼き、その後の山菜採り、そして夏場の秋の登山、というような形で交流の促進をしています。古くから、この山で採れたワラビは大変貴重な物であって、江戸時代には吉野のくず粉にも勝ったと伝えられているほどの良質なものでした。植物も豊富で、真っ赤な実がなるツチアケビ、多くのオオバギボウシ、ダイセンミツバツツジなど、貴重な植生も登山の方々に楽しんでいただいています。

手軽に登山できること、広島から近いということで観光振興を図っていますが、地元も過疎が進み、平均年齢が上がっていく中で、約100ヘクタールの山焼きは大変な作業になっています。事前に2、3名の方が約1週間かけて火道の草を刈り、当日は地元の松原集落、83世帯で173名の地域から約70名の方がボランティアで協力をしていただきます。また当然地元の消防団の協力を得ながら延焼を防止し、安全第一で作業を行っています。山頂付近から急な斜面を下山しながら行う作業は、体力的に非常に厳しく、地域の方々の力だけではこの先大変なことになると予測されます。地域から広島へ出ておられる方が、いわゆるUターンをされて山焼きを手伝ったり、親戚の方々もこの祭りに合わせて、多くの都会の方々と一緒になって我々の町に帰ってきていただいております。幸いにも、今まで事故なく続けてきていることが、地元のみなさんの誇りになっています。たくさんの方から大きなエネルギーを頂きながら、続けています。

観光面では、集客をあげる工夫もしています。安芸の宮島の真言宗御室派の大本山では、いわゆる消えずの火と言って、約1200年前からの弥山の山頂で火をともしています。この火を当地に持ってきて、登山の安全と観光の発展を祈念する護摩法要を同時に行っ



ています。そうした関係から、多くの信者の方々にも、私たちの山焼きに訪れていただいています。

この護摩法要、全山の山焼き、そして地元の伝統芸能である神楽等々、多くの催しを同時に行い、多くの方々に来ていただけるよう取り組んでいます。やはり地元の高齢化等々、いろんな課題があります。本日のサミットに参加させていただき、ボランティアというようなお話も聞かせていただきました。また草原の新たな価値というものを広くPRしていくことが次の取り組みとして、我々の所でも必要ではないかと感じています。

竹下（議長） 小坂町長ありがとうございました。

春の山焼きからはじめて、山菜の季節になったら山菜採り、夏は登山というように、年間を通じて山焼きをベースにしながら、大都市の広島市の方からのお客さんを対象にしながら活用されている。その一方で、地域がほとんど総出で出ておられたり、地元の消防団も参加されているようですが、担い手の確保が非常に難しくなっている、というご報告でした。

深入山の山焼きの日は、決まっているのでしょうか？

小坂（安芸太田町） 予定では毎年4月の第2日曜日を予定しています。西日本で一番西、あるいは南の方の本格的なスキー場があるというのが我々の地域であり、山焼きの頃にも雪が残っている年もあります。今年はまだま強風乾燥注意報が出ており、残念ですが、山焼きは前日の夕刻に中止の判断をしました。天候のこともあり、延期しても一週間の範囲で取り組んでいます。山焼きをイベントとして、観光の資源として実施するので、少々のごことは押してでもやっていきたいというのが地元の意見ですが、今年については、残念ながら乾燥注意報ということで、中止をさせていただきました。

竹下（議長） ただ今、重要な報告がありましたが、山焼きというのはまさしく気象条件に大きく影響を受ける行事です。昨日のシンポジウムにおきまして、春の季節に乾燥注意報がでてるのは当然でありながら、一方で、乾燥注意報のもとでは山焼きを禁じるという現状との不整合が指摘されました。これは北広島条例でも同様です。ここを、どうクリアし、整理をしていくのかというのは、行政の課題でもあります。

今年、深入山では、強風乾燥注意報が出たために山焼きを中止されたということです。スケジュールを組んでいた観光イベントを変更するというには非常に大きな影響が出ます。この、気象条件と山焼きをどう考えていけばいいのか、日程変更について、実際にこういうふうに行っているということがありましたら、お聞かせください。

河津（阿蘇市町村会） 今までは異常乾燥注意報が出ていても、あまり気せずに実施していました。ところが今年は大分の湯布院の方で事故があり、焼死者が出たということで、改めて本町の条例を見直したところ、やはり異常乾燥注意報が出ている場合は野焼きを実施してはいけないということをおっしゃっていました。そこで、少し見直しをして、異常乾燥警報では禁止とし、注意報の場合は実施しても良いというように条例を改正することを検討しています。行政としては何か問題があったときには、なぜ許可したのかということを追求されるため、非常に辛い立場になります。当方でも隣の山林の方に延焼し、大変な目にもなっています。行政が批判を逃れるためには中止した方が良いでしょうが、地域のみなさんはどうしても野焼きをやらなければいけないという意識をお持ちです。そして、決められた時に実施しないと、次の週になるとなかなか人数が揃わなかったりと、困難になります。特に阿蘇では一斉火入れということで、隣の市町村と同じ日に火入れをやるということで連携しているので、一方的にここの町だけやめるということができない状況があります。市町村間で連携しながら、やるかやらないかを決めていかなければならないため、ある程度の条件でも野焼きを実施できるような条例の見直しが必要だと思っています。

竹下（議長） ありがとうございます。注意報と警報を使い分けられないじゃないかということです。火入れの問題については、三瓶の大田市長にも、後ほどご報告を頂く予定にしています。火入れの問題のつきまちは、いったんここで置かせていただき、火入れの担い手について、お隣の大分県の九重町の例をお聞きします。子ども達のふるさと意識を、どのように植え付け、育てていくのかということについて、意識を明確にしなが、進めておられると伺っています。その状況につきましてご紹介ください。

永尾（九重町） 九重町の状況を報告をさせていただきます。私どもの町の人口は11,000人ちょっとです。定住人口1万人、交流人口2万人の、3万人が集う町づくりを進めております。その町づくりの基本として、一番目に自然との共生を目指した町づくり、二番目には個性の輝く町づくり、そして三つ目に町民と行政の共同による町づくり、という基調を持っています。観光入り込み客が550万人を越えています。その550万人を超える皆さん方は本町の自然、温泉、これを目指して来られます。そういう状況の中で、草原の野焼きをすることによって景観を保持し、同時に畜産等への活用、山火事防止などの安全的な面から、野焼きを推進しています。野焼きの推進に町として何が協力できるか、ということについては、輪地焼きに必要な経費の二分の一に当たる費用を町が助成しています。

条例の問題もありますが、ある面では町が野焼きを推進をしているということで、マスコミからの批判もありました。条例については、九重町でも、現場で判断が出来るようなものに、12月に改正をしたいと考えています。

南小国町は南側に面していますが、九重町は北斜面です。そのため、火をつけても朝のうちにまだ燃えないというような状況があります。町が野焼きの許可をして、町が責任を問われるような状況ではなく、町も責任を持ちながら、その場所の風向きや風の強さによって現場で判断できる様に、野焼きをやりやすい条例にしていきたいと思っております。

担い手については難しい問題です。九重町では、野焼きを実行委員会で実施していますが、その実行委員会は地域づくりのメンバーです。くじゅう氷の祭典に関わったメンバーがほとんど集まっています。くじゅう



う氷の祭典というのは、県・国・警察・学校・PTAなども含め、様々な主体 50 団体で構成されている組織です。そこが野焼きをしよう、しなくちゃいけないということで、野焼き実行委員会へと移管し、実行しています。現在は警察、環境省、企業では九州電力などが参画しています。九重町に来てくれるお客さんたちに喜んでもらうためには野焼きをしなくちゃいけない、という価値観を共有し、観光協会も参加しています。消防団にはですね、どうしても加勢をしてもらわないなりません。また、警察にもお願いをしています。野焼きの際、観光客が近づきすぎて危ない状況がありますので、見る場所を用意して、見学場所を制限して実施しています。

野焼きを次の時代に伝え、広げていくということになると、なかなか難しい問題があります。九重町には、セブンイレブンの緑の基金の、くじゅうふるさと自然学校という学校が開校しています。そこでは、子どもたちに自然の大切さを教えております。また、九重には、今年で 48 年になる「くじゅうの自然を守る会」というすごい会があります。その会のメンバーも子どもたちに教育をしています。これらの活動を通じ、なんとしてでも、野焼きの文化を続けていきたいと思えます。また、野焼きとは直接関係ありませんが、私どもはトキの住める町づくりを進めております。ひょっとしたら 100 年かかるかもしれません。そんなに生きていないよということで、30 年くらいにならないかという話もありますが、環境はそんなに一挙には戻らないと思っています。私どもの時間では足りません。そこで、今、佐渡の方に、トキこども大使というのを派遣しています。そのメンバーにも、自然を保全する大切さを繋いでいます。その子どもたちも、きっと担い手になってくれるだろうと期待をして進めている状況です。

竹下（議長） 町行政と地域あるいは関係団体が、非常に密接に連携し、町が先頭に立って山焼きを推進をされているということでした。町の基本的な理念として、自然との共生を行政として真っ先に掲げているというのが本当に珍しいのかなと思います。行政が積極的に野焼きに関わっているということについては、三瓶山の大田市もそうですが、続いてそのところをご報告をお願いします。

竹腰（大田市） 三瓶では、毎年春に野焼きを実施致

しています。三瓶の野焼きは、約 20 年くらい前に、観光客の失火によって三瓶草原が大火になったということきっかけに始まりました。国立公園三瓶山の防火対策、そして草原に生息している大変多様な生物を維持・再生する目的で、市の指導で毎年 3 月から 4 月にかけて火入れを実施しています。野焼きは市の事業として行っていますが、市行政、消防・警察そして NPO、ボランティアと、まさに官民一体で実行委員会組織を作り、その実行委員会が企画運営をして実施しています。

安全には万全を期しており、火入れの一週間前に周囲の草を刈ることによって防火帯を設置します。特徴的なのは、NPO の提案で、牛の放牧によって防火帯を一部設置するという試みもあります。そして火入れの時には、防火帯の 20 メートルごとに一名ずつ、ジェットシューターなどの消火器具を装備した消火担当を配置します。全体で約 100 名を配置し、消防自動車を三台待機させ、消防署の監視のもとで火入れを行っています。ただ、三月の火入れというのは気象も非常に変わりやすい状況にあり、大変危険な状況は残っています。湯布院でこの春に事故が発生し、大きな問題となっています。火入れを実施するかしないか、乾燥注意報、あるいは強風注意報が出ているときにどうするのか、という判断は大変重大な判断になります。そういう状況においても、行政の場合には森林法に基づいて野焼きを実施できるわけですが、大きなリスクがあり、大変重大な判断を迫られます。担当部署としては非常に緊張感を持って、火入れ事業を行っているというのが実態です。

また、火入れには観光的な要素もあるということで、現在 JTB が、体験型の観光ツアーということで、旅行商品にしており、多くの方々がおいでになります。火入れの体制だけではなく、見学者、参加者に対しての対応や受け入れ体制、あるいは報道に対しての対応



や、救護、飲食や特産品の販売など、受け入れ体制についても整えて火入れに臨んでいます。なかなか大変な事業ではありますが、このような事業を通じて、地域の活性化にもつながっていきますし、また環境に対しての市民意識の向上・啓発にもつながるといことで、これからも安全には万全を期してすすめていきたいと思っていますところ。

竹下（議長） 竹腰市長ありがとうございました。市の事業として、山焼きを行っているということです。この大田市の取り組みに関して、ご質問等はいかがでしょう。

永尾（九重町） 観光事業で火入れを、ということでしたが、私どもも観光に組み込もうとするのですが、天候に左右されるため、日取りが非常に難しいのですが、どのように対処されているかお聞きしたいです。

竹腰（大田市） なかなか難しい質問です。仰るとおり、観光ツアーというのは日にちが決まっております。その通りに実施しないといけないわけです。野焼きを初めて約20年になる三瓶においても、これまでに一度も中止したことはありませんが、延期したことはあります。なかなかツアーを野焼きにあてるとするのは難しい面もあると思っています。ツアーが始まったのは2年前からで、今のところそういう状況になっておりませんが、その辺りのところも十分に配慮しながらやっていかなければいけないと思っています。

竹下（議長） せっかく準備をして万全の体制で臨むのに、やむを得ず中止というのは大変なことです。一緒にするわけにはいきませんが、今年は60何年に一度の皆既日食ということで、ツアーもずいぶんあったようですが、土砂降りの雨が降って、残念だっ



たようです。

先ほど少し議論になっております、法律あるいは条例の規定の中で乾燥注意報、あるいは強風注意報、あるいはその上のレベルの警報などと、どう整理をしていくのかということですが、少し踏み込んで検討されている自治体はあるでしょうか。

永尾（九重町） 大分県の場合は十月に関係市町村が集まって、検討するということにしています。

竹下（議長） それは来年の春の山焼きに間に合わせると言うことで検討しているということですか

永尾（九重町） はい。

竹下（議長） そうですか。鳥取県の方では、いかがでしょうか。

竹内（江府町） 実はちょっと小さくなっておりまして、私の所は火入れをしております。私どもの町でも、過去には山焼きという表現で火入れをしていましたが、衰退した一番の原因は植林事業を推進してきたことです。今は消防署などと相談しても、火入れはちょっと無理なのかな、というちょっと弱腰になっていますが、誰が責任をとるのかというのが最終的な方向性ではないかなと、お聞かせいただいたところ。

竹下（議長） 火入れの問題につきましてはこのサミットそして昨日のシンポジウムの、非常に大きなテーマとして検討を重ねてきているところです。安全性を確保しながら、もう少し火入れをやりやすくするのにどうすればいいのか、という議論は、このサミットの重要テーマとして出続けておりますので、何らかの形で、北広島サミットの宣言に盛り込んでいければと考えております。

竹下（議長） さきほどから各市町の状況あるいはそれに基づく質疑等をかさねてまいりましたが、これより、サミットの宣言のまとめに入っていきたいと思えます。ここで、最後にご参加を頂きました首長さん方々からお一人ずつ最後にご意見等々を賜りたいと思います。

竹内（江府町） 今日ご出席の各市町村首長からお話

を頂き、本町もしっかりと環境観光を進めていきたいと考えます。そのなかで、現在、ブナの森プロジェクトという事業を動かしております。この事業では、ブナの保育園をつくりました。子ども達や住民が、ブナの実から苗を育てて、これをブナの保育園に植栽をして20年、30年、50年先に、また環境保全が出来た時には、多くの皆さんに観光に訪れていただくという構想です。また、湿原の回復に取り組み、町の花であるノハナショウブを、草原や湿原の中に回復していきたいと、そんな思いを今日強くいたしました。どうもありがとうございました。

竹腰（大田市） 郷土自慢になって恐縮ですが、私どもの町には市民が誇りにするものがたくさんあります。中でも2つ代表的な物があるなと思っております。ひとつは世界遺産の石見銀山、そしていまひとつが国立公園の三瓶山です。

石見銀山は世界遺産に登録となり、すでに約2年が過ぎましたが、この世界遺産登録最大のポイントは産業と自然の共生でした。鉱山というのは、鉱石を採掘するために山の形や地形を変えてしまう、つまり自然を破壊してしまうわけです。しかし、石見銀山で本格的な採掘が行われたのは産業革命前でした。したがって、鉱脈に沿って、手掘りで、自然に優しい方法で鉱石の採掘がなされました。それ故に、非常に豊かな昔のままの自然の中に、遺跡が良好な形でとけ込むように残っている、というのがひとつの特長です。そしてまた、銀の精錬に必要な森林資源を得るために、植栽と伐採を計画的に行っていました。持続的に銀山経営ができるようなしくみが、石見銀山ではできていたわけです。つい先日、石見銀山を象徴する一つの神社、サヒメ山神社でシンポジウムがありました。ご

承知のように、神社には鎮守の森があります。その背景には、自然を守って、自然を作って、そしてそこに生息する動植物、あるいはその環境を守っていく、つまり自然と共生するという考え方があるわけです。自然を克服するのではなく、自然と共生するという自然観あるいは世界観は、日本人独特の考え方だと思います。現代人が地球環境問題に直面している今こそ、自然との共生という考え方を大切にしなければならないのではないかと思います。その意味において、石見銀山の世界遺産登録は本当にメッセージ性の高い世界遺産登録だと思っています。

そして今ひとつが、三瓶です。非常に草原景観が美しい山です。これまで、私どもにたいして本当にいろいろな恵みを与えるとともに、生物多様性も支えてきたわけです。この三瓶を維持、保全し、そしてさらにこの魅力を高めていくということが、自然との共生につながると同時に、地域社会に対しても、色々な意味で活性化につながっていくと思っています。

環境ということにおいて、石見銀山と三瓶という、二つの象徴的な資源をわたくしどもはもっております。先ほど、江府町長の方から「環境王国」ということがございましたが、これから私どもも、しっかりそういう取り組みを強化していきたいと思っています。もちろん色々な視点から、すでに取り組んでいるところですが、いっそう取り組みを進めていきたいと思っています。

ありがとうございました。

小坂（安芸太田町） 今日各市長さん、町長さんから貴重な意見をいただき、私自身大変勉強になりました。といいますのが、我々の本当に誇るべき深入山が、観光というところにあまりにも重点を置いていたのではないかと、新たな思いを持っているところです。先ほど200何年というようなことを言ったわけですが、もっと長いスパンで草原が守られ、継承されてきたものであり、そこには大変多様な植生があるということを、今日改めて認識したところです。その草原を観光という領域から見ていく価値は、やはり充分あると思っております。さらにもう一点は、今まで「おいでいただく」「見ていただく」という観光の領域が主であったのですが、先ほどから話題となっているようなボランティアの方々の力を借り、いわゆる参加をしていただいて、関わっていただき、交流が促進できるような新たな切り口も、今日のサミットで教えていただいたことです。貴重な草原を、豊かな植生あるいは、



都市部の方々との交流というような、新しい切り口で、次の世代へ伝えていきたいと思っているところです。

永尾（九重町） 自然との共生が町作りの基本です。九重町には、ラムサール条約に登録されたタデ原湿原があります。今後は阿蘇のみなさん方と手を組み、世界遺産に野焼きが登録できるよう、この取り組みに力を注ぎたいと思います。そして何よりも大事なのはやっぱり野焼きの文化です。その文化を担い手にどうつないでいくかと言うことが一番大変で、大事ではないかと思います。これからも担い手の育成に力を入れていきたいと思っています。

河津（阿蘇市町村会） 私ども南小国町は「日本で最も美しい村連合」という組織を作り、人間の営みの中で支えられ、残されてきた自然や景観といったものを残していこうという運動をしており、全国で30市町村ほどが加盟しています。その中でも、南小国町としては、草原がひとつのアピールポイントでした。そういったことでこの草原の大事さというのを残していかなければならないと思っていますが、阿蘇全体としても、当然この原野、草原がひとつの最大のアピールポイントだろうと思っています。阿蘇山自体のみならず、阿蘇山とこの草原が一体となった世界遺産として登録していきたいと思っています。草原がもつ文化的な景観を大事にしながら世界の方々に認めていただけるよう、先ほども九重町さんの方から提案がありましたとおり、阿蘇くじゅうが一体となった世界文化遺産として登録ができればいいと思っています。その運動を強力にすすめていきますので、どうか皆さん方もご支援のほどよろしくをお願いします。

竹下（議長） ありがとうございます。

朝の9時から、たくさんの方々に傍聴していただきながら、第8回全国草原サミット北広島ということで議長という大役を務めさせていただきました。草原というテーマの中で、多様な視点で議論をすべきであったかと思いますが、不慣れな大役でございましたので、十分な議事の進行ができなかったのではないかと反省をしております。しかしながら、こうして会場の方々とともに問題意識を共有しながら、それぞれ市長町長という責任ある立場にあるものとして、草原に関わる多様な問題について議論をさせていただいたことを、大変光栄に嬉しく思います。それでは、

北広島サミットということで、共同宣言の案がまとまっておりますので、読み上げさせていただきます。

--- 宣言案読む ---

この宣言に賛同をいただける方は挙手をお願いします。

--- 全員挙手 ---

ありがとうございます。

全会一致で共同宣言が採択されましたので、これをもって北広島宣言として、宣言に署名をしたいと思えます。

--- 署名 ---

ありがとうございました。

ここに12市町村の代表6名の署名が揃いました。

みなさまのおかげで大変有意義な全国草原サミットが開催できましたことに厚く御礼を申し上げます。そして本日傍聴いただきました会場のみなさま、一昨日の現地調査視察から昨日のシンポジウム、そして本日のサミットと、草原のことについて本当に熱心に活動、あるいは調査研究をされているみなさまにご参加をいただきました。大学の研究者の方、あるいはそれぞれの地域でNPOやボランティアとして活動されておられる方、あるいはまた国をはじめとする行政の担当の方など、本当に多様な方々にご参加をいただきました。まことに意義の深い全国草原サミットでした。これを持って閉会とさせていただきます。本当にありがとうございました。



全国草原サミット 北広島宣言

私たちの祖先が拓き、長い時間をかけて育んできた草原は、枯渇することのない資源として豊かな農村を支え、地域固有の財産とも言える独自の文化を育てました。その遺産は今日も変わることなく、バイオマスエネルギー、エコツーリズム、環境学習の場など、新たな利用も認められます。同時に草原は、極めて多様かつ特殊な生物群を育み、地域の生物多様性に深く貢献しています。美しく豊かな草原を守り続けている、地域の人々の知恵と弛みない営みこそ、私たちが誇りにすべきものであり、自然と共生した持続可能な社会を実現するものです。

一方、社会の変容は草原の利用低下を招き、多くの草原が森林へと変化しつつあります。加えて、農村では過疎化・高齢化が進み、草原の恵みを楽しむ仕組みは衰退の一途を辿っています。人々に豊かさをもたらし、生物多様性を支えてきた草原は、かつてない、危機的状況を迎えています。今こそ草原に関わる仕組みを再構築する時です。草原を保全し、その恩恵を将来にわたり享受できる社会の実現は、私たちに課せられた責務であり、農村の存続と発展、都市への恵みと豊かさをもたらすものであると考えます。

緊急の課題として、安全確保のために、火入れ時の体制を今一度見直し、伝統的な山焼きを継承するために必要な、可能な限りの支援方法を模索します。また、かけがえのない環境、危機的状況にある野生生物を保全するために、最善を尽くします。私たちは、地域社会と連携し、常に広く新しい視点を持ちながら、草原が持つ豊かな資源の利用について研究を続けることにより、草原の魅力を引き出し、故郷の魅力を高め、地域社会の担い手を育成します。

そして最も重要な事は、地域・ボランティア・利用者・研究者など、草原に関わる各主体との対話を継続することです。さらに、草原を有する市町村間の連携を深め、私たち首長同士が情報交換を続ける事だと考えます。私たちは、私たちに託された貴重な草原を、その価値を損なうことなく後世に引き継ぐために、今後も交流を深めながら、精励することを、北広島町において宣言します。

平成 21 年 9 月 28 日

第 8 回 全国草原サミット議長

広島県北広島町長

竹下正彦

鳥取県江府町長

竹内敏朗

島根県大田市長

竹腰創一

広島県安芸太田町長

小坂真治

大分県九重町副町長

永尾宗忠

熊本県阿蘇市町村会長

南小国町長

河津修司

写真で振り返る現地見学会と会場風景



受付の様子



雲月山の見学



雲月小学校の児童も同行した



県境付近を見学する



山焼きの状況などを聞く見学者



八幡湿原自然再生事業の説明



北広島町立 高原の自然館



千町原の見学



パネル展示



草原に生きる植物と鳥の写真展



九州バイオマスフォーラムによる野草紙漉の実演



チョウ類標本を寄贈した富賀見 勉氏に町長から感謝状が進呈された



加計高校芸北分校神楽部による「八岐大蛇」



花を打つ懇親会参加者



『とってもゆかいな秋吉台ミーティング』によるミニコンサート



坊がつる賛歌を歌う「九重の自然を守る会」



山焼きで草原が維持されている雲月山。ススキが秋風に揺れる
(撮影・坂田一哉)

里山の営み

草原サミットを前に

①

「第8回全国草原サミット・シンポジウム」が26日から3日間、北広島町で開催される。全国12市町村の首長が集い、失われつつある草原の保全と活用、文化創造への道筋を探る。会場となる北広島町芸北地域には雲月山や八幡福原など西日本屈指の豊かな草原環境と生態系が残る。自然と人の営みはくむ里山の表情を紹介する。

(胡子祥)

原風景

山焼き復活植物再生

金色に輝くススキの穂が 草原はかつて、牛の放牧
秋風に波打つ。島根県境に や牧草、かやぶきなどで里
ある北広島町の雲月山(9 山の暮らしを支えていた。
1.2倍)。山頂一帯には約 しかし農業の機械化で牛を
40分の草原が広がる。町芸 飼う農家が激減。雲月山で
北高原の自然館主任学芸員 も1950年代半ばに山焼
の白川勝信さん(36)は登山 きが途絶えた。

道を進みながら、これは 草原はやがて変わり、林
と広い草地が残るのは芸北 となった。91年に地元観光
でも「こころい」と周囲を 協会などが観光イベントと
戻した。 して山焼きを再開したが、
98年には断念。人員確保や

雲月山では、地元住民が 安全対策などが重荷だっ
春に山焼きをし、草原の維 持を図っている。「焼いた
場所と、そうでない場所で
は植生がまったく異なる」

と白川さん。足元に視線を び人が集い、憩う場にし
落としすと日当たりが悪いと たかったと、地元住民でつ
育たない雑草のセンブリが くる雲月山活性化委員長の
生える。 藤沢通さん(58)。2005
年、雲月山の管理に主眼を

陽光をささぎる木々が山 置いた山焼きを、ポランテ
焼きで一掃され、草原は多 イアを募って再度復活させ
様な生態系をはくむ。雲 月山には約330種類の植
物が自生し、県内で確認さ

れている種の15%を網羅す も始まった。「雲月山への
る。広大な草原空間と植物 地元の愛着が深まった」と
観察を楽しめる雲月山登山 藤沢さん。里山の原風景が
は人気コースの一つだ。 よみがえった。



2009年9月20日 中国新聞

里山の営み

草原サミットを前に

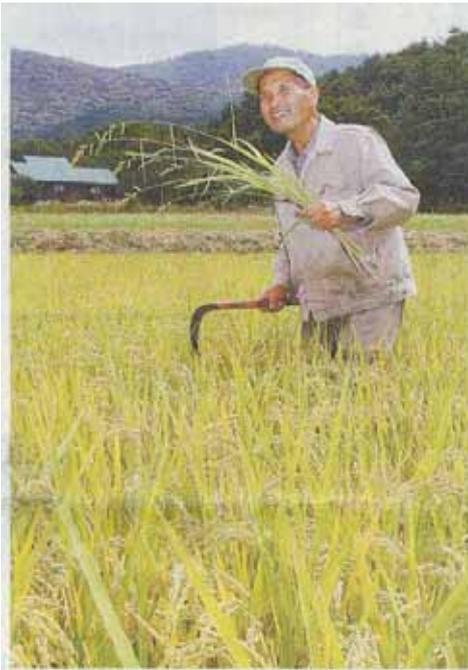
②



「除草剤をまかんげえ、ヒエがよう目立つじやろ」。昨年からの農業や化学肥料標高約800mに位置する北広島町東八幡原の農業坂組む。草原などで刈った草を堆肥にして田にすき込ある約11坪の田んぼで、かむ。「昔のコメ作りには草まを手にヒエを一本ずつ刈り取っていく。県内多数の寒冷地。稲刈りは来月上旬に始ま

原っぱの恵み

草の堆肥でコメ作り



草を堆肥として使った田んぼで、ヒエを取り除く坂井さん (撮影・坂田一浩)

千町原は約30分。戦前、地域住民の入り会ひの採草地だった。農耕用の牛の飼料や敷草などに利用し、ふん尿と混ざった敷草を堆肥として田に入れていた。しかし、農機具や化学肥料のおかげで草原の利用も途絶え、人の手が入らんと、荒れるのも早い。坂井さんが「千町原」で刈り取る。そうして育てたあきたこまちは「はらっぱ米」と名付けた。千町原の草刈り整備が

「草はが欠かせなかつた」。草は自宅から徒歩10分にある。「千町原」で刈り取る。そうして育てたあきたこまちは「はらっぱ米」と名付けた。千町原の草刈り整備が

た。もう一度、昔のやり方でコメを作ってみようと思っ

(胡子祥)

2009年9月21日
中国新聞

里山の営み

草原サミットを前に

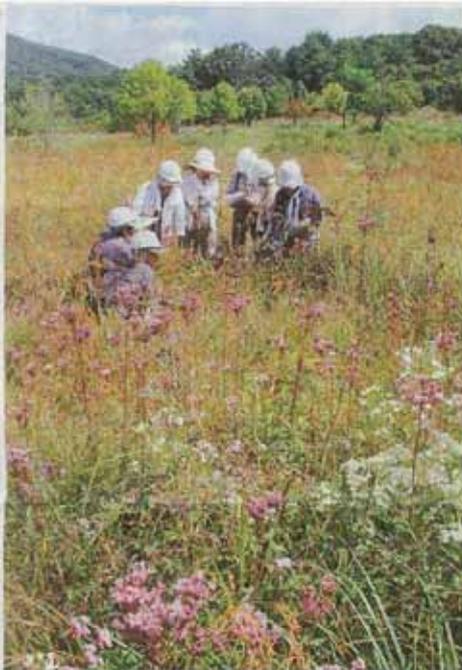
③



白い花びらに斑点の付いたアケボノソウや薄紅のサワビヨドリなど、湿地を好む秋の花が咲く。湿原環境が進められている。メンバが戻ってきている。また第7人はこの日、湿原の回復が民づけて。今月13日、具合を探る植生調査を実施柴木川の最上流部、北広島町東八幡原の霧ヶ谷湿原。西中国山地自然史研究会理事の佐久間智子さん(32)の表情が緩

霧ヶ谷

湿原植生再生の兆し



霧ヶ谷湿原の再生事業地で、植生を調べる自然史研究会のメンバー

超える植物を確認。水辺で「ゴキヤオコウイムシ」も見つけた。霧ヶ谷湿原一帯17・5段は固有地で、八幡湿原を構成する代表的な湿原だった。しかし1960年代、前を流れる柴木川の水は一気に増え、今回は「緩やかだった」と、霧ヶ谷湿原近くで民宿を営む倉田穂積さん(60)。湿原の保水力が徐々に回復していると実感した。県は本年度、湿原で生物観察を奨励する木製の散策路を整備し、一連の再生工事を完了する。「一事業終了が湿原再生へのスタート地点」と佐久間さん。自然史研究会は年2回の植生調査を続け、有効な湿原管理の方策を探る(胡子祥、写真も)

今年7月、八幡地区を大雨が襲った。これまで家の

2009年9月22日
中国新聞

「北広島宣言」を採択

草原サミット 550人参加し閉幕

国内の草原の保全や活用方法について考える「第8回全国草原サミット・シンポジウム」が27、28の両日、北広島町の芸北文化ホールで開かれた。一足早く町内の草原であった26日の現地見学会を含め、3日間で延べ約550人が参加し、意見を交わした。

27日には地域住民や山岳関係者らがシンポジウムを開き、ボランティアで草原を守る担い手の確保、農業や観光



草原の保全をテーマにしたオペレッタを上演する雲月小の子どもたち―北広島町

市長は、火入れの際の安全確保について「市が主体となつて山焼きをしている」などの取り組みを報告。「地域、ボランティア、利用者、研究者など草原にかかわる各主体との対話を継続し、市町村間の連携を深め、貴重な草原を後世に引き継ぐ」との北広島宣言を採択した。(福家司)

2009年9月29日
朝日新聞

雲月山の草地維持の取り組みについて説明を受ける参加者



草原保全へ北広島宣言

閉サミット 12市町村が連携誓う

北広島町で開かれていた「第8回全国草原サミット・シンポジウム」は最終日の28日、全国12市町村の代表が草原の保全と活用策について意見を交わした。豊かな草原環境を生かして地域の魅力づくりを進める「北広島宣言」を採択して閉幕した。

町芸北文化ホールであったサミットには、阿蘇山を抱える周辺市町村や、三瓶山のある



大田市の首長ら計6人が参加。北広島町の竹澤修司町長は、登録ボ

下正彦町長が議長を務め、過疎高齢化が進む各地域で「草原を核とした豊かな里づくりをどう進めていくか」をテーマに話し合った。

阿蘇山周辺7市町村を代表して出席し、後世に継承していくことが重要などと宣言をまとめた。(有岡英俊)

ランテア(650人)による野焼き活動を報告。「都市住民との交流で、草原を維持する担い手を確保している」と紹介した。

また大田市の竹腰創一市長は、旅行会社とタイアップした火入れ行事のツアー商品を挙げ、「草原は貴重な地域資源。三瓶山の魅力をアピールする工夫が大切」と強調した。

最後に「今後も草原を有する自治体が連携し、貴重な地域資源を後世に継承していくことが重要」と宣言をまとめた。

2009年9月29日 中国新聞

草原の保全と活用探る

北広島で サミット 八幡湿原の見学会も

第8回全国草原サミット・シンポジウムが26日、西日本有数のフナ林や湿原が残る広島県北広島町で開催された。28日までの3日間、全国12市町村の首長や各地の研究者たちが集い、草原環境の保全と活用策を探る。

初日は、芸北地域の

雲月山(912m)や八幡湿原の見学会があり、草原の維持・再生活動に取り組む全国の住民グループやNPOの法人から約80人が参加した。雲月山では、地元の中田山地自然史研究会のメンバーから、山焼きで草地を維持している活動や草原

に自生する植物の説明を受けた。続いて県が

27日は町芸北文化ホールでシンポジウムがあり、28日には熊本県阿蘇山周辺の7市町村を話し、三瓶山のある大田市や広島県安芸太田町など12市町村の首長によるサミットが同ホールである。(有岡英俊)

2009年9月27日
中国新聞

第8回全国草原サミット・シンポジウム開催までのあゆみ

- 2007年 11月16日 「第8回全国草原サミット・シンポジウム」の北広島での開催が決定
2008年 2月5日 ◆第1回 草原サミット・シンポジウム実行委員会
6月26日 ◆第2回 草原サミット・シンポジウム実行委員会
8月24日 全国草原サミット・シンポジウムプレイベント『はらっぱ談議』実施
9月22日 ◆第3回 草原サミット・シンポジウム実行委員会
2009年 2月10日 ◆第4回 草原サミット・シンポジウム実行委員会
3月24日 ◆第5回 草原サミット・シンポジウム実行委員会
25日 予備申込みの受付開始
4月20日 基調講演者が中貝宗治市長（豊岡）に決定
6月11日 大田市長訪問
25日 参加登録，現地見学会，パネル展示申込みの受付開始
◆第6回 草原サミット・シンポジウム実行委員会
7月 1日 サミット参加首長，シンポジウム講演者などに参加依頼状を送付
14日 第2分科会の内容が決定
24日 第3分科会の内容が決定
25日 パネル展示申込みメ切
8月13日 第1分科会の参加校が確定
25日 ◆第7回 草原サミット・シンポジウム実行委員会
9月 4日 現地見学会，サミット，シンポジウム，懇親会への参加申込みメ切
広島大学においてサテライト分科会実施
17日 ◆第8回 草原サミット・シンポジウム実行委員会
26日 現地見学会
27日 第8回全国草原シンポジウム
28日 第8回全国草原サミット

参加者数

サテライト分科会：14人

現地見学会：101人

草原シンポジウム：370人

第1分科会：176人，第2分科会：73人，第3分科会：70人，

懇親会：88人

草原サミット：94人

※ 会期を通じて延べ162人が芸北地域の民宿などに宿泊した。

実施担当者

設営：清見宣正，沼田真路，原田靖久 **見学会講師：**佐久間智子，白川勝信，和田秀次

受付：池田慶子，河野弥生，小宮啓吾，新保勇介，柳崎誠子 **司会：**近藤紘史，森脇誠悟

音響・照明：池田直哉，上田俊則，田村道三 **懇親会：**川内信忠，近藤紘史，藤澤通

映像操作：白川勝信 **記録：**竹下靖彦，細川敏樹 **進行管理：**越岡真喜子

第8回全国草原サミット・シンポジウム報告書（2010年3月発行）

制作・発行：草原サミット・シンポジウム実行委員会

印刷：佐々木印刷株式会社



雲月山



千町原



霧ヶ谷湿原